
悪魔買い

みるみるく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔買い

【Nコード】

N8371E

【作者名】

みるみるく

【あらすじ】

「魔王は腐れ神の飼い主、プリキトスを血眼で探している。お前の喰らうメイトの裁判など、もう忘れられているだろう。」ロキとドラゴンに喰らうメイトされ、悪魔界に逃げ込んだマヌケな中学生、藤原に改造人間ロバートはそう告げた。「実はワシら改造人間もプリキトスを探している。魔王との取引に使うのだ。改造人間撲滅運動をどうにかしてやめさせなければ。そうだ、お前人間界から連れてきてくれないか？なにせ、ワシはこの風体だ。人間界を歩くと即、スカウトそしてタレント行き。ただ、藤原、お前には強さ

がたりん。・・・そうだ、いい方法がある。」

第一話

今日、新聞に「悪魔セールのお知らせ」が載っていた。

普通の人なら見落とすくらいの大きさ。自慢じゃないけど俺は注意深い方である。

新聞をすみからすみまで読むのだ。

近所のじいさんが死んだ広告からエッチな映画の題名まで。この広告をみたのは俺だけかもしれない。

・・・ラッキーなのか？

藤原は不思議におもったけど、店を覗いてみることにした。

そこは雑居ビルだった。近所でも有名な幽霊が出ると言う噂のビル。バブルの時に立てられたのか、パンテノン神殿を思わせる（実際にはかなりかけ離れている）作りだった。

入り口には枯れ果てた噴水があり、大事なところが欠けた小便小僧が呆然と立ち尽くしている。

壁には古いチラシが乱雑にはられ、よく見るとフロアレディ募集。

時給850円。

（安すぎねえ？）

年齢50歳位。

（これがまさかの悪魔の正体か??）

帰ろう、ばからしい。と思ったとき、地下からかわいい女の子が出てきた。小学生くらい。

お母さんと一緒に階段をのぼってくる。手には子犬くらいが入る段ボールを抱えていた。

「かわいがるのよ」とお母さんの声。

段ボールは何となくゆれている。

（おお、もしや悪魔。）

彼女を筆頭に何人かダンボールを抱え、地下から出てきた。

これはまずい、逃したか？

売り切れては大変と地下を駆け下りた。

入り口の枯れた観葉植物で迎えられ、床のチラシですべりそうになる。

エナメルのはげた汚いソファー。

不自然な舞台。

いかにも場末のストリップ劇場。

「あのう・・・広告を見たんですけど・・・悪魔をください」

藤原は店の奥に声をかけた。2000円しか持っていないけど・・・。
すると中から汚らしい男がでてきた。かなり太っている。

男はオデコをピシャツとたたき、「あいや！今売切れてしまった！」

・・・すぐ買いにくればよかった。後悔先に立たずだ。

残念。悪魔をひと目みたかったな。とりあえず床に落ちてたチラシをゲット。

肩を落として家路に着く途中さっきの女の子と母親に追いついた。

藤原はこっそり後をつけることにした。

女の子とお母さんは連れ立って家に入っていた。

そこはお金持ちイゝな家だった。

とりあえず家突き止めたのでいつか悪魔をひと目みるチャンスはあるだろう。

毎日学校の帰り、わざわざ遠回りしてその子の家の前を通ったりしたけどなにも変化なし。

その家はかわった様子もないけど、いつ見にいつても静かだった。

・・・むしろ静か過ぎる。

朝、夜みんなでご飯を食べる時間帯でも家に明かりもついてない。

金持ちは外食派なのかもしれないが。

最近帰りがおそいのでおかんがからかう。

「恋人でもできたんちゃう？」
「こういう時のおかんは最悪だ。少しでも聞き出そうとリングを剥いてくれたり、あれこれと手を尽くす。うっとうしくなり藤原は部屋にこもった。」

もう一度じっくりチラシを見てみる。

悪魔セールのお知らせ。

・生後一週間のスライム。水に触れると増えますので注意。
一緒の入浴はお控えください。

誰がスライムなんかと風呂にはいるかね？

・まだらたまご。

何が出てくるかわかりません。

ゾンビなら引き取ります。

ゾンビなんて絶対いやだね。うえっ、最近しんだ近所のじいさんだ
ったらどうしよう？

すると前回見逃した広告が目飛び込んできた。

・生後一週間ドラゴン。

大型犬を飼ったことのある人なら大丈夫。

大きなラブラドル犬とお考え下さい。

ドラゴンだって！！そっか。ドラゴンは悪魔の乗り物だもんな。ド
ラゴン欲しいな。

欲しいな～欲しいな～欲しいな～欲しいな～欲しいな～欲しいな～
欲しいな～欲しいな～

そっか！あの子はドラゴンを買ったんだ。一番乗りっぽかったもの。
大型犬を飼ったことのある人ならOK？

じゃあ、あの子の家は金持ち〓大型犬も飼えるはず〓ドラゴンも飼
える！

・・・そんなバカな！！！大きなラブラドル犬のわけないだろ！
ドラゴンだぞ！！

藤原はだんだん心配になってきた。

あの家族食われてんじゃねええ？

この考えは恐ろしすぎて、吐き気がした。

とにかく明日、様子を見に行こう。その夜は悶々とねむれず、何か

身を守るものを考えた。にんにくを持っていくのか、それとも十字架？

とんち勝負になったらどうしよう？

餅にいれて食わねばなるまい。

そのうちうつと眠りについた。

次の日、藤原は手持ちの中で一番かっこいいＴシャツとジーンズを着た。

おかんにデート？とおちよくられる。

デートなものか。息子がドラゴンに食われるかもしれないのに？

実は昨日親あてに簡単な遺言を書いておいたのだ。

ドラゴンを退治していきます。

もし帰ってこなかったら死んだとおもってあきらめてください。

そして例のチラシをホッチキスでとめた。

ああ、おかんよ。もし俺が死んだら本当にごめんな。

しおらしい気持ちでトーストをほうばり最後のカフェオレを飲んだ。

最後の晩餐にしてはわびしい。

そして戦地に赴く気持ちで家をあとにした。

昨日とはうつて変わった曇り空で一雨来そうな感じだ。

相変わらず、今日も人気がない。

玄関のパンジーが水をやってないとみえて枯れている。

八人の小人が張り付いた笑顔で藤原を迎えた。

藤原は勇気を出してインターホンを押す。

ピンポン。

「はい」

あれ？食われてるんじゃないの？

ガチャッと扉が開き例の女の子が立っていた。

「荷物は？」

・・・。

「いやあ、そのお、あのう荷物はない・・・みたいですよ・・・」

「やい、不審者め。みいこの家になんの用だ！」

藤原はしどろもどろで答えた。

「実はこの前悪魔のセールでお宅をお見かけしましてそのう・・・」
みいこはふうとため息をついた。

なんだかんだいってみいこの奴は家族を呼ぶこともなく金切り声で
近所に知らせるわけでもなかった。藤原は少し安心し帰ろうとおも
ったその時である。

見てしまった。

・・・見てはならぬものを。

みいこのスカートの影からなにやら蠢くものを。

ソイツは真っ黒のまんまるの目で藤原を見ていた。

かわいい・・・。あの目は子犬の目だ・・・。

下から見上げるあの目。グラビアアイドルがよく使うあの手法。

藤原は目が離せなくなった。

「中に入れ」

みいこが命令をくだす。はいはいと藤原は従ってしまった。

中は吹き抜けの天井。シャンデリアがきらめく。藤原はふかふかの
スリッパに足をすべりこませ、みいこの後についていった。

ソイツはぴよこぴよことみいこの後を追う。

ぴよこぴよこはねるたび、前足がぶらぶら動く。カンガルーの子供
くらいか。

皮膚はかぎりなくこげ茶だが、光にあたるときらきらし、深緑に輝
く。

よく見ると細かいウロコになっていた。触ったらスベスベなんだろ
うな。

体のわりにしつぽはおおきくあつかいづらそうだ。

ソイツは振り返り、また例の目で藤原に微笑む。

かゝわゝいゝい！！！！藤原の顔は緩んだ。

みいこは言う。

「お前臭い。風呂にはいれ」

ええ？おとつい入ったぞ？臭いか？

しかし、金持ちの風呂に入ったことがないので、興味もある。

藤原は承諾した。風呂はさすがにすばらしい。

なにもかも新鮮で藤原は全く考えなしに風呂にはいった。

「ドラちゃん、晩御飯ちよっと待ってね、今、洗ってるから」こんな声が聞こえてきた。

・・・晩飯？オレ？

まずい、まずいぞ。よし、逃げよう。

その時天の助けが来た。もっとも藤原にとってだけど。

ピンポン

「みいこ、いるんだろ。約束どおりお金もらいにきたんだけど。」

ひとり100万くれるって本当だよ〜うそならただじゃおかないから！またいじめてあげるからね」

といいながら、がやがやと3人の行儀のとても良い女の子たちが入ってきた。

みいこはお金是用意できてない、ごめんなさいと言っていた。

カツアゲか！？ゆるせん！！100万だって？

カツアゲにも礼儀つてもんがあるんだよ。

500円だ、500円！！

自分の身の危険も忘れ、ガキ達に説教するためとびだしたのだ。

「カツアゲなんてくだらないことするな・・・うあ・・・あ・・・
・・・！！」

見てしまった・・・。

彼女らがあのドラゴンに頭から丸呑みされてる所を。

もう一人の女の子はもう腰がぬけてしまって、お母さん！と叫び続けている。

二人一度に飲み込むその姿はさっきのかわいい表現とは真逆。そして、一気にのみこむや3人目も頭からガブリっといってしまった。

口から2本の足が突き出るところなんて吐き気がしてきた。藤原は泣いていた。俺もこうやって食べられるんだ……。こんなところで。

藤原が目をつぶり覚悟を決めていたとき、みいこが声をかけてきた。ほら、その男も食え!!

やめてくれ、俺は何にもしてないぞ!!

願いは届かず藤原は頭から一気にのみこまれてしまった。

ああ、俺はもう死んでしまっ、死ぬってこんな感じなのか？

この生暖かいねちよねちよした感じ……

母親の羊水に抱かれてるこの感じ……

なんかおかしいぞ？と思ってる途端に背中に痛みが走り、まぶしい世界に放り出された。

ものすごい顔でドラゴンが睨んでる……。

なぜ？俺、やっぱ、臭かった？

……助かったのか？俺。

みいこはおびえた顔で藤原を見ていた。

「どうしたの？ドラちゃん、コイツ食っていいのよ」

しかしドラゴンは藤原を睨みつけるだけだった。

その時、頭上からラッパの音と共に見てるだけで恥ずかしい天使のコスプレをした悪魔が舞い降りてきたのである。

体型は太ったパグを思わせ、顔は幼稚園の芋ほりでしか出くわさないびつな形の芋に似ていた。

ソイツが純白の天使のコスプレをし、白いちっちゃい羽を羽ばたか

せ、手のラツパを吹き鳴らし、こう言った。

「はい、ドラゴンさん。残念。」「喰らうメイト」ですわあ。

二丁目のロキさんもたった今、飼い主の山下はんに、藤原食って来いと命令されはったとこです」

なんだ？喰らうメイトって？それに俺は自慢じゃないが、いままで人を恨んでも、恨まれたことなんてないぞ？これは何かのまちがいかな？

「なんです？喰らうメイトって・・・？」

今俺の第9感辺りが俺に教えている。

なんか知らないが、時間を稼ぐんだ！

相変わらずドラゴンはそのすごい顔で藤原をにらんでる。

さっきまでのかわいらしさはどこへいったんだ？そういえばガキ三匹食ったあと、かなり大きくなったような・・・。

天使もどきはラツパの調子を見ながら答えた。

「悪魔法、第1192条。複数の飼い主が同時に同じ人間に食べ命令したとき、食われる人間は悪魔を選ぶ権利を得る。

そいつが選べないときは、悪魔界にて裁判で決めるものとする。」

無理だ、絶対。コイツなら食われてもいいなんて思えるわけがない。一体誰だ？俺を喰らう命令出したのは？

そういえば、二丁目の山下って。

・・・あのクラスの？山下か？？

なんでだ？俺に恨みでもあったんだろうか？

とにかく山下に会おう。

藤原はそう決心した。

「山下はんに会いまっか？ほな、ちょっと待って。話つけてきまっさかい。」

せやけどロキさんいうたら、こわおまっせ。食われ甲斐もあるっちゃうもんだんな。」

天使もどきはヒヒヒと笑いパタパタ羽を動かし、便所の窓から飛び

立っていった。

どうしてくれるんだ！なんで食われなきゃいけない？この若さで！藤原はみいこに詰め寄った。

「お前何したのかわかってるのか？こんなことになって。友達3人も食わせてその上この俺まで！！とにかく山下に聞いてみないと」藤原はそう言った。

その時小さいか細い声が聞こえてきた。

「頼むよう、助けてくれよ。ボク、裁判なんて絶対いやだよ・・・」

「んん??」

「お願いだよ、噛み砕いたりしないから、このボクに食べられてくれよう」

「んんん??？」

まさか・・・。

振り返るとさっきのドラゴンがあキラキラしたかわいい黒い目を涙でしばたかせ上目遣いに藤原を見上げた。

ドラゴンよ、お前、なぜしゃべれる??

しかしかわいい・・・。

いやっただまされてはいかん!!

「ロキ様は一気に食べてくれないよ、片腕から、片足から順番に食べていくんだから。」

それはもう3日くらいかけて」

それはいやだ！一気に飲み込まれるのもいやだけど、味わわれるなんてまっぴらだ！

とにかくあの天使もどき野郎が戻ってくるまでみいこの家で待つことにした。

勝手しらずの他人の家で冷蔵庫の中からビールを取り出し一気に飲んでむせこんだ。

こんな事、シラフで耐えられるか

「親はいつ帰ってくる？こんなところ見せられないだろう?」

みいこはもじもじしながら答えた。

「パパとママは出張でいないから・・・」

ああ、そうか。だから家がいつも暗かったのか。しかしこんなチビをおいて？

キッチンの床にコードレスが転がっていた。

なぜか110番の番号が押され、発信されることもなくそのままだった。

しかも床の上には玉ねぎだの、ピーマンだのが干からびて張り付いていた。

あんなチビが料理するか？第一キッチンに手が届かないはず。

両親は出張？おかしいなあ・・・。

しかし藤原はもうそのことを深く考える余裕がなかった。

山下が本当に俺を喰らうメイトしたのか、なぜ？

ロキに会うのはこわかったけど、クラスメイトに裏切られた思いのほうが強かった。

一時間くらい座り込んでいただろうか？

ピンピンピンポーン

チャイムで気がついたときはもう辺りは暗かった。もしかしてみいこの家族が帰ってきたのか？

みいこはドラゴンにもたれ、放心している。

藤原は玄関へ急いだ。事情を話そう。しかし、玄関に立っていたのはみいこの家族ではなかった。

・・・これがロキ・・・。

見るものを圧倒させる存在感。

髪は美しい銀髪。うすむらさきの瞳。

背は高く筋肉がもりあがっている。

顔は猛々しく口元がせせらわっている。

ウエスタンブーツに革ジャン。

かつこいいー！！！！

ロキは藤原を見るとため息をついた。

「おい、ぼうず。とんだ災難だな。オレの飼い主がお前を食えって
いうから。」

オレを恨むなよ」

ロキの後ろから山下がのぞいている。

「とにかく、山下ちゃんと話させてください」

「ああ、好きにしる。オレはいつでもかまわない」

ロキは藤原の横をすりぬけ、みいこの家の中へはいつていった。

玄関で藤原は山下と二人つきりになった。

「山下、俺になんの恨みがある？」

山下は少し下を見てたが、ぽつぽつ話し始めた。

「・・・可奈子。・・・おれ、今日こくったんだけど。アイツ、お
前のこと・・・」

可奈子？藤原の初恋の女性。でも小学校のころからずっと可奈子に
いじめられてきたぞ？

これは何かの誤解だ。間違いだ。

「はつきりいってお前が目障りだ。」

おれはロキを10歳のころから育て上げてきた。おれの命令なら何
でも聞く。喰らうメイトなんて・・・はじめてだけど！」

山下がそう叫ぶようにいうと、藤原を睨みつけてきた。

10歳からロキを育てた？あの大きさにするのにどれくらいかつ
たんだろう・・・。

悪魔を買うような奴はやっぱり狂ってる。

中ではリビングのソファにロキがいた。

長い足を組み、（悪魔界では靴を脱ぐ習慣がないらしい。）ひじを
もたせてリンゴを食っていた。

かなり離れた所にドラゴンとみいこが固まって隠れていた。
みいこは目を大きく開き、声も出ない様子だった。

「話はすんだのか？」足を組みなおしながら、ロキが言った。

藤原は答える気力もなく、かすかにうなずいた。

コイツは飼い主の言うことならなんでも聞くんだ。

かつこいいいと思った俺がバカだった……。

その時、例の天使もどきが便所の窓からはいってきた。

心なしか、少し薄化粧してるように見える。

あれは口紅……。コイツ女だったのか？

天使もどきはちらちらロキの方を見ながら話し始めた。

「お顔あわせもおわったみたいですね、藤原はん、どちらにしますう？」

わてはロキさんの方が、（ちらつと流し目で見、ロキが咳き込んだ）いいと思うてますのんやけどどうう」

藤原はいままでの怒りがこみ上げてきた。手当たりしだいのを皆になげつけた。

「お前たちは狂ってる！」叫び続けた。

ロキは藤原を肩にひょいと担いだ。

「離せ！！」と暴れたがロキの馬鹿力では動く事すら出来ない。

「少しは落ち着け。咽喉がかわいた。酒でも飲みながら話そう。ここには酒もない。」

ロキにどこに連れて行かれるのか不安だった。

外には家の中に入るか迷ってうろうろしてた山下がいた。

ロキが藤原を担いで出て行くのを見て、明らかに気を悪くしたみたいだった。

「おい、ロキ。藤原なんかどこつれていくんだ。

おれの援護をしろ。もう人間食わせてやらないぞ」

ロキは歩きながら振り返らず、バカにしたように背後の山下に手を振った。

「……降ろしてもらえませんか？もう暴れません……」

急に降ろされたのでしりもちをついた。

あいたたた……。

「質問して・・・いいですか・・・！」 息も絶え絶えに叫んだ。

「ああ、なんだ？」

「どうして・・・他の人に見えないのに・・・俺にはあなたがみえるのですか？ドラゴンも！あのバカ天使も！！」

「それはこちらの意思だ。見させようと思うものには見えるようにできる。」

「・・・。それじゃあ、悪魔は人を喰わせるために飼うんですか？ひどいです。あんまりです。」

「そういうお前も悪魔飼いに少しでも興味を持ったんだろう？あんな小さな広告見て、本気で覗きに来るほどの馬鹿がいるとはな。本来はクレジットのブラックカードを持つてる奴等にしか宣伝しない事になってるはずなのに。このところ、不況だから一般にも知らせたんだろう。一般の馬鹿は来たら来たでストリップショーに出す事も出来るからな。」

あんなセール興味なんて持つんじゃないかった。

「ここで、なんか食おう」

そこにはこう書かれていた。

） B A R 飢えるカム ）

ここにこんな店あったつけ？

店は薄暗く、目が慣れるまで、中の様子はわからなかった。

入ってカウンターに席を取る。

ロキは「いつものを頼む」といい、藤原にメニューを渡した。

「なんでも、食っていいぞ。最後の晚餐だ」

特別メニュー

うじむしのミルフィーユ ナメクジソース仕立て

・うじむしを腐った生肉で培養し、何層にも重ねた贅沢な一品。

（なお、生肉は00病院直送Ope後の医療廃棄物を用いております。）

ここまでメニューを読み、気分が悪くなった。

「俺、けっこうです・・・食べれる気分じゃない」

「そうか？」

ロキはなにやら、骨付き肉のようなものを骨ごと食べ始めた。そのものすごい音は食われる時の恐怖を思い起こさせた。

藤原はますます気分が悪くなってきた。

いわゆるBARってやつに行つた事はないが、これだけは断言できる。

普通のBARでは、こんな気味の悪いメニューがあるはずもないし、人間解体ショーのポスターなんてまず貼つてない。

バーテンは一つ目女で、（体のラインはとてもセクシーだった）、周りの客も化け物ぞろいだつた。

肝心なところの包帯がほどけかけているミイラ男。狼男とドラキュラが仲良く話しこんでいる様子は怪物くんいらいの眺めだつた。

店内に入ろうとして一つ目女に追い返され、「入れるー！」とドアを蹴りまくっている人間の男。

たぶん普通のBARと間違つて入ってきた酔っ払いだろう。

ケルベロスを従えた大男が、ロキに挨拶をした。

「よお、ロキ。探したぞ。この間、裁判でプリユキトスが見つかったらしく天界が探しまくつてる。懸賞金が・・・」

・・・男はそこまで言いかけて、藤原の姿に気づき口をとぎした。プリユキトス？懸賞金？

大男は「とにかく悪魔界に戻る方法を考えてくれ。プリユキトスはわしらの取引に使えるかもしれん」と言つた。

ロキは、今は込み入つた話があるので席を外してほしい、と言つた。大男は意地でも話しかけようとしたが、一つ目女が割り込んできた。

「ロキ、馬鹿な人間男が入れるっ！ーて騒ぐの。追い返して。」

ロキはビールを一気に飲み、玄関のドアで騒いでいる人間男を殴りつけに行つた。

ロキがいなくなると大男はため息をつき、店の奥に帰っていった。近くにロキがいなくなり、大男もいなくなると、店の悪魔ドモが遠慮なく見てくる。藤原はイスに縮こまっていた。

突然、ロキが戻ってきた。なぜかあわてている。

「坊主、お前、悪魔界に逃げろ！今すぐ！」

「えええ？」藤原は耳を疑った。

「ガキのドラゴン、乗るにはいい大きさになっているだろう。うまく逃げる。早く！」

ドラゴンと逃げろ？そんなことが可能なのか。

しかしここは早く出たほうがいい。そして可奈子に一目会いたい。

藤原はそれしか考えられなかった。

B A Rから出ると、救急車が止まり、犬が泣き喚き辺りは騒然となっていた。

キレイな女の人がおろおろしている。さっき殴られた男の彼女か。

ロキなんかに殴られたらひとたまりもないだろう。家に寄ろうか考えたが、親を巻き込みたくない。

じゃあ、可奈子は巻き込んでいいのか？

どうなんだ・・・？

そもそも可奈子が俺を好きと言ってくれたから山下が俺を食わせようと思ったハズだ。

可奈子とはつくに巻き込まれているはず。

一目だけ・・・。会いたい。

可奈子の家は近くだった。きれいなマンションで藤原の市営住宅とは大違いだった。

いきなり行くのも気がひけたのでまずT E Lしてみることにした。

「もしもし藤原？何何？どうしたの？」

「うん。・・・。今日山下君に聞いたんだけど・・・。」

「あああゝ今日は最悪だったよ。山下がつきあえってうるさくってさあゝ」

えっ？

「ごめんね、勝手に名前出しちゃって。恨まれたでしょう」

藤原は呆然とした。

「今どこにいるの？」可奈子の澄んだ声が耳に響く。

「・・・家にいる」藤原はあせった。

まさか君のマンションの下までできるとはいえない。

「どうしたの？やっぱなんかあった？」

「・・・なんでもない、声が聞きたかっただけ・・・さようなら」
「もしもし??もしもし??」

ホントかっこわるい。本気にするなんて。

可奈子みたいなかわいい子が俺の事なんて。

わかってたはずなのに・・・。

藤原は道端でワンワン泣いた。

どれくらいそうしてただろう。

外はもう真っ暗になっていた。

真っ黒の空に月が本当にキレイだった。

小雨も降っている。

泣きすぎてほてった顔に雨が心地よかった。

これでいい・・・。

もし本当に可奈子が俺の事を好きでいてくれたなら俺が失踪すれば
悲しむところだった。

可奈子に悲しんでもらえないのは淋しかったが、仕方ない。

これで未練がなくなった。

みいことドラゴンのところへ行こう。

こうなると頼りはあのドラゴンだ。

しかしみいこを巻き込むわけにはいかない。

まだ、あんなチビだし、親だって心配するだろうから。

みいこの家は真っ暗だった。

藤原は電気をつけ、上がりこんでいった。

リビングでみいことドラゴンが真っ暗な中、身を寄せ合っていた。

「・・・おかえり」

「ああ」

ドラゴンはまだがいなく大きくなっていた。女の子3人食ったんだもんな。

こんなになるまでみいこは何人食わせたんだろう？

「・・・どうしたの？なんだったの、アイツ何言ってたんだよう」

「逃げろって言ってた」

自分でも驚くくらい声が落ち着いていた。

「え？」

ドラゴンも首をかしげた。

「ドラゴンに乗って逃げ続ける。そう言ってた」

「みいこもついて行く。ドラちゃん是我的友達だもの！」

「親が心配するぞ。遊びじゃないんだ。」

しかしみいこは家のなかを歩き回り、おやつ、ジュースなどをかき集めはじめた。

明らかに遠足気分じゃねえか！

みいこは大きなリュックを藤原にハイツと渡した。

「お前がもて」

「・・・お前いうな・・・」

「親が心配するぞ、書置きしておけよ」

みいこは聞こえないふりをした。

藤原はそれを、別れのつらさをこらえてるゆえだと思った。

大きな間違いだったが・・・

外に出ると雨は止み、空にはキレイな天の川が見えた。

可奈子と見ることができのならどんなにすばしかっただろう。

感傷に浸ってる場合ではない。

ロキがどんなやつであろうと、絶対逃げ切ってやる。

喰らうメイトが何かしらないがこんな馬鹿げたゲームに負けるわけにいかない。

藤原はそう決心した。

まず悪魔を売っていたあの親父に話をしなくてはいけない。
もう悪魔なぞ売るなど。

第二話

悪魔界に行くことができるなんて思ってもみなかった。

このまがまがしい世界は生まれる前からずっと存在していたのだ。

行き方は簡単だった。まず飢えるカムに行く。ここの裏口に悪魔界に通じる扉があるのだ。タダではもちろんしてもらえない、金を支払うことになった。藤原が悪魔を買うため持っていた20000円を差し出したがかなり足りないらしい。

好きに記入していいよ、とみいこが渡した小切手にバーの女は2億円という数字を記入した。

裏口の扉を開けると、そこは駅になっていた。結婚式につかう白鳥のゴンドラがおいであつた。

「ブチュツ」スイッチが下品な音をたてる。

・・・人間界ともおさらばか。

藤原が感傷に浸っているときにみいこは上機嫌だった。白鳥のゴンドラが彼女の乙女心に火をつけたらしい。

真っ暗な中に進んでいき、次第にありえないほどの高速で動き出した。いつ壁にぶち当たるか藤原は不安で縮こまっていたが、みいこははしゃいでいるし、ドラゴンがゴンドラ内でもぞもぞ動き、グラグラ揺れた。

・・・もしここで落ちたらどこに行くんだろう・・・。

そんなことを考えているうちじょじょに明るくなってきた。

と、同時に線路が途中で切れている事に気づく。

やばい！

「つかまれ！！線路がなくなってる！」

声を限りにさけび、藤原達はゴンドラにつかまった。

線路が途切れ藤原達は悪魔界に放り出された。

藤原達はどうとう悪魔界に来てしまった。

・・・息が詰まる。空気の質が違うのだろう。

よども、そして重たかった。

陽射しだけが妙にまぶしかった。

地面はひび割れ、人間世界の植物らしいものはまったく見当たらない。藤原達は他の悪魔達に見つからないよう隠れ家を探す事にした。しかし周りは悪魔食い植物、そしてやけに大きな虫ばかり。

大きなアルマジロと思ったら団子虫だし、ボディーボードくらいの大きさのゴキブリが這いずり回っている。

たぶんゴンドラにまぎれて人間界からやってきたのだろう。みいこは大きな虫に失神しそうになっていた。

やっと見つけた洞窟の中で這い回っている虫を追い出し一息つけるように工夫した。

あいかわらずみいこは手伝いもせずぎゃーぎゃーと虫から逃げ回っている。

藤原はもうあきれて、みいこの体を這っているゲジゲジを取ってやらなかった。

そして横になりこれからの事、そして今までの事を思い返した。

気になるのは以前の世界の記憶がなくなりかけていることだった。

この空気のせいだろう。この重苦しい頭をぼんやりさせる空気が吸いたくなくて何度息を止めただろう。

しかし本当に忘れたい事は鮮明に覚えている。そのことさえ忘れればみいこにもう少し親切にできるのだけど。

・・・それは悪魔売りを生業にしてるおっさんに会いに行った時の事だった。

雑居ビルのB1F。

初めに来たときは気づかなかったが、ここは飢えるカムで宣伝ポスターが貼ってあったストリップ劇場。

皮膚一枚、丸々脱がしてしまう人間解体ショーの舞台だったのだ。どうりで舞台から変なにおいがすると思った。

店に入るとおっさんは出て行けと怒鳴りつけた。

「お願いです。悪魔を売るのはもうやめてください」

おっさんは笑った。

きたない歯茎をむきだして。

「お前さんは悪魔を売るなど言うが、悪魔そのものはそんなに悪い奴じゃない。

あいつらはそれぞれ楽しんで生きているだけや。

自分の手を汚さず、悪魔に殺させる。悪いのは人間やないか。

悪魔が売れるのは不思議と今の日本のような平和な国なんや。戦争がおきると、逆に売れなくなる」

おっさんが言うには生死を間近に見る機会がなくなっただけで人の良心が狂うらしい。

人を食わせてもなんとも思わないそういう奴らが増えるっていうことだ。

いわゆる刺激不足ってやつ。心の天秤が狂うのだろう。

中でも親食いがめつきり増えてきて始末に困っているらしい。

みいこがやけに真剣に聞いてたのが、印象に残った。

藤原がふうつと舞台に何気なく腰をかけると

「どうだい？今日の舞台で脱いでみるかい？どうせ死ぬなら派手に死ななくっちゃ！」

おっさんは股間をかきながら真剣な顔で藤原に話した。

藤原は猛烈に首をふり、みいこが大笑いしてるのを睨みつけた。

おっさんは、笑ってるみいこをじつと見つめ、

「おんやあ？このガキには見覚えがある。母親と来てたろう。

売約済みのドラゴンを金をつんでつんで、譲ってもらったんだっただけな！！

しかしまだ、1週間にもならないのに、なんだ、このドラゴンの大きさは……。

お前まさか親を……」

「ドラちゃん、コイツ食っちゃって！」

そしてドラゴンはおっさんに飛びつき、藤原はドラゴンの口から突き出してるおっさんの足を引っ張った。

しかしそんな事で助けられる事もなく、ドラゴンは舌なめずりをしていた。

藤原ははじめてみいこの頬を叩いた。

いろいろおしえてくれたおっさんに申し訳なかった。

みいこはグスグスン泣いていたが、かわいそうだとは思わなかった。

悪魔界に来たあとも、みいこは藤原のビンタが効いているのかめつきり口数が少なくなった。

少しは後悔してるんだろうと思って安心していた。

藤原たちはみいこの持つてきた食料を食べつくしてしまった。

このままだと飢え死してしまう。

「ドラゴン、俺たちが食べれるようなものはないか？」

「街に行けばあると思うよ。人間を飼ってる奴らがいるもの」

「街？人間飼い??」

「・・・それは？」

「人間が悪魔を買うように悪魔も人間を買えるんだよ。あと、合体させるのに人間を使ったりするね」

これ以上、聞きたくなかったが、食料をゲットするために良い方法を思いついた。

「ドラゴン、俺たちを飼ってるふりをしてくれないか？そして街に行き食料を買ってくる。」

こっちの貨幣価値がわからないけど・・・」

「それなら大丈夫だよ。人間の血で支払えばいい。少し指を切って2、3滴でいい値段になるよ」

血がお金になるのか・・・。

とにかく、街に行ってみよう。ドラゴンの背に乗り、藤原達は街に向かうことにした。

南の方角に巨大なイルミネーションが浮かんで見える。
そこに街が広がっているらしい。
前方にボワンと街の景色が見えてきた。

街は胸の悪くなるようなけばしいイルミネーションで満たされていた。

看板が何十にも重なり、香港の景色のようだった。
しかしその10倍ものケバケバしさである。
街全体が毒々しい毛虫を連想させた。

道は悪魔にあふれ、どっちを向いても悪夢のようだった。
ロキの2倍はあろうかと思われるベルセルクが巨大な馬に乗り闊歩していた。

大ムカデが這い回っている。

時々大ムカデに轢かれ、死ぬドン臭い悪魔もいた。

露店もいろいろあり、例の天使もどきのきていた衣装も売っていた。
天使グッズはいろいろあり、あきらかに流行っているようだった。
ロキくらいの大男が天使の羽をつけ、チュチュを着てるところはコメントを見ている気分だ。

悪魔たちは藤原とみいこを興味深々にみていたが、藤原たちを乗せてるドラゴンを見て、手出ししないようだった。
そうだ。明らかにドラゴンは大きくなっていた。

この調子ででかくなればロキに勝つこともありえないことはない・・・。

藤原は一種の希望をいだいていた。

もし、このままドラゴンと仲良くなり、そしてロキに勝つことができれば俺は助かる・・・。

ドラゴンは「ここだあ」とスーパーのようなところに入っていた。
郊外的大型スーパーの天井を3倍高く、広さを5倍足したくらいだ。

品揃えも人間のスーパーと変わらない。

なにより目をひいたのは人間が悪魔に連れられ、買い物に来ているところだった。

人間は悪魔に気に入られ飼われるくらいだから、非常に容姿が整っていた。

人間が犬に洋服を着せるように、かなりきわどい衣装を着せられている。

藤原は鼻血が出そうになった。

みいこが明らかに対抗意識を燃やし自分もあんなの着てみたいと言出した。

・・・やめてくれ・・・。

ドラゴンは尻尾を振りながら売り場を練り歩き、藤原たちは欲しいものを次々かごに入れた。

値札には「血1CC」とか、「血0.5CC」とか書かれている。

財布の心配なく買い物するのは楽しかった。

かご10個を山積みにし、レジに向かった。

レジでは「マッド看護婦」といういでたちの女が採血している。髪は焼け焦げて垂れ下がり、皮膚が腐敗しかけている。あまり気持ち悪がるとかわいそうだと、藤原は笑顔で腕をさしだした。

看護婦はニンマリと笑い、きつたない指で藤原の血管を探っている。藤原はほんの少し採血しただけで済んだ。

みいこはかなりふらふらになっていた。巷で噂の天使グッズやきわどい衣装なんか買うからだ。

しかしみいこはかなりご機嫌だった。

手には「知らなきゃ死んじゃう悪魔の掟」という雑誌を持っている。藤原が雑誌を見ようとするとみいこはさっと隠した。

・・・あやしい・・・。藤原が追求しても何も話そうとしなかった。買い物は無事終え、出口に向かおうとしたとき、藤原はあっと叫んだ。

・・・可奈子だ。

あのショートがよく似合う大きな瞳。

きれいな形の唇……。しかもきわどい衣装を着せられている。

藤原はあやうく再鼻血になるところで、心の声が警告した。

……。山下が？もしかしてロキがいるのか！

ドラゴンの上で雑誌を食い入るように見ているみいこをせかし、物陰に隠れた。あれは間違いなくロキだ。

街なんかくるんじゃないか。……。

「みいこ！お前がもたもたくっだらな衣装に手間取ってるからこんな事に！

とにかくお前ら先に外で待っててくれ。

目立ってしょうがない」

みいこはムツとした顔で「わかった」といい

「ドラちゃん行こう」と言った。藤原は目が離せなかった。

ロキが可奈子を飼っている？

山下がいるにちがいない。

突然、スーパーの入り口が騒がしくなった。

みいこが警備トロールと一緒に店に戻ってきたのだ。

……。あのバカ。目立ってどうする……。……。

みいこは藤原のほうを指でさした。

「あの男が万引きしたんです。私みたんです」

……。えっ？

その言葉はスーパー中の悪魔を注目させる効果はあった。

藤原はトロールの足をすりぬけ、この場を逃げる決意をした。

（ロキに見つかるとはじゃないか！）

しかし、最後のトロールの足を潜り抜けようとしたとき見てしまった。

みいこの勝ち誇った目を……。……。

藤原は頭が混乱し、店の外に飛び出した。

ドラゴンの姿は見当たらず、藤原は見知らぬ街を無我夢中で逃げ始

めた。

いろんな悪魔にぶつかりながら、藤原は隠れるところを見つけた。けたたましいサイレンが鳴り街全体が騒然となった。

街中のベルセルクに呼び出しがかかったみたいだった。4、5人はいるだろうか。

路上の悪魔が逃げ惑い、そして馬に踏み潰された。

ベルセルクは巨大な刀を振り回し邪魔な悪魔を投げ飛ばしていた。

（やばい……。俺ってそんな悪いことした？）

そして、右、左と逃げるうち裏道を見つけ飛び込んだ。

にぎやかな表通りからうつてかわって静かな裏通りに一息ついた。

（みいこ、何考えてるんだ？俺が見つかったら大変なことになるのに……。）

……。あの勝ち誇った目。思い出してもぞつとする。）

藤原は悲しくなった。みいこに裏切られたんだ。

藤原はふらふらと裏通りを歩き始めた。

そして後ろをついて来てる悪魔たちの影にまったく気づかなかった。

むんずと腕をつかまれ、藤原は驚いた。

口キか？とあせったが、そうではない。

屍鬼がまわりを取り囲んでいたのだ。

藤原は暴れ、何人かは確実にノックアウトしたが、追い払われる様子もない。

彼らは意思とは関係なく動いてるみたいだった。

抵抗むなしく、藤原はそいつらに担がれ、暗い店の地下に連れて行かれた。

真つ暗な店の店内にポワンとしたろうそくの明かりのもと、何か帳面に書き込んでるおっさんの姿が見えた。

この雰囲気、どこかで感じたことがある……。

藤原はぞつとした。ストリップ劇場……。

……。脱がされる……。

おっさんが顔を上げた。

人間界で見たおっさん以上に醜い、残酷そうな表情をうかべていた。

「これはまた、汚い獲物だな。前座にもなるまい」

藤原は少々ムツとした。

「なら、逃がしてください。俺も脱ぎたくなんかない！」

しかしおっさんは聞こえないふりをした。

「とりあえず、前前座に脱がして、屍鬼たちに食わせるかな」

藤原はイヤだイヤだと喚いたが、聞き入れられず、汚いシャワー室に突っ込まれた。

たくさんの屍手に服を脱がされ、パンツまで脱がされる。

そしてホースで水をかけられ尻の穴まで洗われた。

俺はストリップされるのだ。そして内臓をこの屍鬼達に食わせるのか！

チャン、チャカチャンカ・・・

日本風の音楽がかかる。

藤原は舞台に押し出され、スポットライトをあびる。舞台には手術道具が用意されていた。

チャン、チャカチャンカ・・・

音楽に合わせ、おっさんは藤原を鎖で縛り始めた。

これだけは断言できる。

客の誰一人として舞台を見ていないことを。

皆、ブツサイクな屍女のポールダンスに夢中になってるのだ。

生皮ストリップで脱がされるのはもちろんイヤだがこうなったら皆に楽しんで欲しい・・・。

・・・無視しないで・・・。

藤原が最後、くだらない願いをして覚悟を決めた。

ああ、脱がされる・・・。目を閉じた。

なるべくお手柔らかに・・・。

藤原は腹に牙を感じた。

・・・牙？・・・よだれ？

あれ？・・・皮はぐんじやないのか？

藤原がそう思った瞬間、ふわりと体が浮いた。

酒場の連中は「これはおもしれえ！ケルベロスに食わせる！」

とはやしたて始めた。藤原は注目の的になった。

屍女は注目されなくなり、口をあぐりさせると、あごが落ちた。

・・・ケルベロス？ロキの知り合いのあの大男？？

「コイツはわしが飼っていたものだ。返してもらっぞ」

SMおっさんはあせり始めた。

「へえ、旦那・・・最初から殺すつもりはなかったんですよ」

ケルベロスにくわれられ、藤原はそのまま外に出た。

なんかしらんが、藤原は自由の身になれた。

ロキの知り合いに助けられた。

「こんなやばい所うろろするな！正気じゃないぞ。生皮をはがれるところだったんだぞ！」

藤原はしょんぼりした。

ケルベロスは藤原をまだ放してくれず、藤原はよだれまみれになった。

「おい、太郎、お前に食わせるつもりじゃないんだ！」

と大男に注意され、太郎？はおとなしく藤原を地面に立たせた。

気づくと藤原は裸だった。

あやてふためく藤原に大男はおおきなジャンバーを貸してくれた。うっ、重い。圧死しそうだ・・・。

藤原がもそもそしてると大男は藤原をひよいと肩に担いだ。

「あまり騒ぐんじやないぞ」

「どこに行くんですか？」

「コロニーだ。お前らみたいな人間どもが集まってる所だ」

・・・ええ？

「なぜ？あなたは悪魔じゃないんですか？」

「わしはこうみえても人間だ」

大男は答えた。何をいまさら、という口調だ。

おかしい、大きすぎる。

2メートル、いやそれ以上。

筋肉もものすごく人間には見えなかった。

「あの、りっぱにご成長なさって……。あの……。ちよつと信じられないん……」

「だまつて前隠してろ！」

とどなられ、藤原はおとなしく従った。

人間コロニーはきつたないマンホールの下にあった。

大男が、地下道に入り、辺りはくさい匂いが漂っていた。

「我慢しろ、ただの悪魔の死体の腐った匂いだ」

藤原は大男の肩の上からゲロツてしまった。後ろをついて来ていた太郎が怒って抗議のうなり声を出す。

「太郎！だまつてろ！」

ずいぶん歩いただろうか。

藤原は今までの疲れでうとうとしかけた時

「着いたぞ」と降ろされた。

目の前に大きな扉がある。

大きな扉がゆっくり開けられ

中は蛍光灯のあかりで照らされていた。

「おかえり、太郎、おかえり、ロバート」

とてもきれいな女性が藤原たちを出迎えてくれた。

（……。しまった。俺股間丸出しだ……。）

藤原はつくづく情けなかった。

「いらつしゃい、ひどいかっこうね」

女の人はクスクス笑いながら藤原に服を貸してくれた。

「藤原です」

「私はサラ。よろしく。」

あら、太郎、ひどく臭いわね。

どんな腐った死体を食べてきたのかしら？」

さすがに藤原は自分のゼロのにおいとは言えなかった。

藤原は入れてもらったコーヒーをすすりながら、辺りを見回した。室内は暗めの蛍光灯がちかちか点滅しながらもかるうじてついていた。

汚いカラオケ店という感じでいくつか部屋があった。壁にはポスターが貼られている。

「魔王の改造人間撲滅キャンペーン強化期間に向けて」の案内。

「いかに痛みのわかる人間を演じるか？」

「ここは悪魔に飼われてた人間達が逃げのびで作ったコロニーなの。もつと地下に大きな集会場があって、そうねえ全部で200人くらいいるかしら」

200人も！

サラは藤原に焼きたてのパンを持ってきてくれた。

「一度、集会にでてみるといいわ。同じ位の年齢の子達もいるから。こつちの世界で生まれた子たちよ」

人間界を知らない人間……。

藤原はかわいそうだと思った。

横には骨付き肉をもらった太郎がばきばき音を立てながら食ってる。……結局俺はコイツに助けられたんだなあ。

藤原は頭を撫でてやろうとしてウーと牙をむかれた。

どうやら、ゼロのこと根にもってるらしい。

パンとコーヒーを頂き、久しぶりに藤原はゆったりとした気分になった、

そういえばロバートって言うてたな……似合わねえ。めっちゃ日本人顔じゃねえか。藤原は不思議に思った。

「お前、飢えるカムでロキといたガキだろう？」

「そうです、ロキに誘われて……。でも今はロキから逃げてます。実はその時ロキとドラゴンに食らうメイトされてたのですが、逃がしてもらったのです」

「ふうん、ロキがねえ」

ロバートはそう言い、ウイスキーをぐつと飲んだ。

太郎が食事を終え、ロバートに甘えていた。

鼻をロバートにこすりつけ、頭を搔いて下さいとお願いしてるようだ。

コイツはホントにロバートになつてゐるんだなあ。

藤原がうらやましそうに見ていると、サラが話しかけてきた。

「太郎は特別よ。ロバートが罪深い人間ばかり食べさせたから、忠実なこと犬のごとく」

太郎はおりこうなんですな、と言っておいた。

太郎がうれしそうにしつぽを賢明に振り、藤原は必死によけた。太郎のしつぽは3匹の毒蛇でできていたからだ。

「ロバートは人間界では死刑執行人だったの。その時代は死刑はいわゆる見せしめだったから、とんでもなく残酷な方法を強いられてたわ。車裂きの刑、火あぶり、碾き臼の刑そして茹でるやつ・・・誰だったっけ？」

「五右衛門だ。あれはつらかった・・・」ロバートがひきとった。

・・・藤原はロバートが明らかに日本人であるということを確信した。

「とにかくロバートは罪人が苦しまないで死ねる方法、そして皆が見世物として楽しめる方法を探したの。それが悪魔飼い。

悪魔に頭から飲み込まれるのは確かにいい見世物よ。

そして、一気に死ねる罪人にとつても。

ロバートはこうして太郎を飼う事にしたの。

罪深い人間ばかり食べさせると忠実に育つの。

太郎は悪魔界に戻る命が出たとき、ロバートと離れることを嫌がったの。ロバートも汚い人間界にはうんざりだったわ。

2人で悪魔界に暮らすことにしたのよ」

・・・なんていい話なんだろう。ロキと山下、みいことドラゴンでは話にならない。

藤原は目頭が熱くなった。

しばらくしてサラとロバートは夜の太郎の散歩に出て行った。藤原は手持ち無沙汰になり、ちらかった机の上を探ってみた。

その時見覚えのある雑誌がドサリツと地面に落ちた。

「知らないや死んじやう悪魔の掟」と書かれてある。

みいこのにやにやした理由はすぐわかった。

ロキとドラゴンが向かい合ってる絵が載っていた。ご丁寧にフォークとナイフまで持っている。真ん中の皿の上になんと俺、藤原が乗せられていた。

（・・・しかもなんで楳図かずおタッチの絵なんだ？）

その記事の上に喰らうメイトの記事がでかど載っていた。

（色男ロキ、まさかの裁判でカムバック。）

付録に街角ランキングが載っていた。

「悪魔が選ぶ、これで飼い主が嫌いになりました。ベスト100」の3位に目が釘付けになった。

親食いについてだった。

親食いは著しく成長を促すらしいが悪魔の階級が下がるらしい。

悪魔界にもどったら、階級が下がり、髪がミミズになってました・・・。

メデューサが涙ながらに告白と書いてあった。

そのとき、みいこの家のリビングでキッチンが料理中のままほったらかしてあったことを藤原は思い出した。

あの時、心になにかが浮かんだ。

あの時も悪魔売りのおっさんがドラゴンを見て驚いていた。

「お前、まさか親を・・・」と。

藤原は確信した。まちがいない。両親を食わせたんだ。

藤原は完全にノックアウト状態だった。

どれくらいそうしてたろう・・・。

とんとん、と肩を叩かれた。

とんとん、とんとん！

どくん！

藤原はイスから突き落とされた。

？？なんで？？

見上げるとそこには背の低い男が腰に手をあて、仁王立ちしていた。

「なんだ？おみゃーは！」

・・・なぜ名古屋・・・。

「・・・えっと、ロバートに連れてこられて僕人間なんです」

背の低い男は邪魔邪魔と藤原を押しつけた。

座布団とおもって藤原がお尻に敷いていた布をパツと広げ、（手術着だった・・・）

男はさつとはおった。

「汚い尻に敷くな！バッチイぞ！そうだ。お前手伝え」

藤原は強引に男に手を引かれていった。

「これからどくたーと呼べどくたーと！」

「・・・はい、どくたー・・・」

藤原は壁に隠してある扉に押し込まれ、汚い階段を後ろから小突かれながら降りていった。

どのくらい降りただろう。

汚い白タイルで埋め尽くされた部屋に押し込まれた。

タイルはところどころひび割れお世辞にもキレイですねとは言えない。

しかもこの部屋が手術室だった。

「これを着やがれ」

汚い手術着を着せられた。

どんな患者か知らないが気の毒だ・・・。

ベッドにはすでに人が寝ている。

・・・女！・・・。。しかも裸？？

藤原は手術前に手術着を鼻血で染めてしまった。

「これから彼女を悪魔界に適した体に作り上げる」

・・・悪魔界順応のための手術・・・改造人間か。
でもこの人はなんだかわいそう・・・。

とても繊細な体をしてるのに。なんのために？

どくたーは体を切り刻みはじめ、藤原はたまらなくなり外に吐きに行った。

・・・今日吐くの2回目だ・・・。

藤原が手術室の前でへばつてるとサラが手術着をきて近づいてきた。
「ひどい目にあったわね。どくたーは目の前に人がいると誰彼なしに手伝えというの。」

私が交代するわ」藤原はお言葉に甘えることにした。

そしておそろしい考えが頭をかすめた。

・・・俺も手術することになるのか？・・・

手術は無事終わり、どくたーとサラは疲れきって出てきた。

「おい、お前、今日からお前がこの子の面倒をみろっ」

唐突に指名され、藤原はどぎまぎした。

しかし、サラは「それがいいわ。あなたもなにか仕事がないとね」と賛成した。

藤原は覚悟をきめ、部屋に入った。部屋はまだ、血の臭いがこびりついていて、女の子は眠っていた。

・・・ホントにかわいいな・・・

藤原は女の子が息をしてるか確かめ、ベッドのかたわらに座った。
女の子の荷物を見てみるとどうやら中学生のようだった。

汚いロッカーには制服がかかっていた。

(どうしてまた、悪魔界なんか・・・)

藤原は女の子のベッドに肘をつきいろいろ今日の事を思い返していた。

相当疲れていたのか、そのままうとうと眠ってしまったらしい。

髪をサワサワと撫でてくれてる感触が心地よく、藤原は目が覚めた。
女の子はさっき目が覚めたらしい。そして藤原の頭を撫でてくれたのだ。

「・・・痛むところは？」

「大丈夫・・・」

「なんだか訳は知らないけど、こんなことまでしちゃって・・・」
そして女の子に服を着せるため起き上がるのを手伝った。

女の子に触るのは初めてだが、たぶんこんなに冷たくなくそしてかたくないだろう。

藤原は見えてはいけないと思いながらも女の子の体を見てしまった。

・・・ロボット？

キレイな体に機械が埋め込まれている。

藤原はどくたーに怒りを感じた。

いくら本人が希望したからって、なんでもしていいわけじゃないだろう。

ここまでしないと、この世界には生き残れないのか？

藤原はとりあえずどくたーを呼ぶように渡された笛をならした。

「ふえ〜」

少したって、どくたーとサラが入ってきた。

藤原はあとをどくたー達にまかせ、複雑な気持ちで部屋を出て行った。

集会所ではパラパラと何人が集まっている。

コイツらみんな、改造されてるのだろうか？

「マヌケな面してるな」一番大きな男が話しかけてきた。

筋肉をみせたいのかタンクトップにぬめぬめと光る皮のズボンを着ていた。

藤原がムツとしていると、かわいい女の子がうれしそうに藤原に近寄ってきた。

「太郎元気にしてた？」

「・・・うん、ストリップされるところをたすけてもらったよ」

「すごい、冒険したんだね！」

藤原はその悪意のない褒め言葉にまんざらでもなかった。

「そうだよ、人間界から来たんだからね」

皆も急に態度を変え、藤原の冒険話を聞きたがった。

「悪魔界では山姥がいるが、人間界でもいるのは本当か」

「妖怪マタギキという自分で聞いてもないのに自慢げに話す妖怪がいるのは本当か」

とかいろいろ質問を受けた。

藤原は質問に答え、集会所のアイドルとなった。やんややんやと歓迎され、しまいに補習の先生に棒で小突かれた。

皆はあわてて席につき、藤原はそそくさとロバートの部屋まで戻ることにした。

迷いながらほうほうのていでたどりつくと、ロバートがなにやら電話している声が耳に入った。

「・・・プリキュトスがロキの・・・」

藤原が部屋に入ると、ロバートがあわてて電話を切った。

「プリキュトスってなんですか？人間界の時も耳にしました」

ロバートはこつちの話だ、と話してくれなかった。

「ここで生き延びたいなら、いらない事に首を突っ込まない事だ。それより強くなる方法を探しておけ。自分の体は自分で守る事だ。もうストリップはこりごりだろう？」

いやな思い出がよみがえり、藤原は話題を変えるため、悪魔界の話を書くことにした。

「ベルセルクを見かけたけれど、あいつらはなんですか？ボクが万引きしたといって追いかけてきたのもアイツラです。万引きごときであいつらは動くんですか？」

ロバートは日本酒を飲みながら話し始めた。

「ベルセルクはたぶんスーパーにいたロキを見つけたんだ。わしもあの時スーパーで晩飯を買っていたから一部始終はみている。

魔王はロキがキライだ、元神様だからな、ロキは。扱いづらい」

「魔王がロキの事キライでもなんでもかまわない。・・・可奈子が・・・ボクの友達がロキに悪魔界なんかに来て来られて・・・」

可奈子を取り戻さないと。方法はないんですか？」

そのとき、サラが「彼女が呼びよ」と言いに来た。手術部屋からロバートの家に移されたらしい。

薄暗い部屋の中に制服姿の女の子が座っている。

髪が長く、本当に華奢だった。

可奈子の活発な雰囲気とはまるで違う。

「・・・ホント、もったいないなあ。」

女の子は泣きながらも話し始めた。

「・・・もう人間界はこりごりなの。家族はいないし。施設の先生たちも信じられない。だから悪魔界に逃げてきた。でも人間のままだったら悪魔達に狙われる、危ないからって改造を勧められたの。そうだ！あなたロキに会ったんでしょ？聞いたわ、サラさんに。私、ロキに会いに来たの。悪魔界に来れば、何か情報があるかもって。」

「・・・ロキに会いに来た？」

「・・・小学生のころ、母が彼に食べられた。」

ロキは口から真っ赤な血を流し私を見たわ。

キレイな銀髪も血で汚れていた。

私は自分の部屋まで逃げたの。

ロキは階段を駆け上がり、私の部屋に飛び込んできた。

おびえる私を一度は手にかけ、殺そうとした。

でも目が合ってしまったの。彼の目はとても悲しそうだった。

逃げろって言うてくれた・・・窓から私を逃がしてくれたの。ア

イツにはお前も食ったことにしておく。アイツの前に二度と顔を見せるなっ

女の子は咳き込んだ。

「・・・こんなに話しちゃ体に悪いよ。もう少し寝てなさい」

藤原は女の子を寝かせた。

「・・・ありがとう、こんなにやさしくされてうれしい。人間界であなたに会えてたら、私こんなとこに来なくてすんだかも・・・」

「・・・私、美紀って言うの、よろしくネ」

「ぼっぼくは藤原。」

藤原は真っ赤になりあわてて部屋を飛び出した。

「彼女の世話、宜しくね。散歩にもつれだしてあげて。

太郎を見張りにつけるから心配ないわ。太郎、宜しくね」

藤原が浮かれてるのを見て、サラはやさしくほほえみ、太郎は大きさにため息をついた。

こうして幾日か過ぎた。

藤原と美紀はここが悪魔界ということも忘れ楽しくすごした。太郎と一緒に街も自由に歩ける。

藤原は可奈子の姿を探しながら毎日街を散策いた。

スーパーマルトミには流行のCDも売っているし、DVDもある。

ただし全て悪魔に都合いいようにリメイクされているけど。

人間世界の物がいろいろ売っていて驚くほどだった。

どこで仕入れてくるんだろう？

そう不思議に思っていると大きな荷物を抱えたおっさんが店員と交渉しはじめた。

「これは人間界で大流行の収納タンスだ。だいたい一家に一台は置いている。」

と、得意げに荷物をほくとなんと仏壇が入っていた。

「ふんふん、干しクビを入れておくにはいい大きさかもしれませんね」

店員はまじめになって扉を開いたりしている。

「ヴィゴ商店おしやれアイテムコーナー」では十字架のペンダントが売り出し中だった。

あの天使アイテムはもう時代遅れなのか、ワゴンの中に山と積まれていた。

注意書きとして、心臓の弱い方は使用をお控えください。

長時間のご使用は除霊されてしまう危険があります。除霊治療例

13%

・・・めっちゃ確立高いやん！

でもお守りに美紀と一個ずつ買うことにした。
かつこよく「俺が払うよっ」

藤原は手を突き出し言った。

サラに頼まれた買い物も終え、藤原たちは戻ることにした。コロニーの前まで来ると変にきな臭いにおいがした。

・・・いやな予感。

あわててコロニーに飛び込むとサラとロバートが暗い顔をしていた。コロニーの一つがベルセルクに襲われてしまったのだ。

蟻の巣のように複雑に入り組んでるので、そうそう全滅する事もないそうだが、樂觀視はできない。

「魔王の改造人間撲滅キャンペーンがはじまったわ。とにかく、今夜コロニーで会合があるから二人にして悪いけどあなた達は先に休んで。心配いらないわ。いつものことよ」

ロバート達は地下に続く階段を下りていった。

藤原達は毛布に小さく包まり、明かりを消した。

怖さを紛らわすため美紀と太郎と3人で今日買ってきたDVDを見ることにした。

超B級映画で、主人公がバンパイアハンター、しかも本人もバンパイアという、いろいろいそがしい映画だった。

この映画は悪魔界で今ブームだそうだ。

映画が始まると、太郎は端で見ていてもわかるくらい映画にのめりこんでいた。

主人公がピンチに陥るとウーとうなり、乗り切るとしっぱを振った。

太郎ってけっこう乗りやすい性格なんだなあと映画より太郎を見ていて楽しんでいたときだ。

！！ドカーン！！

とものすごい音がし、ロバートたちが出て行った扉が爆風で飛ばされた。

一体何事??

太郎が猛ダッシュで階段を駆け下りてく。

藤原と美紀もおそろおそろ後からついていった。

集会所はもう火に包まれている。襲われたコロニーから、どうやらかぎつけられたらしい。

逃げ惑う人々、そして巨大なベルセルクが剣を振り回している。真つ二つに切られるが、改造されているので血がでない。

そして、半身にされても、踏み潰されてもまだ死ねず這い回っている。

太郎が火の中から現れ、ロバートとサラを背中に乗せていた。藤原たちは無我夢中で階段を駆け上がり、コロニーを抜け、地上に出た。ガラクタの影に隠れ、様子を見守る。

集会所で話しかけてきたタンクトップ男が瀕死の状態で歩いてきて、力尽きた。

・・・コイツ血がでてる。手術してなかったのか・・・。
どこをどう逃げたのか覚えていない。

ロバートが藤原と美紀を太郎にのせ、逃がしてくれた。

「早く逃げる!!」

街では突然の地下爆発に皆が逃げ惑っている。

ベルセルクが剣を振り回し、逃げ惑う悪魔、人間を叩き潰していた。モグラたたきの要領で。

太郎は藤原たちを乗せ、ズンズン街へにげていった。

巨大なカジノ、遊園地、人間買いショッピングセンター、ストリッ
プ劇場。

毒々しいイルミネーションの塊にたくさんの悪魔が集う中をヒョイヒョイとすり抜けていく。

何人かのベルセルクが先回りし太郎を迎えようとした。

太郎はズンズン走り、ベルセルクの間をすり抜け、街を走りぬけ、みいこと藤原が最初にいた砂漠の方へ走っていった。

砂漠では巨大なあり地獄が（エサエサエサエサ・・・）とつぶやきながら穴で待ち構えている。太郎はヒョヒョイと避けていく。どこに向かつてるのかわからない。

ただ、朝が来て、また夜になった。

藤原達は太郎の背中にまたがったまま眠った。

砂漠一面だった景色に徐々にゴミが混じり始めた。

そしてどんどん増えていく。

スクラップの墓場と言ったところだ。

何千体という改造人間の墓場だ。時々うめき声が聞こえる。知能だけがまだ生き続け体と離れ離れになり嘆いている人の声だった。

死ぬ事も叶わず、生き続ける意味もない。

数千年、数億年先もこうしてここで呻いているのだろうか？

太郎はそのスクラップの山を

飛び越え奥に入っていった。

そしてぽっかりあいた大きな穴に飛び込んだ。

第三話

かなりの距離を落下したように感じた。

・・・死ぬう・・・。

「裏合体センターへ。ようこそ！」デイズニーのアトラクションかと思われるほどの明るい声で出迎えられた。

目を上げると藤原と同じ年くらいの目の前に男がいる。

なんだ？ここ・・・。裏合体センター？

そこは廃材を組み立てて作った建物だった。

この男の趣味なのか、ドアノブがあちこちにつけられ、（ホントにドアノブの使用方法を知ってるかどうかはなはだ疑問だった）

蛇口まであちこちにつけてある。

そしてここにいる人たちは人間のように見えてどこか違っていた。

奇妙な色の肌、目。

「あのう・・・あなたがたはなんですか？あなたがたは人間なんですか？それとも？」

男は自分の胸を指差しこういった。

「オレ様が改造してるようにみえるか？失敬だなあ。」

改造されるくらいなら、悪魔と合体しろ。かつこいいぞう」

その男はよくみると両頬に稲妻の模様が見えた。

「お前はまだ改造も合体もされてないな。」

今なら合体セール！お得だよ。それにいまなら、よりどりみどりで。

ドアーフにドアード。そして昨日つかまえたバカドラゴン！」

・・・ドラゴン？しかもバカ？

・・・どっかで会ったような・・・。

案内しよう、稲妻野郎は無理やり案内を申し出た。あきらかに久々の客に喜びを隠せないようだった。

美紀は緑の髪をした女の人たちに質問攻めにあってる。彼女たちはドアードと合体したらしく、食事の代りに髪の毛で光合成をして

るそうだ。

なんとエコロジー。ミドリムシ様のようだ。

美紀を彼女たちに任せ、藤原は稲妻に案内をお願いした。

扉をこじ開け、廊下に出ると、訳のわからない機械やら、なにやら。

「ここで合体するのだ」

汚い分厚いガラス越しに機械がおいであつた。

さびていて、みるからに壊れていそうだった。中を掃除してたのか
たわしなどが散乱している。

青ざめた藤原の表情を見て

「しかたないよ、街の合体センターのスクラップにされてたのを拾
つたんだもんっ」稲妻はすねた口調で言った。

「動くんですか？」藤原はもう信じなかった。

「・・・うごくよ。蹴飛ばしたらね」

・・・絶対イヤだ。

「・・・もしかして、ロキの噂なにか聞いてませんか？」

「もしかして、お前がああ喰らうメイトされて逃げた人間か!!」

おうおうと、稲妻は後ろにのけぞった。何かスイッチを押したらしく
機械が煙を上げている。

タワシとスリッパが合体し、便利グッズになった。

「ロキはかわいい女の子連れてたよ。新聞に載ってた。」

可奈子のことだ!!

「可奈子を助けたいんです！でもそんな力俺にはない・・・」

「その力を得るにはやっぱ合体っしょ！今はいいのが入ってるんだ
よう。キョンシーもいるし、ドラゴンも！」

そういえば、バカドラゴン・・・。

「ドラゴンに会わせて下さい！」

稲妻野郎はほいほいつと藤原をエレベーターに乗せた。

そして、ものすごい臭いのする階で下ろした。

こわこわ廊下に出てみると、ちかちかと切れかけの蛍光灯が幾数も
の檻を照らしていた。

檻にはウルフマン、おでこの札を息圧ではがそうとしているひよつとこ口のキヨンシー。

人間界で見かけるマク。ナルドのメインキャラクターの置物もなぜか檻に入っている。

「コイツ、すっげえ強そうで人間界でも幅利かせてるらしいのに、なかなか話してくれないんだ」

そりやそうだろう。確かに怖いけどただの置物だ。そしてソイツの向かい側にしょぼくれているドラゴンを見つけた。

「・・・やっぱリアイツだ。俺を喰らうメイトした！みいこはここに
いるのか？」

「おい、お前」

「ああ！あの時の万引きやろうたあ・・・！なつかしいなあ」

ドラゴンは尻尾をぶんぶん振り喜びを表現した。

「おまえコイツ知ってるのか？このドラゴン、体格は抜群にかっこいいのに子供言葉がぬけねえ」

藤原はドキドキしながらみいこのところに案内してもらった。

一番奥の暗い檻にみいこは閉じ込められていた。

檻の端に縮こまっている。なにか痛みに耐えてるようだった。

稲妻が声をかけるとびくつとした様子だった。

「コイツ、悪魔達に冗談でポルターガイストと合体させられた。

ドラゴンは側でおろおろしてるだけだし。

ロバートが見つけてここに連れてきたんだ。」

「みいこ・・・」

藤原の声にみいこはびくくりしたようだった。

「・・・お前まだ生きてたのか。しつこい」

「どうして万引きヤロウなんて言った？逃げるのに大変だったんだぞ」

「人の顔をなぐっておいて只で済むと思うな」

「・・・根に持つやつだ・・・そんな事で・・・」

稲妻野郎はぼかんとしたたが、やっとわかったようだった。

「ははん、この女、お前の知り合いか？」

「かわいいそうだが、自分の殺した人間の顔が出てきてるんだから自業自得だわな。」

「コイツの体を見てもろ」

「稲妻がみいこの服を剥ぎ取った。」

「藤原は目を疑った・・・」

「みいこの体中にボコボコと十人ほどの顔が人面相のように浮き出ていた。」

「そいつらがみいこのからだをジョジョに食っているのだ。」

「藤原は吐き気がした。」

「コイツはガキのくせに人間を平気で食わせるんだ。最悪なヤツだ。」

「みいこ。大丈夫か？」

「みいこは聞こえないふりをした。」

「・・・その体、治す方法探してきてやる。それまで死ぬな」

「みいこはますます檻の中に閉じこもって耳を塞いだ。」

「暗い気持ちで最上階にもどるとうれしいことにロバートとサラが来ていた。」

「ロバートは藤原の顔を見て安心したようだった。」

「ポルターガイストと合体した人間の子供を見ただろう？」ロバートはため息をついた。

「お前の知り合いだったんだろう？」

「藤原は何も言えなかった。」

「美紀はコロニーにいる皆からちやほやされていた。」

「あの長い黒髪が原因らしい・・・確かにキレイな髪だった。」

「悪魔界のイケメン、ロキはキレイな髪の女性には目がないらしいのヨ。」

「私もそんな髪だったら、ロキと一晩共にできたかも！」

「そんな話するなよ。魔王に怒られるぞ。ロキ嫌いなのに。今度悪魔界をうろついているとこ見つかったら即死刑だって言われたらしい」

よ。」

美紀は眩暈がするといい、部屋で一人になりたいと申し出た。顔が真っ青になっていた。

それからだった。

美紀が部屋にこもり、なんにも食べなくなったのは。

改造されてるといっても食べなきゃ死んじゃう。サラムロバートも美紀を心配した。

みいこはもじもじしながらも藤原を見て憎まれ口を叩くのはやめた。

藤原は自分のしょばいご飯からみいこの為に半分残しておいた。

目の前では食べる事はなかったけど、次の日にはなくなっていたので食べているんだろう。

藤原は少し安心した。

夜、藤原は全てをロバートに話した。美紀とロキの関係、山下とみいこの事も。

「ロキを探す。そして可奈子を返してもらうんだ。こっちには美紀がいる。友達だったみたいだから。人質っていうわけじゃないけど・

・取引に使うだけだ」

ロバートはポンポンと藤原の頭をたたいた。

「ロキとワシとは長年の付き合いだ。ロキは改造人間を応援してくれてる。」

可奈子はロキという限り安心しろ。

じきに会える日は来る。

それに、今はタダでさえ悪魔界は人間が出歩きにくくなってる。

天界が血眼になって探しているプリュキトスも見た目は人間だ。お前の喰らうメイトの裁判など、もう忘れられているだろう。」

「プリュキトスってナンですか？人間界のとき、ロキに話してましたよね？」

プリュキトスが生きてたって。」

「プリユキトスは・・・腐れ神の飼い主だ。彼が制御できないほどの怒りを感じた時に腐れ神は蘇る。彼を早く探し出し魔王との取引に使うつもりだ。人間コロニーをこれ以上潰されるわけにはいかなからな。今はまだ、人間界にいるらしいが。探しに行けんのだ。なにせ、ワシたちはこの風体。人間界を歩くと即、スカウトそしてタレント行き。」

「そうだ！お前探してきてくれないか？」

「・・・ただ、お前には強さがたりん。一人で悪魔界をうろつかせるのは危ないな・・・。」

「そうだ・・・太郎をやるよ。太郎と合体しろ。」

藤原はおどろいた。あんなに大事にしてる太郎を俺なんかのために？それに合体なんて恐ろしいこと、考えたくもない！

藤原が断ろうとするとロバートはこういった。

「人間界に戻る時は、太郎はお前から離れる。」

この悪魔界にいる間だけだ。心配するな。」

「なぜ、ロキは魔王に嫌われてるのでしょうか？」

「ロキはもともと神だった。天界の王が何かの罪で悪魔界に投げ落としたのだ。」

悪魔界でのロキは魔王をことごとく馬鹿にした。そりゃそうだ。天界に媚ばかり売る魔王はホントに頼りないからな。

ホントの事を言われて怒る奴はこの世にはいるが魔王もその中の一人だ。ロキは魔王にも嫌われ、人間飼われ身分につきおとされたんだ。永遠にな」

藤原は太郎の檻を見に行った。

そこは藤原の部屋とはくらべものにならないほど広かった。とても清潔で頑丈な犬小屋という感じだった。

中には退屈しないよう、ウサギのぬいぐるみやキュキュツと鳴るおもちゃまである。

・・・まちがいなく必要ないと思うが。

太郎もそう思ってるらしくおもちゃは檻の片隅にこんもり固めてあ

った。

藤原を見ると、わざとそっぽを向いて横目で反応を見て楽しんでいるようだった。

でも、藤原のことは好きでいてくれてるはずだ。恐ろしい尻尾をかすかに振ってるから。

「太郎……。俺と合体してくれるか？俺は強くならなくちゃいけないんだ。可奈子をとりのもどすために。」

太郎が嫌がれば無理強いしない。

太郎は最初、聞こえないふりをしたが藤原があきらめて行こうとすると、クンクンと甘えた声で藤原にすり寄ってきた。

藤原はこわごわ頭を撫でた。おっそろしい頭だったが。

・・・太郎は承諾してくれたのだ。

こんなに忠実な生き物はいままでいただろうか？

それから2、3日考え、藤原が合体を決意した。稲妻野郎は明らかに張り切っていた。

「昨日の夜は興奮して眠れなかったよう！太郎と合体かぁ。おれなんか雷ドラゴンと合体したんだぜ。二度と風呂には入れねえけど。漏電すつから」

太郎はサラに大好きな骨付き肉をたくさん食べさせてもらい、きれいにブラッシングしてもらってとても幸せそうだった。

稲妻に太郎を渡しながら、

「私、用事があるからつきそえないけど、大丈夫。大丈夫よ！！きつと、きつと成功するから」と妙に力強く太鼓判を押され、余計に不安になった。

藤原は太郎の準備が整う間、「合体の心得。男を見せろ、2008」を読んだ。

稲妻は藤原が真剣によんでる雑誌をとりあげてしまい、ここにわかりやすいポスターがあると得意げに張り出した。

小学校の保健室に貼ってあるような簡単な図が書いてある。

合体の終わった人間がやけに顔が青いのが気になったが、たぶん色あせてるんだろう。

がつたいのしくみ

1 きかいにいれる。

2 まぜる。

3 おわり。

・・・わかるかつ!!!

藤原は逃げ回る稲妻から雑誌を取り戻した。

まず合体材料（太郎）は機械に押し込められ魂を抜かれる。

次に合体本人（俺）の魂を抜く。この時神聖な気持ちにならないよう気をつけること。

*南無阿弥陀、アーメンはご法度。成仏の危険あり。
そうして体だけを合体させるらしい。

そして俺の魂と太郎の魂を混ぜる。

この時の魂のこね方でどちらが優位に立つか決まる。

魂を体に戻す・・・できあがり。

藤原が服をぬぎ、用意万全、すっぽんぽんでむさぼるように雑誌を読んでいると

「もたもたすんな、おっさん。はよ、入れ」と言われた。

誰？きよろきよろしたが、誰もいない。

まさか・・・。機械が話している？

稲妻野郎はきまりわるそうに、

「事故だったんだ・・・。機械と人間が合体しちまって・・・。もう2度と起こらない・・・はずだ」

鼻をほじりながら稲妻が言った。

・・・やめようかなあ・・・。

藤原がやめときます、と言おうとした時、太郎が機械に入った。
ふえ〜ん。

気の抜けるようなモーター音がしている。

機械が壊れたか……。藤原はほっとした時、太郎に変化が起った。

太郎のキレイな毛並みが波打ち、太郎は苦しさにもだえた。そして、真つ白なキレイな魂がポワンと空中に浮いた。

稲妻野郎はそれを汚い袋にいれ、「ほい、次っ」と言った。

藤原は覚悟をきめ機械に入った。証明写真を撮りに行ったときに見かけたようなイスに座る。

稲妻が扉を閉めると、しーんと無音になった。

……。いよいよか。

ぶえーん。

これまた気のぬけるモーター音。

明らかに意識がおかしい。

なぜか……。死んだおばあちゃんがみえる。川の向こうに……。

手を振ってる……。

藤原は神聖な気持ちになった。

藤原は浮き始め、なぜか下のほうで大騒ぎしている。

「おいつ成仏するな!!おいつ!」

……。なんとという汚い口をききあそばすのんか……。

ワタクシは召されます……。ナムナムナム。

その時だった。

「おいっ!未修正のH本、見せてやるから、還って来い」

藤原は一気に意識を取り戻した。

稲妻は藤原の魂を汚い袋につめた。

……。臭い……。

袋の外では俺の鼻に太郎をつつこんでるんだろっなあ。

藤原は稲妻が見せてくれるはずのH本について想像し、気を紛らわした。

少したつたところ、急に回りが明るくなり、藤原と太郎はこねられ始めた。

丸められ、こねられ、時々床に落とされ・・・。

「ほいつ一丁あがりっ」

先ほどの薄汚れた鏡に以前とはちがう姿が映っていた。

筋肉隆々、顔もりりしくなってる（気がした）髪も今までのダサイ頭じゃなく、太郎の毛並みと同じ、白い毛にところどころ水色の毛が混じっている。

かつこいいじゃん、俺！

体に力がみなぎる。藤原は力瘤を作っては触ってみた。すっげえ！！俺は合体したんだ！！

合体って気持ちいいー！！

藤原は今までにない爽快な気分だった。

藤原は合体の機械の中からエイやと飛び出した。

「おっさん、金はらえ」機械がうめく。

稲妻は「ほつとけ」と言い、藤原の体を点検しはじめた。

手には合体後カウンセリングの本を持っていた。なにやら記入している。

（ええつと、顔はマヌケのまま・・・と。

目は太郎のグレーの目・・・と。）

ほいつと目の前に裸の女と、メス犬の写真を出した。

藤原の瞳孔の開き方を見ているらしい。

「おっしや、女と雌犬両方に反応。上出来、上出来」

・・・俺は犬にも興奮するようになってしまったのか・・・。妙に悲しくなった。

「まあ、成功だな。あと24時間以内の痛みに耐え抜けば」

・・・？なんだいそりや？

「あれ？言ってなかったっけ？ポスター読んどいてようすっごいいやな予感・・・。

ポスターをよく見ると、ちっちゃなちっちゃな字で書いてあった。

「24時間以内に猛烈な痛みがあります。

これをクリアして本物の合体となります。

男を見せる！2008」

・・・くっそう・・・。

藤原はうなだれた。

「準備準備。忙しいよう！はい、この部屋に入ってちょ」

以前来たときは全く気にもしなかった拘束ベッドが置いてある。

痛恨のチェックミスだ。

「痛みには耐えられなくてえゝ自殺したら困るからあゝ縛るんだ！」

藤原は放心状態でベッドに横たわった。

せめて近くに可奈子がいてくれたらもつとがんばれるのになあ・・・。

藤原はベッドに横たわり、覚悟を決めた。

だんだん体が二つに裂かれてるような、痛みが襲ってきた。

・・・いまなら、雷印さけるチーズの気持ちがよくわかる。

あいつら、相当痛いんだろうなあ・・・。

藤原はあまりの痛み、「殺してくれ！！」

と叫び続けた。

稲妻はポテトチップスを食いながら藤原を見ていたが、途中で飽きて寝始めやがった。

どれくらいそうしてただろう。

藤原が苦しみもだえていたとき、真上から覗き込んだ人が見えた。

・・・みいこだった。

なぜ？檻から抜け出たのか？

足を引きずりながら、藤原に近寄る。

「痛いのか？」

みいこは藤原に聞いた。

藤原はこの姿勢でできるだけ、ウンウンと首を縦に振った。

その時信じられないことが起こった・・・。

みいこは近くにあった雑巾で藤原の汗をぬぐい、そして・・・手を握り締めたのだ。

藤原は痛みを忘れた。

「・・・みいこはそんなに悪い子なのかなあ。

ただ、いじわるした人たちに仕返しがしたかった。クラスの子全員死んでしまえばいいのについて思ってた。

パパもママも仕事でみいこにかまってくれなかったから大っきらいだった。

学校でいじめられてもお金をあげて仲良くしてもらいなさいって言われたんだ。

・・・ママ、パパなんて消えてしまえって思ってた。だからドラちゃんに食べさせた。

体中の顔、初めは怖かったけど、今ならママ、パパが他の顔からみいこを守ってくれてるのがわかる。はじめて家族になれた感じだった。

他の子たちが、私を食べつくさないよう見張ってくれてるのがわかる。うれしかった。

みいこは一人じゃないって思ったんだ・・・。

ドラちゃんのみいこの初めての友達なんだ。そして・・・お前も。

カツアゲした子達に怒鳴ってくれた。」

・・・

・・・ほげえ・・・。

棒でつつかれて目が覚めた。

・・・みいこは？夢だったのか？

いきなり、ペンライトで瞳を照らされた。

稲妻のマヌケな顔が覗きこんでいる。

「すげー生きてるぞ！オレ成功したんだ！失敗したかと思ってたよ・・・」

・・・俺・・・生きてる？

生きてるぞう！！！！

失敗なんてドンマイ！俺は生きてるんだ！

藤原はあふれんばかりの笑顔で稲妻を迎えた。

稲妻は藤原を軽く無視し、ぐちゃぐちゃにポケットに突っ込んだモノを取り出した。

それで鼻をかみ、しまったという顔をした。

「ごめんごめん、ロバートからの手紙だったよ、はい。どうぞ読んでちょ」

鼻水でドロドロのものを手紙と言われ、殺意を覚えたがどうにか広げて読む事にした。

鼻水でにじんで読めない上にものすごい草書体で読みづらかった。

藤原殿

合体後の痛みもよく耐えた。大変な事が起きた。美紀が行方不明だ。わたしが連れ戻しにいく。お前はここにいろ。指示をまて。」

手紙の内容が飲み込めなくて藤原はパニックになった。

美紀は何も持たず出て行ったのだろうか。

美紀が寝ていた部屋に入ってみると、ベッドはきちんとなっていてし、特にこれといったこともない。

出て行こうとしたとき、何かを踏んづけた。

美紀の学生かばんだった。

人のものだが、そんな事いつてられない。

そしてかばんをあけてみると、衝撃的なもの。

パンツ・・・じゃない。美紀の生徒手帳を見つけた。

そこには・・・山下美紀と書かれていた。

藤原の記憶が一瞬にしてよみがえる。

そういえば・・・。

・・・藤原が小学生のときだった。幼馴染だった藤原は山下の誕生日パーティに呼ばれた。

人数を合わせる為に呼ばれたとは思えないが。手作り紙芝居をプレゼントに持っていったつけ。

確か題名は（ジゴロ刑事）

山下は馬鹿にするなど、景気よく破りやがった。（可奈子が激怒し

山下の頭にクーラーをぶっかけてくれた。その時から藤原の初恋がはじまったのだ。」

山下にいじめられた藤原はこそそとトイレで泣こうと席を立った。トイレに向かう途中の畳の薄暗い部屋で押し殺した泣き声を聞いた。怖くなっただけ、気になつて覗いてみると山下の妹が泣いていたんだ。

顔は腫れ、擦り傷が痛いたしかつたつけ。

「ロキ・・・ロキのタマゴが・・・」

藤原が声をかけようとするそと母親が飛び込んできた。

母親が妹を抱きかかえ、藤原の事をおびえた目で見た。

「この子の事は放つて置いて。」

藤原は見えてはいけないものを見た気がしてあわてて部屋からとびだした。

廊下で山下にぶつかつたんだ。

藤原が傷だらけの妹を見てしまった事に動揺していた。

可奈子に言われたくなかつたのだらう。

山下は「美紀のヤツが大事なもの取つたつて泣いていやがる。

だつてオレの誕生日じゃん、アイツの持ち物の中から好きなものをもらわないと。

お前なんかイチコロでやつつけられる。もし可奈子に妹の事を話せば夜にソイツをお前んちまで行かせるから」

なんだか怖い気がして藤原は黙つてた。

今思えばロキのタマゴを、美紀から盗んだんだ。

でも・・・美紀はなんでロキのタマゴなんか持つてたんだらう？

「・・・美紀を探さなくちゃ」

「おい、待てつたら。ロバート達がさがしに行つてるから心配すんなよ。」

藤原は何もできず、ただ、ロバート達が美紀を探し連れ戻してくれる事を祈つた。

その時、壁の糸電話がなった。

・・・という仕組み？

藤原がおそろおそろ糸電話にでると、ロバートが焦り気味に話しはじめた。

「藤原か？合体はうまく行ったようだな。

頼みたいことがある。

プリュキトスが見つかった。ロキからの情報だ。場所は三本木ヒルズ。

樋口、という女が一人で住んでるマンションだ。情報によると、可奈子の姉の家らしい。

お前が行くのが一番だ。顔見知りだろうからな。男はヴィゴというバー飢えるカムでロキが待機している。なんと・・・ロキの息子だそうだ。犬に話しかけられロキに記憶が戻ったらしい。後はロキの指示に従え。

砂漠のステーションからゴンドラに乗り込め。

健闘を祈り申す。」

藤原は電話を切り、「稲妻、砂漠ステーションに連れて行って欲しい」とつげた。

「お前・・・人間界に行ったら、もう帰らないかもしれないだろう？なんだか、淋しいな」稲妻がありえないほど悲しそうに言った。

「それはないよ。可奈子を連れてかえらなきゃ。それに、みいこもだからまた戻ってくる。また、会えるよ。」

「じゃあさじゃあさ、買ってきてくれよ。

トイレトペーパー使ったびにさ、オルゴールが鳴るやつ。」

・・・ソレが目的だったのか。

「たぶん、西急ハNZにあると思う。

でも今回は無理だ。忙しいから。」

稲妻はがっかりした顔をしたが、砂漠のタクシーは歩きまわるから、この辺で待とうといった。

歩き回る？

言葉の意味がわからず、立ち止まっていると後ろに黒い影がせまる。振り向くと巨大な真つ黒のサソリがガチャガチャと歩いてくるではないか。

藤原はビビり、稲妻は手を上げた。

サソリははさみを振り回しながら近づいてきた。

「はよ、お乗りやすう」

サソリの上に小さいイスが括りつけられている。

「街まで頼むよ」稲妻がいい、サソリは「へえおおきに」と言った。

藤原はつるつる滑る黒びかりしている甲羅にしがみつき、なんとか登った。

サソリはそのまま、ガチャガチャ進み、街まで藤原を運んでいった。街ではベルセルクは一人残らずいなくなり、悪魔達は情けない顔をしながら街のゴミを掃除していた。

ベルセルクたちは人間界にプリユキトスを探しにいったのだろう。

あんな奴等が人間界に現れたら？

考えただけでもおそろしい。

藤原は頼まれた事をするため、街のステーションに向かった。

今はベルセルクより早くプリユキトス、否ヴィゴさんって名前を呼んであげなきゃ。

藤原はステーションに着き、人間界行きのゴンドラに乗り込んだ。

第四話

「ちょっと、前見て歩いてよ!」

空港でボーッと音楽を聴きながら歩いていたヴィゴは威勢のいい人間女に急に怒鳴られあわてた。

その女は25年前に死んだ彼女そっくりだったのだ。

しばらく呆然と歩き続けるとその女はコトもあるうに肩を引っつかんできた。

頭の中が真っ白になり、手に抱えていたパソコンを落としてしまった。

……。まさか、死んだはずなのに？

女は急にしおらしくなり、ごめんなさいを連発していた。しかし、ヴィゴはパソコンどころではなかった。

落ち着くため側にあつたイスに座った。反射的に落としたパソコンを拾いながら。

とにかく、パソコン内の彼女の写真を見て確認しよう。

幽霊なんてありえない。

彼女は天使だったのだから。

ヴィゴは祈るようにパソコンを立ち上げた。

横を見ると女も一心に合唱し、十字を切った。

・・・神仏混合。

突っ込みたくなつたが、かろうじてこらえ、一瞬立ち上がった待ち受け画面を見、死んだ彼女の顔を確認できた。少し、違う。

目の辺りはそっくりだけど。

ヴィゴは女を振り返り、幽霊でない事を確認しホッとしたので微笑んで見せた。

女も微笑み返した。「よかった、壊れなかったみたい。」

微笑んだ目元がますます死んだ彼女に似ていたのでヴィゴは混乱し

た。

マズイ……。そっくりだ。

プツッ。

パソコンは音を立てて真っ暗な画面になり、映っているのは二人のマヌケな姿だった。

「ああ……。どうしよう。」

ヴィゴはイスに体を投げ出し頭を抱える。

女は何かモソモソ言っていたがヘッドフォンしていたため何も聞こえなかった。

悪魔がオレを惑わせる為に遣わせたのか？

最初の剣幕は悪魔としか思えなかった。

……。そうだ。

そうそう、賛美歌を聴こう。

もし悪魔なら、退散してくれるだろう。

「これこれ、どうしようって思ってる時のオレのテーマ曲」

そう言くとヴィゴはたちあがり、女の前から逃げるように歩き出した。

しかし女は追いかけてきた。退散されなかった。

「……。何？もしかしてこういうのが逆ナンって言うやつなの？」

人間女にしつこくせがまれたら、こう言えと村仲間がわざわざ作ってくれた「2008 NIPON」に書かれた一文を復唱した。

逆ナンっていう意味はわからなかったけど。

（もう一つ、お。。。と言ってやれとアドバイスも受けていたがこっちの言葉は言わなくて良かったと後で心底思った。多分殺されていただろう）

女は真っ赤な顔になったのでヴィゴはあせった。しかし女は再び追いかけてきて話しかけてきた。

「私、車で来てるからよかったら修理できるかどうかだけでも……」

・・・車。あの・・・タイヤが4つついてるヤツ？
モノ好きのヴィゴは抵抗できなかった。

しかもこれは絶対死んだ彼女の幽霊ではないと確信できたから。
神も悪魔も運転はできない。車なんてなくても好きなところに移動
できるのだから。見た目は同じだが、性格が真逆な女。運命でこ
うしてまた巡り合えた。

彼女が死んだのは24年前。

暗闇の中で苦しい長い日々を送ってきたヴィゴの心に光が挿した
気がした。

何かやり直せる気がした。

これは記念になにかプレゼントを買わないと。

ヴィゴの生まれ育ったバイセン村の掟としていい事があつた日は
プレゼントをする。

なんのことはない。この法律を作った大昔の長老が大のプレゼント
好きだったのだ。

ヴィゴたちにとってそれは法律のようなものだった。ただ、ヴィ
ゴのプレゼントは趣味が悪いとなかなかの評判だった。

キレイなネックレスだと行商人から高値で買わされたプレゼントは
蛙のたまごだった。

人間界で仕入れてきた武器、ダイナマイトと思い込んでバイセン
村の守備兵にプレゼントしたものは生理用のタンポンだったし。

最悪のプレゼントはコトもあるうに恋人に贈ってしまった。

それは自分の母からヴィゴが受け継いだ、キレイな指輪だった。
指輪をあげた翌日彼女は殺された。

犯人はわからなかったが、多分指輪目当ての悪魔が殺したのだら
う。今回のプレゼントは出来れば女に選んでもらいたかったが、女は
お土産物屋なんてどうでもいいっていう顔をしていた。

女はイライラした表情で缶コーヒを飲み始めた。

女の名は静香。

イライラしている理由はこうだった。

せっかくの休日を彼氏が「日本を出る前に静香の顔が見たい、見送ってくれ」なんてコトいうからわざわざ来てやったのだ。

そして間の悪い事にその男の妻も見送りに駆けつけ、はちあわせになった途端追い返されたのだ。そりゃお金でつきあってる男だけど、何も化け物見るみたいな目で見ることはないと思うわ！

（なにやってんだろ、私。不倫男なんて所詮その程度なんだから。わかってるはずなのに。）

静香は男の大荷物の見張り番をしながら小さな声でつぶやいた。男のやけに重いバッグを抱え込み、静香自身のなけなしのお金で買ったバーキンは泣く泣く地面に置いた。

こんなことで知り合わなければ、なかなかのいい男だった。不思議な目の色をしていた。うす紫のキレイな色だった。

髪も不思議な色。見た目は黒だが、光によってシルバーのような色に見える。飛行機の中で爆睡してたのか、かなり乱れていたが。

（・・・あんな男とだったらHも楽しいんだけどな・・・でも、アイツ、いつまで選んでるんだろ？もう一時間近く待ってるんだけど。）

遠くからイライラした静香の顔を見てヴィゴはあせった。

（これはさっさと選んで渡してしまうに限る）

店の中はプレゼントに最適なモノは何もなく、店員のおばさんに助けを求めたが変な粉の食べ物の商品の説明をくどくど聞かされる羽目になった。

お好み焼きっていうヤツは、まだわかるけど、このもんじゃの気味の悪い事。

こんなのはプレゼントにはならない。

「女の人が喜ぶものがいいいんですけど」

店員のおばさんにだめもとで聞いてみることにした。

「こんなよろしいわ。キティーちゃん、いうてキレイな女の子おり

ません。京都らしい舞子さんどっせ」

ヴィゴはおそろいで購入し、おそろのおそろ静香の所に戻った。そしてとっておきの笑顔で差し出す。

「これ、君にあげるよ、おそろいになるね・・・っていうかこれ、ネコじゃん。」と言った。

ヴィゴにとってネコは大の苦手だった。理由は死んでも話したくないけど。

「おそろい？なんで？」

静香はあまりの馬鹿馬鹿しさにブツとコーヒーを嘔きだした。

（こんな下品なこと、オレの死んだ彼女はしなかったぞ）

幽霊案はもう完全に頭から消え去った。

安心したヴィゴは静香の手からコーヒーを取り、がぶがぶ飲み始めた。「パソコン、直るといいね」静香はそうつぶやいた。

車を見た途端、ヴィゴの興奮は頂点に達した。やはりタイヤが4つ。すげえ。

「安物の軽なのよ。あんまり写真撮らないでよ、恥ずかしいから」

（・・・初めて車に乗るなんてばれたらダサイと思われちまう）

そう考えたヴィゴは慣れたふりをし、車に乗り込んだ。実際のところ、車の進行方向と逆に座ろうとしたり、シートを何度も倒したりしてしまっただが。

（・・・変なやつ）静香は車を発進させた。

「につほんははじめてなんだ。おおっ！くるりくるり寿司じゃん！」嬉しそうに窓を眺めている。

何でも直してくれる心強い電化製品店に連れて行く、という心強い静香の計画に乗ることにした。というか、電化製品の店に弱い。

モノ好きなヴィゴは人間界の物を買付け天使、悪魔界に売りつける仕事をしている。

悪魔学校には「気をつけよう、甘い言葉と甘い除霊」という霊媒師

の除霊の仕方をまとめた冊子を卸し、幼悪魔教育に一役かっていた。天使界には「常に輝き続けるための魔法の白粉」を販売していた。天使は輝く為に、けっこう体力を消耗するらしく、女性が使っているラメ入りの化粧品が人気を博していた。

おしゃれアイテムとして、悪魔界に冗談で天使グッズを売ったらこれが大ヒット。

今回のこのパソコンもヴィゴが、ある有名なプログラマーの背後霊を操り、天使、悪魔用に新たにソフトを無理やり開発させたのだ。だから、人間界で直るわけない。

お店に着くと、静香は偉そうに「森田くん呼んでよ」とお気に入り

の店員を呼び出し、ヴィゴのパソコンを見せた。

店員は「ナンじゃこりゃ」と興奮しながらパソコンを調べ始めた。

「かなり、ひどく落とされたみたいですネ。」

店員の一言で顔が真っ赤になった。

（あのう・・・いくらくらいかかりますか？）

静香は小声で店員に確認した。

今月はあんまり給料も期待できない。大学の授業が立て込んで仕事どころではなかったのだ。

静香は生け花教室でバイトをしていた。

そして不倫相手はその生け花の先生。

妻公認の中だが、けして歓迎されてるわけではない。でも発表会で賞をとったりいろいろメリットはある。

自分の稼いだお金で大学に行くには、水商売か、こういった男を利用するしかなかった。

水商売にもいろいろある。

キレイなカツコさえしてればチップをくれる上級の客もいれば、キヤバクラの安時給でいきなり股間をさわってくるドスケベなオヤジもいるのだ。

自分でいうのもなんだが、容姿にはかなりの自信があった。親友の

涼子にはかなわないけど。男はパソコンなどそっちのけで日本の電化製品に見入っている。

「マックはウチ、直せないですよ、しかし、なんか見たことない、なんじゃこりゃ！」

店員が一人で盛り上がってるのを横目で見ながらつぶやいた。

・・・マック？あのマクドナルドの？

パソコン類にはめっっぽう弱い静香は頭がこんがらがった。

（あおう、弁償ってなると、やっぱり高いんだよね・・・？）

パソコンなんてわからないくせに・・・

ヴィゴは人間の心が読めるのだった。

静香の心を読んでいると、なんだか淋しい重たいものを持っているのに気づいた。

（ああ、やめよう。人の心、無断で覗くなんて趣味が悪い）

そして辺りにいいものがあるか見回すと、年齢を測る機械を見つけた。

説明書どおりに手に巻きつけながら思った。

実際天使も悪魔も自分の年齢を知らない。

悪魔界のはて。忘れられたような場所にヴィゴの育ったバイセン村があった。

しかしその村でも「天使と人間のハーフ」、「悪魔と人間のハーフ」ばかりでヴィゴのように「天使と悪魔のハーフ」はめずらしかった。子供のときはよくそれでいじめられた。

彼らは人間より長生きはするが、だいたい150歳くらいで死ぬはず。

人間界にはホント便利なものがある。

魔王なんて、占いにはまってるくせに自分の生年月日がわからないと悩んでるらしいのだ。

そりゃそうだ。

この世で初めに誕生した汚物から生まれてるんだからわかるわけな

い。

あれこれとボタンを押していると、ピーと年齢計が作動し始めた。

「・・・151歳と・・・ええ！！オレ、死ぬの？」

ヴィゴはあわてた。オレ、死ぬの？

静香はなぜかパニクるヴィゴをなだめ店の外に連れだした。

「あなたは死なないわ。151なんて少し高いけど、死なないわ。

とにかく落ち着いて話をしたいから。そうね。くるくる寿司はどう？」

と教えてくれた。

良かった～！生きるってすばらしい。

ヴィゴは途端に元気になり教えてくれた感謝の眼差しで静香を見つめた。

静香はなぜかモジモジしながら、車に乗り込む。

寿司屋にむかうらしい。

回転寿司というものが人間界に存在するのは知っていたが、見たこととはなかった。

ヴィゴは人間と同様、食べ物からエネルギーをとることが出来た。

「予約してくるから」

静香は駐車場にオレを置き去りにし出て行ってしまった。

・・・閉じ込められた！罠か？

予約の意味がわからず車のドアの開け方もわからず、一人でパニクっている程なく静香は戻ってきた。

「どうしたの？」

ヴィゴはあせってる自分を見せるのが恥ずかしく、音楽を聴くふりをして少しでも静香の心の中を覗く決心をした。

（今流行のバイヤーハンターかもしれない。天使界、悪魔界ではけっこう売上伸ばしてるから煙たがられてるんだよな、オレ。殺されるのか・・・。）という理由。

意識を集中すると、静香の心が映像として目に浮かんできた。

そして目をうたがった。

それは天使だった彼女が想像もしないような、セクシーな映像だった。

ヴィゴはおどろいた。

なぜ、初対面のオレにそんな感情を？

天使だった彼女はまるで尼のような貞操を重んじた。

ヴィゴはよくそれで悶々とし、仕事仲間にかかわれたものだ。

「つきあうなら人間女がいいよ、年はとるけどセックスは最高だ」
その言葉を今思い出した。

「どこのホテルに泊まるの？送っていくから。」

ヴィゴはポケットからプリントを出し、駅前の安いビジネスホテルの予約表を見せた。

「ここに泊まるんだ」

幽霊が出るらしいからあの世との連絡を取るのに使える。天使界、悪魔界につなげるインターネットもつながりやすいってことだ。

幽霊の放つ薄ぼんやりした光はインターネットのつながりをより快速にしてくれる。

「日本で働くのね。あなたなら、バーでもどこでも雇ってもらえるわ。なんだったら知り合いのバー紹介してもいいし、涼子のショッ
プでも・・・」

静香がいろいろ、話しかけてきたが、ヴィゴは適度にグロスが塗られセクシーに濡れている唇に見とれていた。

ヴィゴは我慢が出来ず静香を抱き寄せ、キスをした。静香は抵抗しなかった。

唇の感触はヴィゴの心をかき乱した。

なぜか懐かしいような不思議な感覚がしたのだ。

突然けたたましいベルが鳴り、静香は名残惜しそうにヴィゴから離れ、

「・・・順番がきちやった」と言った。

（駄目よ、私はお金の為にアイツ以外の男と寝るわけにはいかないのよ。キスだけで我慢するの！！）静香は呪文のように自分にそう言い聞かせていた。

（なんだ、寿司屋の順番か）とヴィゴは安心し、かばんからリサーチ用のデジカメを取り出した。

「この寿司屋の写真、仲間に送ってやらないと。羨ましがらるだろうな。」

席につくと、静香はかいがいしくお茶を汲んでくれたり、割り箸というものを割ってくれたり優しくなった。
ただ、よく食べた。

必死で性欲を抑えようとしているらしい。

人間って正直に生きればいいのに。

8500円。

（何の為に安い寿司屋にしたの・・・）静香は悲しげにつぶやく。

「いいの？おごってもらっても？」

ヴィゴは心配そうな顔で財布を覗き込んできた。

「気にしないで」静香の声が震える。

ヴィゴはこっそりホテルのプリントに魔法をかけ、日付をいじった。
こんな簡単な魔法ならヴィゴは使える。

再び車に戻ると、男のホテル目指して発進した。

（何気なく、ホテルの前で降りしてこのまま走り去ってしまうのよ）
静香は自分に言い聞かせていた。

「・・・ねえ、君一人暮らしなの？」ヴィゴがつぶやく。

（いいんじゃないの？・・・この子がオレと寝たがってるんだから・・・。）

「・・・そうよ」

「今日さ・・・泊めてもらっていい？」

「・・・なんで！！・・・ホテル予約してるんじゃないの！！」

ヴィゴはプリントアウトした紙を取り出した。

「日にち間違えたんだ。来年の今日なら泊まれるけど。最悪だろ？」
静香はあわてて紙をひったくった。

確かに来年の今日。

「今から、ホテル探してあげるから」静香はつぶやき路上に車を止め、携帯でいろいろ調べようとした。

しかし、ヴィゴが携帯を取り上げ、首に手を廻しキスをしてくと拒めないようだった。

さきほどの食欲は性欲を満たす代りにはなかった。

結局静香は男を家に泊め、求められるまま一夜を過ごした。

ヴィゴにとってはじめての人間の女だった。

天使や悪魔の女なら幾人か抱いたが。

天使は貞節を重んじ、悪魔は目もはばかるような大胆なセックスをした。

そしてこの人間の女は恥ずかしがりながらもヴィゴの要求に大胆に答えてくれた。

ヴィゴには新鮮だった。

アビリルを抱いた後のように静香が寝るまで髪をなでていた。

このままずっと一緒にいたい。

ヴィゴは思った。

ここにオレの未来があった。

アビリルを失った日から、ヴィゴの心がざわつくのを感じていた。
でもこの子がアビリルを失い、真っ黒に染まりかけていたオレを救ってくれるかもしれない。

この子も同じ気持ちになっただろう。こんなにオレを求めてくれたのだから。

そう期待し再び心を覗くと、そこには・・・別の男がいた。

静香はその男に今回のセックスの事がばれないようおびえている様子だった。

静香は「これつきりだからね」とつぶやき、ヴィゴに背を向けると眠りについた。

ヴィゴは心の底が抜けたような気になり、そうろつと起き上がった。

女の名は静香。それだけは最後にわかった。

机にのっていた本に名前が書いてあったのだ。

ヴィゴはおそろいで買ったストラップの一つをその本の上に乗せ、予約していたホテルを指し自分と荷物に移動の呪文をかけた。

次の日、静香が目覚めると男は居ず、作ってくれた朝食だけがテーブルに載っていた。

男がいないのが無性にさみしかった。

（今日も泊まって行けば？）

そう言いたいのを必死でこらえ、昨日の夜コトが済んだ後で「これつきりだからね」と冷たくあしらってしまったのだ。

・・・名前さえ聞くのを忘れて。ホント馬鹿だね、私って。

静香はコロンと再びベッドに寝転び、昨日の男の抱き方を最初から思い出しては顔が赤くなるのを感じた。

第五話

けたたましく携帯が鳴り、一瞬にして現実に戻される。

「静香！なにやってんのよ、今日はパパんこのバイト入ってるでしょ！」

涼子からの電話だった。静香はあわてて飛び起き、着物を着、タクシーの中で化粧をした。

涼子は実家が大会社経営をしており、たまにパーティがある。

そこにコンパニオンとして、お酒を配ったりするだけのオイシイバイトなのだ。

ほどなく会場に着き、涼子のパパに挨拶をし、客にお酒を配り始める。

涼子は社長の娘として、黒い豪華なドレスを身にまとい、とてもキレイだった。

（ねえねえ・・・）涼子の手招きする。

（昨日電話したのに何で出てくれなかったの？アンタの男外国に行ったんでしょ？少しの間、遊べると思って合コン誘ったのに！）

静香は笑顔で客にシャンペングラスを渡しながら、返事をした。

（昨日は大変だったんだから。そうそう、ねえ、マックって何か知ってる？）

「マックはマクドナルドでしょうよ」自信満々に説明してくれた。さすが私の親友。知識もおんなじレベル。

「昨日ね、空港で人のマックを落としちゃったのよ。そいでね、弁償って話になってその人とご飯食べに行ったの。」

「マックなんて1000円くらいで弁償できるでしょ？ご飯までおごっちゃって。ソイツ、男でしょ」

涼子の男に関する勘はいつも鋭い。

「そついいばさ、満たされた顔してるよね。ふん、いいなあ」

そついい捨てて、「静香がサボってる」と、パパに告げ口をしい

った。

外人の客に何枚か写真をサービスし、パーティが終わると涼子と二人で残りのオードブルをかき集めに廻った。

ここのホテルのローストビーフは最高においしい。グラスになみなみと高級ワインを注ぎ、ローストビーフをほう張りながら涼子に昨日の男について話してやった。

涼子は興味しんしんで聞いていた。彼女はすでに婚約者がいるのでなかなか自由に恋愛ができない。表向きは、だけど。

影ではいろいろ遊んでるのを静香は知っていた。

その婚約者は実は静香の元彼で別れさせられたイワクつきの男だ。

良家のお嬢様と婚約させると言う理由で。それが涼子。大学に入ってから親友になった子だった。

彼氏紹介すると言われ、会ってみれば元彼の哲平だった。

事実を受け入れるのに2年は苦しんだが、涼子には一切悟られないよう、哲平に約束させたのだ。

「えー！連絡先聞いてないの？」

涼子は心底残念そうに叫んだ。ホテルのボーイたちは涼子の奔放な仕草がたまらなくかわいいみたいで目が離せない様子だ。

「私も紹介してもらおうと思ったのに」

静香は何人私の男をとったら気が済むんだ！と言いかけあわてて口を押さえた。

「仕事もまだ決まってるみたいだし、どうするんだろう」

そうつぶやくと、涼子は面白そうに顔を覗き込んできた。

「今日もしかして家に来るかもよ」。ホテル見つからなかったとか言ってる。そいでさ、部屋に居すわられるの。

あんだ、ヒモになっちゃうよ。気をつけなさいね」

後半のヒモは聞き流すとして、今日もしかして来るかもって言うところに反応してしまった。

「そんなの泊めない。何だったら涼子の所に泊まりに行かせるから」そう言いながらも今日は臨時でお金が入ったし、と言い訳しながら

ワインを買った。

ソファでうたた寝をしていたのか、気がつくと23時になっていた。

（今日は来ないのかな。それとも・・・）

別な女を見つけたのだろうか？私よりお金持ちの心の広い・・・。
妙に嫉妬している自分に驚いた。

ふとテーブルを見ると、朝には気づかなかった、おそろいの舞子キティの一つが転がっていた。

（おそろいなんて馬鹿みたいだけど・・・）

静香はそれを取りあげ、自分の携帯につけた。つけていることでまた会える気がしたのだ。

次の日から新学期が始まった。

合同の式があり、新任の教授の紹介などで半日は潰れるくだらない1日だ。

ただ、ひとつの楽しみは新入学生にかわいい男の子がいるか、いなかというところだった。

涼子はいつにもまして気合が入っている。

パリのファッションショーで見て気に入り、即買いしたお高いワンピース。

「あいかわらず、セレブね。あんた、今のうちにそんな贅沢して将来何を楽しみに生きるのよ」静香の憎まれ口も涼子には心地いいらしい。

静香は少し伸びた髪を後ろに結い上げ、いつものジーンズにヒール付きのサンダル。ちょっとセクシーなキャミにパーカーをはおっていた。

バッグはもちろんバーキン。

大事な相棒。

講堂に入る時間まで学食の喫茶店でコーヒーを飲む事にした。

久しぶりに会う子もいて休みの間に付き合い始めた子もいた。腕組

みなんかしちゃってさ。

静香は昨日の男を思い出し、淋しくなった。

「静香、なによ、このストラップ。ダサくない？」

涼子に指摘され、あわてて携帯を隠した。

「舞子ストラップじゃん、何？京都に帰ったの？」

「・・・いいの、いいの。忘れて。」

気を取り直し、新学期のプリントを見てみると、静香の大好きな考古学の教授にアシスタントがついていた。

「やだ」もうなんでセドリック先生、私雇ってくれるって言ったのに」静香は落胆した。

セドリック先生の本を読み漁るチャンスだったのに。

「准教授。ヴィゴ、ド、ラヴァイエ」涼子が読み上げる。「すごいデブだったりしてね」涼子が興味なさそうにつぶやいた。

「私、ちよつと教授に抗議してくる。約束だったんだもん」

静香が席を立とうとすると涼子が止めた。

「あんた、ホント気が強いわね。いい加減にしないと男逃げるよ」痛いところを突かれた。

（これつきりだからね、なんて言わなきゃよかった。）

昨日の事をおもいだし心が痛む。

しおしおと席に着いた静香を涼子が追い討ちをかける。

「それとき、あの生け花の馬鹿男。いつ別れるの？不倫なんて気持ち悪いからやめてほしいんだけど」

「ひどい！！お金持ちの涼子にはわかんないよ。私には親もいないし自分で食べてかなくちゃいけないんだから！」

「バカ！もっと自分を大事にしるって言ってるの！」

学食で怒鳴りあいのケンカになり、哲平がどうとうと2人をなだめた。

みんなは興味津々で見ている。

礼拝のベルが鳴り、涼子は静香を置いてさっさと講堂に向かった。

（何よ、哲平もとったくせに）

静香はなるべくゆっくり行こうととろとろと歩き始めた。

すると近くでマルクス先生の声が聞こえてきた。マルクスも人間と悪魔の間の子だった。

バイセン村でヴィゴと共に育ち、共に学んだ。

差別されていたヴィゴを兄のように守ってくれた。

「お前、なんでこそこそ隠れてんだ？」

昨日のホテルは出たのか？402号室だぞ。地縛霊だから交信もスムーズに行っただろう？ありや、お前まさか霊を連れてきたのか！ぼんやりしてるからとりついたんだ。

霊は大事にしるよ。礼拝堂に入る前に取っておけ。除霊されたらもつたいないからな」

「ありや・・・ほんとに憑いて来てるな。」ぼんやりした声がした。話の意味は全くわからなかったが、セドリック先生の准教授だということはわかった。

なんだか、ぼんやりした感じの男だわ・・・。

どんなヤツだろうとこっそり見ようと柱越しに覗いた途端、体が凍りついた。

・・・この前寝た男だ。

今日は一応スーツを着て髪もキチンとしてる。

でも、あの目の色。まちがいなくあの男。

柱に縮こまり、この状況をどう処理したものかと頭をフル回転させた。

決めた。

・・・逃げよう。

これ以上いい考えなんて浮かばない。

「おお、静香、久しぶりだな。少し太ったんじゃないか？」

マルクス先生はホントに口が悪い。

でもここで振り返っては大変。

静香は軽く会釈をし走り去った。

「ああ、紹介しておこう・・・って行っちゃったな」

マルクスはヴィゴを振り返りこういった。

しかし、なぜかヴィゴは凍りついたような顔をしていた。

ヴィゴは不思議そうに覗き込むマルクスに無理矢理笑顔を作った。

ヴィゴは礼拝堂に入る前、背中にくっついてきた地縛霊を礼拝堂の入り口で待機するよう、説得した。ソイツはさみしいと駄々をこねる。

（後でな）とやさしく言うソイツは体育すわりでしゃがみこんだ。

静香はそうろつ、と礼拝堂に入ると涼子が手招きしている。席を取っとしてくれたのだ。

涼子は時々きつい事を言うが本気で心配してくれているのがわかる。

（ありがとう）とお礼をいい、仲直りをした。

その時礼拝堂の祭壇側の扉から、マルクスとあの男が入ってきた。

（涼子・・・困ったことになったの）

礼拝をしながら静香は小声で涼子に懺悔をした。

「ええ！どうすんのよ！」涼子が叫び、礼拝堂の生徒全員が涼子を振り返る。

（ちよつと！叫ばないでよ！！）

涼子は興味津々で新任准教授ヴィゴを眺めた。

（なかなかいい男じゃん）

涼子は感心しながら言った。

（女より男の方が寝た相手を覚えてるもんよ。

私もそれで苦労したんだから）先輩顔で涼子がつぶやいた。

静香はバッグの中のストラップを弄びながら、もう一度会えたことに喜んでいて自分に驚いていた。がやがやと騒がしくなり生徒達が一斉に出口に向かう。

ヴィゴ達が礼拝のストレスから介抱され、ほっと一息ついているとセドリック教授が近づいてきた。

「お前さんの霊は除霊されちゃったよ」

そしてヴィゴへ生徒たちに配るように、とプリントの束をこっそり手渡した。

「これを生徒に渡してくれ、お前さんはアシスタントなんだからな」セドリックは元天使でバイセン村を任されていた長老だった。今は退職し、好きな人間界で第二の人生を送っている。考古学教授だが、特に勉強していたわけではない。彼は何百年も生きていて、見てきた事を話しているだけだ。ときどき、学会ではとんでもない学説を唱える事で有名だったが、大体はセドリックが正しかった。実際に目で見てきたのだから。

時々記憶違いもあるが。

「・・・ああ、セドリ・・・いや、教授。ややこしいな。」そして教えられた教室に向かった。

ヴィゴはもそもそとプリントを抱え、階段を駆け上がった。

教室のドアを開けると40人ほどの生徒が興味津々の顔でヴィゴを眺める。その中に静香がいたのだ。(まずい・・・)

ヴィゴが教室に入ってきたのを見ると、静香は急に下を向いてなにか一身に書き綴りはじめた。プリントを全員に配り終えるころ、セドリック教授が入ってきた。

「去年と同じ顔ぶれだな。ん？一人増えたか。」

ヴィゴが気になるあまり、見にきた涼子がイスに縮こまった。

「今年からアシスタントをやってくれるヴィゴ先生だ。本職はバイヤーだったかな？」

君たちも若者の間で流行っている面白い物があつたら教えてやってくれたまえ。」

皆ははいつと返事し、今学期のテーマの説明に入った。

ヴィゴは教室の前に設置されているイスに座り、頼杖をついた。

ここからだと言香がよく見える。

見ないようにしよう、と思いながらも目は静香を眺めていた。

クラス中がだるい空気に包まれていたが、静香だけは真剣な顔をしてノートを取っていた。

説明が終わり、昼食の時間になった。

ヴィゴが黒板消しをまちがった方法で用い咳き込んでいると、涼子が話しかけてくる。

「・・・あのう大丈夫？・・・はじめまして、ヴィゴ先生！涼子って言います。」

かわいい女が話しかけてきた。

「お昼一緒にいかがですか？校内、案内します」静香は涼子をものすごい視線で睨んだ。

が、涼子は軽く無視し、ヴィゴの腕に自分の腕を絡ませ学食へと向かった。

静香の大切なバッグを人質に。

「涼子、バッグ返してよ」

静香はイヤイヤついていく事になった。

学食では哲平が涼子の為に席を取っていたがヴィゴ達が現れ、あわてて駆け寄ってきた。

「ちよっと、涼子何やってんだよ。誰だよソイツ」涼子はヴィゴから腕を放し、ニンマリと微笑んだ。

「静香の彼氏よ」（ちよっと、何よ！）

静香が後ろから黙らそうとしたが、遅かった。

哲平は昔の彼女だった静香の彼氏に少し嫉妬した表情で「あっそう」と答え、人数分の食券を買ってきてくれた。

ヴィゴは出てきたウドンを見て気分が悪くなり、食べる勇氣は出なかった。

デジカメで写真を撮り、今日の報告としてまとめることにした。

人間界につほんリサーチ2回目の報告はこうだ。「につほんではサナダムシを食う。」

「先生ウドン食べないんなら静香食べてあげてよ。この子細いくせに食欲だけはすごいんだから」

静香は無言でヴィゴのウドンを取り上げおいしそうに食べ始めた。

「先生、どこ住んでるの？」

涼子がかわいく聞いてくる。

「・・・オカ マホリンホテルに泊まって。今日もそこになるかなあ。」

「ふーん。あそこ幽霊出るでしょ。」

ヴィゴはむせた。

・・・忘れてた。除霊させちまったんだ。墓でも行って新しい相棒を見つけないきゃ。

「やっぱ出たんだ。女の幽霊でしょ？ヤケに食欲旺盛な」

涼子はそっぴい、にやっと静香に笑いかけた。

いい加減にしてよっと静香は涼子を睨みつける。

静香は少々過食気味だった。

両親の記憶がないとか、恋人を親友に取られたとか、そんな事がストレスではなかった。

どこかで自分が自分でない。

そして、それを見つけたいのにまだ見つからない。いつも心が淋しかったのだ。

それが忘れたくって過食に走った。

3年前少し変化が訪れた。はじめてTVで古代文字を見た。そして習いもししていないのにすらすると読めたのだった。

古代文字は神が使ったとされる文字。なんだか懐かしくて無性に涙が出た。

ここに、答えがある。そう思い学費を工面して大学進学を決意したのだった。

静香はウドンをすすりながらセドリック教授にもらったプリントを取り出し再度眺めた。

その時ヴィゴが物問いたげな目で静香に目線を送ってきた。

（何？）少し期待を込めて目をしばたかせた。泊めてほしいのかしら？

静香はウドンをすするのをやめた。なんにも欲望を食欲だけで満たす

事はない。

（えっと・・・お願いしづらいんだけど。）

（何？）期待が高まる。

（・・・この辺に・・・墓地あるかな？連れて行って欲しいんだけど）

静香は呆然としてしまった。

（墓地？なんで？・・・肝試し？）

いや、幽霊がどうか言っていた。

・・・変なヤツ。

静香は残りのウドンを平らげた。

ヴィゴは静香にすぎるような目をし、静香は真っ向から無視した。

（幽霊の女でもしてれば？）

涼子はヴィゴが自分にあまり興味をしめさないの（こんなことは涼子にとつてありえない、とても失礼な事だった）哲平をせかし、次の授業へそそくさと出て行ってしまった。

「ちよっと、涼子待つてよ。2人にしないで」静香があわてて荷物をまとめようとした。

そのとき、携帯が落ちた。ストラップが揺れる。ヴィゴはそれをひろいあげ、一瞬嬉しそうに眺めたが何かを思い出したのか急に顔が凍りついた。

静香はヴィゴから携帯を受け取り気まずそうにバッグにしまった。

「・・・ありがと。」声が震える。

「・・・彼氏にはれなかつた？」ヴィゴが冷たくつぶやく。

静香はしばらく動けずヴィゴを眺めていたが、「いやなヤツ」とつぶやきその場を立ち去った。

・・・オレって最低だ。

ヴィゴは頭を抱え机に突っ伏した。

何分そうしていただろうか。

その頭をぐつと押さえつけられた。

「お前早速静香とケンカしたのか」

マルクスが笑っている。

「あの子はアビリルに似ているが性格は全然違うぞ。手が空いてるなら仕事手伝ってくれ」ヴィゴはもそもそ立ち上がり、マルクスについて行った。

「この後オレ、展示会の仕事が入ってるんだけど……」軽く無視され生徒に配るプリントのコピーを頼まれる。

コピー機なんて触ったことない。事務のお姉さまに手伝ってもらい、どうにか刷り上げ、

あわてて移動の呪文をかける。展示会場に向かうのだ。

今日は幸運機が売りに出されるらしい。見たことはないが、ネーミングがよい。

ヴィゴは年齢計を得意先に紹介するつもりだった。

静香のことは忘れよう。オレはイヤなヤキモチ焼きの男になりさがつた……。

静香は午後の授業を受けながら上の空だった。

彼氏にはいなかった？ って。

なんで知ってるんだろ。私に男がいること。

いやなヤツって本当は私のこと。

私にはあの生け花野郎が必要。ヴィゴとの関係は……ただ、満たしかっただけ。

でも彼にとつてあれは遊びじゃなかった。

何人も男に抱かれてきた経験からこれだけは言える。あのキレイなうす紫の目で見られると心まで見透かされる気がした。

（忘れよう）

静香は大きな音を立てて机に教科書をのせ、授業に集中する事にした。

こうして2人の気まずいながらもいい関係が続いた。

静香は古代文字に詳しいヴィゴを勉強の先生として尊敬していた。

古代文字を母国語のように読む静香はヴィゴの死んだ彼女、アビリルそのままだった。

ヴィゴは一度ならず、静香をアビリルと呼んでしまい？という顔をされた。

涼子はすっかりヴィゴのファンになった。

ヴィゴは涼子を素晴らしいと褒め称えたからだ。

バイヤーのヴィゴにとって彼女は歩くファッション雑誌だったのだ。「今日の君のまつげは素晴らしい。」そして彼女の付けまつげをつけてるところを必死でノートに取った。

ヌーブラという存在を教えてもらった時なぞ皆の前で涼子の胸を触り、涼子をあわてさせた。「すっげえ、張り付いてる！」

そして本気で涼子の服を脱がせようとしたのだ。

「・・・涼子、頼むからつけてるとこ、見せてくれ」合掌してヴィゴは頼んでいた。

ヴィゴをデートに誘う女の子はたくさんいたが、結局彼女とまでは言える子はできなかった。

「ヴィゴ先生ってかっこいいんだけど、ちょっと変わってるわ」

一緒にランジェリーショップに行って下着を買った、と自慢気に話していた子が静香にばやいたことがある。

「ホテルにまで行ってガーターのついた下着を着て見せてあげたのに、Hもしないでさ。」

何時間でも考え込んでるの。最後に一言、コレは天使には売れねえって。

意味、わかんないし。私風邪ひいちゃった。」

静香はヴィゴが他の女と付き合うと考えただけでも身がちぎれるほどつらかった。

なぜ、たった一度だけの男なのにそこまでつらいのか自分でもわからなかった。

ただ、ヴィゴが毎日そばにいる。

不思議な事に静香の過食は以前よりかなりマシになった。

静香は相変わらず男はいるみたいだが、恋人というより、金でつきあつてるといった関係なのは見て取れた。それは少なからず、ヴィゴを慰めた。ただ、「今日はデートなの」と言う日はいつものジーンズでなくキレイなワンピースを着ていたりセクシーなミニをはいていたりする。キレイな足に見とれながらもヴィゴは少しヤキモチを焼いた。

もう一つのヴィゴの仕事、バイヤーの展示会は大成功で年齢計は売上を伸ばしたかに見えた。今年の夏はマルクスたちを誘って青い海でのんびりしよう。涼子も誘って……。もしかしたら静香もくるかもしれない。

こんがり焼けた肌に黒のビキニ。いや、白の方が似合うかな？

……。何も着ないのが一番だけど。

……。たまらん。

そんな事を考えながらヴィゴがパソコンで売上帳をつけていると一通のメールが届いた。

悪魔界から呼び出しがかかったのだ。

年齢計は全くのデマ。悪魔界の不安をあおる商品として指摘されてしまったのだ。

ヴィゴはあわてた。年齢計じゃなかった？

そういえば、静香が違つ事を言っていた気がする。聞いてみなければ。期日は今日の……。10分後。マジで！！！！

ホントに年齢計じゃなきゃオレ、捕まるぞ。

静香に直接聞くしかない。頭が混乱していたせいで静香の自宅の前に移動したつもりが

静香の部屋に移動してしまった。

目の前に想い出のベッドがあった。

かすかに揺れている。

静香だ……。泣いている？

静香はヴィゴが入ってきた音に驚きあらゆるものを投げつけ始めた。

「もう、これっきり別れたのよ。戻ってこないで！」

投げつけた相手がヴィゴだと知ると静香は呆然とした。体に巻きつけたシャツが落ち、静香の裸があらわになる。

「・・・何してるの？」

体を隠そうともせず静香は聞いた。

ヴィゴはしどろもどろになる。目のやり場にこまるのだ。

「人の家で何してるの？」

「・・・助けてくれ」

声が干からびたようだった。

「年齢計のことだけど、あの電気屋で君がパソコンを修理していたとき、151歳でオレが死ぬって言うててそれで・・・」

思うように説明ができない。

静香の軽蔑したような目が辛かった。

ヴィゴは頭を抱え、（もう無理だ）と思った。

「年齢計だと思って悪魔界に売りに出したら、なんか違って・・・。本当の事を話さないと捕まって火あぶりにされちまう・・・」

ヴィゴはパニックに陥った。

静香は何のことかさっぱり、という顔をしたが、血圧計のことだとわかってくれ、部屋中を引つ掻き回しダイエットマシンを購入する際取り寄せたヘルスケアパンフレットを取り出した。

「これにあなたが年齢計って思い込んでいるものが載ってるわ。展示会に出したのと同じじゃないかもしれないけど。」

でも、年齢計っていうのもなまじ嘘じゃないわね。だって、ここに」とパンパンとパンフレットを指で叩いた。

「血管の老化で血管年齢がわかるって書いてあるもん」
ヴィゴは落ち着きを取り戻した。

「・・・ありがとう！！」そして静香の貸してくれたパンフレットを抱きかかえた。

そして新聞の折り込みチラシの裏面に手馴れた手つきで魔方陣を書き、もぞもぞと呪文を唱えた。

一瞬にしてヴィゴは魔方陣のなかに消え去った。

（なんなの？いまの・・・）

静香は真っ裸で立ちすくんでいた。

ヴィゴって何者？そして自分が裸だと気づきうめくようにベッドの中に倒れこんだ。

ヴィゴにとって久々の悪魔界だった。

とはいっても、ここは裁判所。

天界と悪魔界両方の裁判がなされている。

以前は別々になっていたが、人間界と同じく経費削減ということで合同裁判の形をとっていた。

ヴィゴが裁判所への橋に向かい、（橋の下は虚無の国につながっており、落ちたら永遠に落ち続ける。）ヴィゴの後ろをついて来る黒いオオカミをにらみつけた。

さっきからジロジロ見張られてる気がしたのだ。

「なんか用か？」

ヴィゴが聞くと、ソイツは立ち止まり、耳の後ろを掻いた。

ヴィゴがなお、橋を渡り続けるとオオカミは突然おそいかなり、ヴィゴの右手の服の袖をちぎり取った。ヴィゴの腕の入れ墨があらわになる。

「何をするんだ、コイツっ」ヴィゴはオオカミの腹を蹴り上げ牙で怪我し少し血の出たところを手で押さえた。

ヴィゴの腕の入れ墨は生まれたときからあった。子供の頃はタダのアザだと思っていたが、大人になるにつれ蛇の模様が浮かび上がってきた。セドリツクは「なんだかわからんが、忌まわしい感じがする。人に見せるんじゃないぞ」と言った。

マルクスにも見せた事はない。

できるなら隠したかったが、もう、そんな時間はない。

なにせあと、5分だったのだから。

「お待ちかね」天使もどきが入界手続きを取ってくれた。

「あんさん、久しぶりやな。変なもん売りつけたんやないか？
バイブレータ以来やおまへんか。」

そうそう、以前は悪魔界で「バイブレータ 男イラズ」を売りかなりの売上を上げた。

ただ、一部の商品が手違いで神の国に流れてしまい、なんとハレンチな！というところで危うく去勢されそうになったのだ。

ヴィゴは天使もどきにこっそり金を渡し、入界手続きを早めてもらった。

あと、1分後には裁判が始まる。

「へえ、こんな仰山もろうて、おおきに。

こつちへどうぞ」

人間界輸入品取締り局への扉を案内してもらった。門番のトロールにも賄賂を渡す。

「さあさあ、どうぞ」

ギイッと巨大な扉が開き、めらめらと炎が襲う。

向こうでギヤーとかヒーとかうめき声が聞こえてきた。不幸な連中が火あぶりにされている。

オレも今日死ぬのか……。

全身白髪のと頭とひげでからまつてる爺さんが机で待ち構えていた。

「ああ、またアンタか。よう来るなあ。

今回はつと。ああ、年齢計ね。あれはいかん。

ウチのばあさんが120歳だなんてありえん。

ざつと見積もつても5600歳のはずだ。

私はまだ若いんよつと言いだめてな。ルージュまでひきよつたわ。

何か証明になるもの持ってきたか？」

ヴィゴは必死でパンフレットを指し示し、身振り手振りで説明した。しかし、爺さんはヴィゴの言う事など聞いてはいなかった。

着ていたシャツの腕が破れ、ヴィゴの入れ墨が見えていたのだ。

ヴィゴの目の色、腕の入れ墨。

爺さんはそれらを興味深く眺めた。

「おまえさんもしや……。しかもお前さんの父親は……。あいつか？」

ヴィゴは（会ったことも名前も知らないオヤジについて聞かれ）アイツって？と逆に聞き返した。そしてあわてて入れ墨を隠した。

爺さんは興味深そうにヴィゴを見つめていたが、急に話をそらせた。「このパンフレットなかなか面白い。

この、ブブツとキャンプというものをお前さん、仕入れられるか？」

「もちろん、ヴィゴ商店の名にかけ、仕入れてみせます」

ヴィゴは自分の胸に親指をむけ、自信満々に答えた。

……。あとで静香に聞こう。

ヴィゴは無罪放免になり、無事に帰してもらえることになった。今回はラッキーだ。

いつもは去勢だの、丸刈りだのさんざん脅かされるのに？しかし、オレのオヤジがどうだっていうんだ！ヴィゴはイライラしながら魔方阵に乗り人間界に向かった。

静香はヴィゴが消えていった魔法陣の前で呆然としていた。（一体、何事？）

ヴィゴが不意にあらわれ、「悪魔くん」で見かけた以来の魔法陣を手早く書き、そこに吸い込まれるように消えていった。

そして、悪魔界とか、火あぶりとか。

静香が魔法陣の上に消しゴムを置いてみたり、こわごわ鉛筆でつづいたりしていると、不意に風が起きた。

魔法陣からヴィゴが戻ってきたのだ。

消しゴムを頭に載せて。

「……助かった」

勝手に冷蔵庫を開け、置いてあった例のワインを勝手に空け飲み始めた。

ベッドに腰掛、ワインを一気飲みするとコロソと横になる。・・・
疲れた。

なぜか今回は簡単に釈放された。

オレのオヤジがアイツって・・・。誰の事だ？

・・・会いたくもないけど。

ヴィゴはワインボトルを抱きしめながらそのまま眠りについてしまった。

静香はベッドをとられてしまい素っ裸でヴィゴを見下ろした。
なんなの、・・・コイツ。

そう、コイツのセイで仕事なくなっちゃった。

静香は大事な事を思い出し床にへなへなと座り込んだ。

実は今日生け花野郎と別れたのだった。

ソイツは約束もしてないのに突然たずねてきた。そのことだけでも腹が立った。いそがしくレポートをまとめた時だったから。

しかも生け花展に出展する花を代りに生ける、と言われる。

これはいつものことだけど。

くだらない男。もう我慢できなかった。

ヴィゴの寝た後、のらりくらりと男と寝るのを避けていたのだ。

「今日は生理なの」とか、「今日は危険日なの」とかごまかしていた。

しかしいつまでもこの手が通用しない。

今日の生け花野郎はいつもにましてしつこかった。

（お金のためよ）と自分に言い聞かせ裸になりマグロのように目をつぶって横たわる。

しかし、体にキスをされた途端言い知れぬ嫌悪が体中を駆け巡った。
・・・私はヴィゴが好きなんだ。この男では話にならない。

その気持ちに気づけたことは静香を有頂天にさせた。

・・・ヴィゴに伝えなきゃ。好きだって。

しかし、今この体をまさぐってる、まさに入ろうとしてる一物はヴ

イゴのものはなかった。

「やめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめて！
！！！！！！」

たまらなくなりベッドから蹴つ飛ばし服を投げつけた。

「もう、お前に生徒は回さないから」と怒鳴られ「結構よ」と言ってしまった。

・ ・ ・ 来年からどうしよう。

大学もやめなくちゃ。働きに行かないと。

そしてベッドの中でワンワン泣いているとヴィゴがやってきた。

突然やってきて訳のわからない事をパニックになって話すし、魔法陣を書き消えていった。

そして再び戻ってきたと思ったら、ワインを勝手に飲み人のベッドで勝手に寝始めるなんて。

ヴィゴをベッドの端にコロンと押し込み、自分もその横で寝転ぶ。

だって私のベッドだもん。

ヴィゴの腕から少し血が出ている。

静香は濡れたタオルでキレイに血をふき取ってやった。

変なアザも見えるけど。ナンだろう、これ？この前は気づかなかった。

生け花野郎にまさぐられた体は気持ちに反し正常に反応していた。

朝、ヴィゴが目覚めたら、もしかして。

悶々としながらも、明日に少し期待しながら眠りについた。

でも……朝起きるとヴィゴはいなくなっていた。

・
・
・
夢？

夢じゃなかった。

ワインボトルがベッドに転がっている。

魔法陣が簡単に破られゴミ箱に捨てられていた。

ヴィゴが寝ていたところにチラシが一枚置いてあった。

「バイブレータ 男イラズ」

ヴィゴ商店と書かれたアメリカンコミック調のド派手なチラシ。
ヴィゴ商店・・・。

これでもやってろって言う事？
アイツ！サイテーだわ。

クウウン。

クウウン。

異様な気配がする。

静香はシートで体を隠しながら部屋の隅を見やった。

・・・可愛い。なんて可愛いのか。

そこには真っ黒のパグ犬がいたのだ、

それはヴィゴの腕に噛み付いたオオカミだった。オオカミのつもり
だった、が正解だろう。

本人もかなりショックを受けてるみたいだった。静香はそうと知ら
ずに、「可愛いね。ヴィゴが置いていったのね」と犬を引き寄せ、
撫でてやった。

第六話

静香はある決心をした。

学校につくなり涼子に「今日ヴィゴ先生見た？」と聞く。

「なに、その可愛い犬。抱っこさせてよ」

「ペロよ」静香は得意げに言い、「ヴィゴ先生の犬なの。昨日、置いていったから。」

「何！あんた達まだ、2人で会ってるの！！ずるい！満たされてる！！」

涼子はペロを抱きかかえたまま本気で腹立たしそうに叫んだ。

ペロを涼子に預け、学校中を探し回り、マルクスの研究室で潜んでいたヴィゴを見つけた。

ヴィゴは静香を見た途端、穴があつたら入りたいつという顔をした。昨日、まちがって静香の家に帰ってしまい勝手にベッドに寝てしまったのだ。

「ヴィゴ先生。携帯買いに行こう」

ヴィゴに声をかけた。

「質問あるたびに部屋に来られたらたまらないもん」

マルクスはウンウンと頷き、後ろに隠れようとしたヴィゴを突き出した。

ヴィゴはマルクスにうながされ、おとなしく買うことにした。

「・・・携帯って、大きいもの？」これだけは聞いておかなければ。

前回の展示会の幸運機はかなりだまされたから警戒した。

同業のよしみで20台ほど注文してあげたのだ。

するとホテルに「ミヤンマー」とかかれた耕耘機が20台届いた。従業員に「こんなのどこに置くんですか！」とキレられたトコだったのだ。

学校が終わり、待ち合わせのスタバに着くと、静香がなにやら真っ

黒い犬を連れ、コーヒーを飲んでいた。

「ほら、ペロ。ヴィゴ先生だよ」

犬を抱きかかえ、ヴィゴの顔に近づけた。

ペロ？犬はヴィゴをクンクン匂い、静香が見ていない事を知ると、耳に口を近づけて話しかけてきた。

（・・・いい女だな。）

誰？誰が話しかけた？

ヴィゴがキョロキョロするのを（ワシだワシだ）と犬がつぶやくのけぞるヴィゴを静香が笑いながらみていた。

「ペロ置いていったの先生でしょ？」

・・・いや、そんな覚えは・・・しかも勝手にペロって・・・。

犬はドヤ顔でヴィゴを見ながら、静香の胸元に鼻をこすりつけた。

「お前、ずるいぞ！」

ヴィゴが急に声を荒げたのでスタバ中の客がヴィゴを見つめる。

「何？」静香は股間を匂って来る犬を少々眉をしかめながらも撫でていた。

「だめだぞ、そこは！オレの思い出の・・・」再びスタバ中の客が見つめる。

「なんだか、スケベな犬ね。飼い主に似てるのよ。先生のコーヒー買って来るね」

静香は席を立った。「ペロ見ていてね」

ヴィゴが犬の首を引っつかみ、締め上げながら聞いた。

「お前は何者だ？さてはメルメロン商店のスパイか！」

かねてよりヴィゴの商才を恨み、今回の年齢計もコイツが消費者をあり、告発させたと云う事までわかっている。

（うつつ。苦しい。）

首を絞められた犬は反撃してヴィゴの腕に噛み付いた。

「お待たせ。あらっ何してるの？」

ヴィゴと犬はあせり、犬を抱きしめキスしまくり、犬もキスを仕返

した。

仲のよい飼い主と飼い犬のように。

少々行き過ぎ。普通、舌は入れないだろう。

・・・ちよつとやりすぎ・・・。

静香はコーヒーを持っただまま立ちすくんだ。

「昨日なんだったの？急に來て。説明してもらおうと思ってさ。魔法陣みたいなあれ何？」

ヴィゴはあせった。

普通、人間には知られないように振舞わなくてはいけないのだ。

しかし彼女は知ってしまった。

「実は・・・オレ。人間じゃないんだ。」

ヴィゴはぼそぼそつぶやいた。

静香は「ふーん」と本気にしない。

「知ってる、エロ王国のエロ王子よ。」と言いながらヴィゴ商店のバイブレータのチラシをヒラヒラさせた。

・・・ああ、それは・・・。

「いきなり部屋に來て殺されるだの、火あぶりだのって。

年齢計のパンフレットあげたら急にいなくなるわ、急に帰ってきて人のワインを飲んで、人のベッドで勝手に寝て。

バイブでもやってるってこんなチラシ置いていったのね。」

ヴィゴは土下座してあやまったが許してもらえそうもなかった。

でもなんでこんなに怒ってる？

勝手に部屋に入った事か？ワイン飲んだ事か？バイブのチラシだけ置いて物を置いていかなかったこと・・・犬か！！

「犬はウチで引き取ります。スミマセンでした」

ヴィゴは犬を抱きかかえた。犬にもお辞儀をさせる。

静香は（鈍感男っ）と心の中でつぶやいた。

とにかく今日の目的の携帯を買いに行く事にした。

大学の近くにある小さな携帯ショップだ。

店に入ると物好きなヴィゴは犬を抱きかかえながら興奮しあちこち見て廻る。

犬も同様に興奮していた。

1時間ほど見回ってただろうか。さつさと選べよ！といい加減静香がどなりそうになったとき、

「これにするよ」とシルバーの携帯を指差した。

シルバーの色はヴィゴによく似合った。

「いいんじゃない？目の色が引き立つね」

静香は感心していった。

「コイツにはこれ」

犬用に黒い携帯を選んでいた。ハツハツと犬が期待の目で見上げた。店員は困惑した表情で（助けて）と目で静香に合図してくる。

「ペロには、いらないわよ」犬は傍目でもわかるくらいがっかりした顔をした。

公園のベンチに座り携帯の使い方、連絡の取り方も説明してやった。「ヴィゴ先生はどこから来たのか知らないけど、携帯も知らないなんてバイセン村ってどこにあるの？」

「それは・・・」

「田舎なのね。恥ずかしがらなくてもいいのに。」

静香はそういうと、勝手にヴィゴのメルアドを決め自分の携帯に試しに送ってみたりした。

「あの・・・。ね。何か聞きたい時は携帯で連絡してくれたらいいし。」

何かしたい・・・とか夜・・・とか。

二度と来ないでって言ってるわけじゃないの・・・。ただ、用意とか、私も心がまえとか・・・シャワーも浴びておきたいし・・・。先に連絡して欲しいってだけで・・・。」

「ありがとう、これでブブツとキャンプも探せるね」

ヴィゴは携帯のEZウェブのオークションサイトを見ながら言った。ペロは静香の膝に乗りたがるし、ヴィゴは女心がわかってない。

男どもったら。（ペロもオスだった）

静香はベンチにペロとヴィゴを残し、

「・・・私、行くね」

と告げた。

「おい、どういいうつもりだ！」

静香がいなくなるとヴィゴは犬の耳元に口を近づけ小声で聞いた。

犬はヴィゴの方を邪魔臭そうに見やると、とんでもないところを舐めた。

「勝手にしろ！」犬に向かって怒鳴りつけ、犬はうなり声を上げる。いつのまにか周りに人だかりが出来ていた。

犬を連れてホテルに泊まるのはさすがに断られた。

「先日の耕耘機の件もありますからね」

ヴィゴは荷物をひとまとめにし、大学の寮に泊めてもらえるようお願いしにいった。

事務のお姉さまが世話を焼いてくれる。

「ここの部屋なら空いてるけど。」

それ、かわいいワンちゃんね。抱かせてもらっていい？」

「死んでもイヤです」と言っただけ。犬は恨めしそうにヴィゴを見上げる。

「幽霊が出るっていう噂なの、大丈夫？」

「願ったり叶ったりです。」鍵を受け取り早速向かう。犬はヴィゴに抱かれながら

（さっきの事務の女もよかったな。人間界はこれだからいい。）

「この色ボケ盛り犬が」

（お前の親父よりマシだ。なにせあだ名が歩くセックスマシーンだったからな）

・・・オレのオヤジってなんだかサイテーだ。

寮はとてつもなく古く、事務のお姉さまは部屋に幽霊がいるって言うだけ、

寮の玄関ですでに2人くらいの幽霊につまずき、「ごめんね」と小声でつぶやきながら部屋に向かう。

「オレの親父を知ってるのか？」

歩きながら犬に話しかけた。

（ああ、知ってる。お前にそっくりだ。）

「ナンだよ、それ。」

オレはずっと一人だった。両親も見ただことは無い。オヤジなんかくそくらえだ」

（そんな事を言うもんじゃない。）

お目当ての部屋に入ると、いるわいるわ。

幽霊のオンパレードだった。

「いやーこれは高速通信も可能ですわ」

なぜかもみ手をしながらヴィゴはつぶやく。

当分バイヤーの仕事を休むつもりだったから、この高速通信を使って商売するのも悪くない。

悪魔合体の材料をハンター達から仕入れ、合体センターに高く売りにつけるのだ。

ハンターを相手にするんだから少々手荒な商売だが、このさい仕方ない。

ヴィゴはわざとペロに見えるよう携帯をベッドの上に置いた。

「静香から連絡があるかもしれない、ああ、忙しい。」

ペロはじつとヴィゴを睨んでいた。

（役立たずの一物は今夜は必要ないそうさ。お前の商店のアレの方がいいんじゃないか）

と憎まれ口をたたかれた。

うるせーと脱いだ靴下を投げつけてやった。

（ふん、どうせ彼氏でも来てるんだろう）

ヴィゴは仕事に集中する事にした。

まずは近くにいた幽霊に声をかける。

（あのう、手伝って欲しいんだけど）

できるだけ甘えた表情でお願いしてみた。

幽霊が女なら、こっちのものだ。

ヴィゴにとって口説ける相手はパソコン媒介に使ったための幽霊に限られていた。

今回も大成功だった。もっともホモの幽霊だったけど。

（おにいさあん。ボクでよかったら使ってねっ）幽霊は尻を突き出しペロは大笑いした。

（おうおう、早く済ましてやれ）

ヴィゴは顔をしかめながら、パソコンのケーブルを尻に突き刺す。

変な声と共に、パソコンが繋がった。

悪魔界のバイヤー仲間からたくさんのメールが来ていた。

「お前、何したんだ？ヴィゴ商店に懸賞金かけられてるぞ！！」

（・・・オレ商店に？懸賞金？）

犬を振り返ってみるが、知らん顔をしている。

「・・・ペロ？」ものすごく勇気を出して彼の名を呼んでみた。

犬はなお、知らん顔をしている。そして、どこからくわえてきたのかキヤバクラのチラシをさしだした。

「・・・わかった。後で連れて行ってやるから話してくれないか？」

犬はうむっという顔をし、話し始める。

「あんたは子供の時に死んだ事になっていた。

裁判に行っただろう？そこで生きてる事がわかり、今、草の根搔き分けて探している。」

「じゃあ、アンタはオレを突き出すつもりできたのか！」

ヴィゴは構えたが、犬は興味なさそうだった。

「違う、あんたの親父にその事を伝えにきたのや。守らせようと思ってな」

犬はハッハツと言いながら玄関のドアをカリカリさせた。

「・・・守らせる？オレを？」ヴィゴは上の空で街に飛び出した。

ヴィゴは新聞の切れ端を片手に上の空でポン引きに導かれるがまま、一軒の店に入っただけだった。

うるさい音楽がかかり、ヴィゴは両親を思いながらボウーっと個室のソファアに座る。

かねてからヴィゴは一度、両親に会い、そして聞きたかった。・・・なぜ、オレを捨てた？

「いらつしやいませ、この子は今日、初日なんです。」

ヴィゴは頭を抱えた。

「・・・守る？いまさら何言っただよ。」

キャバクラの店員が連れてきた女は無愛想に顔も見ず、挨拶もせず、横にどかつと座った。

犬は大興奮し、その女にじゃれ付いている。

キレイに伸びた足。

体のラインがよくわかるワンピース。

「・・・こんな時にオレ、何見てんだよ。」

女は気が狂ったようにじゃれついてくる犬を見て「ペロ！なんでここに？」と叫んだ。

「・・・まさか・・・静香？」

静香はヴィゴを見て「こんな店に来るなんて最低！」と作りかけの水割りをぶっ掛けようとした。

店員があわてて止めに入り、「お前なんかクビだあ！」と叫んでいた。

ヴィゴが呆然とソファアに座っていると別の太った女が入ってくる。

「この子は慣れてますので、最高ですよ」と店員が言った。ペロが唸る。

「アキナちゃん、お願いね」そしてお絞りを手渡す。

「はい。失礼しまゝす」

慣れた手つきでいきなりジーンズのジッパーを下ろされた。生暖かい感覚が下半身を襲う。

「何するんだよ！やめろ！！！！」

ヴィゴは女を蹴り飛ばすと、店員にむんずとつかまれ、殴られ、店の外に放り出された。

・・・なんなんだ。

ペロはハッハッとヴィゴの顔を舐めてくる。

「やめろ！くわえられるのも舐められるのもたくさんだ！！」

ヴィゴが大声で叫ぶと側に誰かを感じた。

目を開けると静香が側にしゃがみこみ覗き込んでいたのだ。

「最低ね。あんな店に来るなんて。」

静香は一日でも働いてた事を棚に上げて言った。

昼とはちがうぴったりしたワンピースを着ている。

「オレじゃない。ペロが・・・」

「犬のセイにするなんてますます最低ねえ、ペロ？」。

ヴィゴは何も言えず、立ち上がった。

ヴィゴは歩きだした。ジーンズのジッパーを上げながら。

こうなったら悪魔界に行つてやる。オレ商店に懸賞金？笑わせるな。

バー 飢えるカム。

オレのような者には危険な場所だが、構わずそこを目指す事にした。静香は「待つてよ」といいながら追いかけてくる。

「私、仕事なくなっちゃって・・・男と別れたから。」

家賃も払えないし、来月からどうしようかと思って。だから、あんな店に行ってしまったのね。でもこれでクビ。大学もやめなくちゃ。

ー

バー 飢えるカムに入ろうとすると、静香がドアの前に立ちはだかった。

「そこ、はいるんだから、どけよ」

「どかない、私の話も聞いてよ。私気づいたのよ。ヴィゴの事が・・・」

ヴィゴは構わず入ろうとする。

が、店の扉を開け、一瞬中に入ったがすぐ放り出された。

ヴィゴはドアを蹴っ飛ばす。

「入れる！一つ目女め！！」

5分くらい、蹴り続けただろうか？

「なんだ？元気のいいガキだな」

玄関が急に関き、一人の男が面白そうに覗き込んだ。巨大な大男。

「ペロ、泣き止むのよ。うるさい！」

静香に抱きかかえられてもペロはその男にほえるのをやめなかった。

「そこをどけ、オレ商店を守らなきゃ。！親父なんかでしゃばられてたまるか！！」

ヴィゴは気づいてなかった。飢えるカムに押し入ろうと必死だったから。

しかし静香は男が驚くほどヴィゴに似ていることに気づいた。

もつとも猛々しい表情はヴィゴにはなかったし、何かをせせら笑っているような口元の表情もヴィゴにはないものだった。

ありえないほどの力で殴り倒されヴィゴは道端にうずくまった。

（オレだつて悪魔のはしくれ、そのオレを殴り倒すなんて・・・なんてヤツだ。）

ヴィゴが顔を上げ、ソイツを見ようとするとまた蹴飛ばされた。

静香がヴィゴをかばう。

「もう、やめて！死んじゃう！」

再び殴られそうになるのを静香が立ちはだかる。

「ペロ！噛み付くのよ！」

ペロが男に向かっていった。そして噛み付くどころかなにか、フウウン、クウウンと話しかけている。

（説明するのはじゃまくさいからお前の記憶を戻すぞ）犬はなにやらモゴモゴ言った。

ロキの記憶は一気に戻った。

・・・ロクサーヌ。思い出した。オレが命をかけて愛した女。生まれ変わり、美紀になっていたとは・・・。

近くにいたのか・・・。山下の妹として。

運命の神は・・・やはりいたんだ。

ロキは感動して涙を浮かべた。

うずくまり、ウンウンうなっている男を、犬はアゴでしめした。

（コイツがあんたらの子供、ヴィゴだ。）

コイツがオレの息子？

ロキは戸惑った。

（悪魔界で懸賞金がかかっている。こいつはプリユキトスだからな。守ってやれ。）

・・・蹴りまくってしまったコイツが息子？

しかもオレ達が必死に探していたあのプリユキトス？

ロキは頭がこんがらがり店の中に戻ってしまった。・・・ロバートに知らせねば。

（おいおい。守ってやれ！）ペロが呼びかけたがロキはもどらない。

「・・・ペロ。なかなかやるじゃん！！」

静香はうずくまっているヴィゴを忘れペロにエライエライとしてやった。

ヴィゴは（こっちの手当てをしるよっ）と心の中で舌打ちをし、歩道にうずくまり血だらけの体に癒しの魔法をかけ、傷口を塞ぐ事に集中した。

まわりの人たちが救急車を呼んだのか、ヴィゴにとっていやな展開になった。

（まずい、人間じゃないことがバレる）ヴィゴは移動の呪文をかけ静香を置き去りにし自分の寮に帰った。

「けが人は？」救急隊員があわただしく聞いてくる。

静香は「あれ？・・・すみません、さっきまでここでうずくまっていたんですけど・・・」

「痴話げんかもいい加減にしてくださいね。

周りのひとに通報されるまで殴つちや駄目じゃないですか。女の人なのに。」と説教をされ、おまけにDV女のように言われた。

（アイツ・・・今度会ったら殺す。）

「・・・ペロ？」

ペロは静香についてくるよう促し、ハッハッと手を上げ、タクシーを止めた。

タクシに乗り込み顔で右左と合図する。

その通りに運転手に指示を出し着いたのは大学の寮。

財布から残り少ないお金を支払い、なくなっペロについていった。

（ホント、今度会ったら殺す。）

静香はそう決意しペロがガリガリするドア、（この寮の中でも一番幽霊の出るといふ評判の悪い部屋）に入った。

ギィィィ。

気味の悪い音とともに扉が開く。

ベッドの上に血だらけのヴィゴが横たわっていた。

「ヴィゴ！なぜ病院に行かないのよ！」

静香は心配のあまり怒ってるのを忘れた。

「・・・病院に行かなくても治せるから」

静香は「嘘ばかり！」

とヴィゴの傷を調べたが、驚いた事に治っていたのだ。ただ、傷のあったところに血がこびりついていた。

「なんで？あんなに血も出てたし、縫わなきゃいけないくらい切れてたよ」

（そら、神の血が混ざってるからや、お嬢さん）

誰？関西人？静香は警戒した。

やっぱりこの部屋、お化けがいる。

（ワシや、ワシ）

ペロ？ペロがしゃべった！

静香は驚いたあまり、打撲の痛みに苦しんでいるヴィゴの上に座ってしまった。

「いたたた！！・・・静香、案外重たいんだな！」

「・・・ごめん」

「悪いけど水が飲みたい。」

静香はコップに水を汲みヴィゴの目の前に持ってきてやった。

「飲めないよ。・・・口移しじゃないと」

さも困った風な顔をし、ヴィゴがねだってくる。

「ペロに頼みなさい。」静香が冷たく言い放つ。

「さあ、説明してもらわないと。」

なぜ、傷が治せたの？

ヴィゴは正座をした。なぜかペロも横に並ぶ。

「オレは・・・人間じゃないんだ。（エロ王国のエロ王子でもない。と心の中で付け足した）人間界の物を神、悪魔どもに売りつける商売をしている。」

「・・・チラシの裏に書いた魔方陣は悪魔界と繋がってるの？」

「・・・ああ」

「そんなもの、私の部屋においていけないですよ！だから運がなくなっちゃったのね。」

高級ホステスって聞いたからバイトにいったらタダのピンサロだったし、無駄なタクシー代まで使わされて！（ペロを睨みつけた）おまけに犬はしゃべるわ、DV女と間違われるわ・・・」

「ごめん・・・」

「そういえばペロ、あの男になにか話しかけてたじゃない。なぜアイツ逃げ出したの？」

さては犬嫌い？」

ペロが大あくびしながらつぶやいた。

（うるさい女だな。だいたい、お前に一から説明する義務もない。大体ここまで話す必要もなかった。

記憶を消すから、ええっと呪文はっつと）

「・・・記憶を消す？」

静香の声がうわずった。

「イヤよ、やめてよ。どこから消えちゃうの？」

（そら、ヴィゴにはじめて会った時からや）

「やめてよ！大事な思い出なのに！！ヴィゴ、助けてよ！」

静香にとってヴィゴとのセックスは大事な思い出だった。

ヴィゴの前でそういうのは恥かしかったが。

ペロに手当たりしだい、物を投げつけ始める。

ペロは邪魔臭そうに簡単なシールドを張って防御していた。

呪文を思い出したのか、ペロは目をつぶって唱え始めた。

一瞬シールドが消え、静香の投げたヴィゴの食べさしの菓子パンがデコにぶつかって跳ね返る。

ペロは呪文を唱え終わり静香は、ほうとヴィゴのベッドに倒れこんだ。

「・・・消したのか？」

ヴィゴは少し、残念そうに言った。

「オレのことも忘れたってことか？」

ペロは変な顔をしていた。

（失敗だ。消す記憶の容量が思ったより多すぎた。何十年もあったぞ、なんで天界を知ってるんだ？）

2人で静香を見下ろし、静香はほうつと目を開けた。

「なんだか頭がボウつとしてる。長い映画を見せられた後みたい・・・」

ペロ、あなた呪文間違えたのよ。

記憶を失くすのでなく、呼び戻す呪文よ。いい加減ねえ。あれ？な

んで私そんなこと知ってるのかしら？」

静香はボーっとしながらも、ヴィゴの冷蔵庫からワインを発見し勝手に飲み始めた。

「おあいこよ、飲まなきゃやってられない！」静香はワインボトルをかかえ、冷蔵庫のチーズだの勝手につまみだした。

ヴィゴは静香を見つめた。

「記憶を呼び戻す？前世の記憶ってことか？」ペロは気まずそうにこっくり頷いた。

「って言う事は、静香の前世はもしかして・・・」

ペロは（知らんっ）という顔をした。

二人はワインをラッパ飲みし、チーズをかじっている静香を見つめた。

ヴィゴのモトカノ、アビリルは天使だった。

会ったばかり教本を読みきかせ、ヴィゴを感化しようとしていた。

しかしヴィゴは感化されず、あいかわらず悪魔合体系材料などを売っては商売の幅を広げていた。

生きていくためには少々汚いことも手を染めなければ。それがヴィゴの持論だった。

よくそれでけんかしたのだ。

彼女には全く理解されず、半分悪魔の血が流れてるからそういう考えになるとまで言われた。結婚を申し込んだ時、2度と商売をしないと約束させられ、神の国でパソコンを教える仕事を用意された。それが彼女の希望ならと、不本意ながらも承諾した。しかし、静香はキレイ事なぞ、笑い飛ばすだろう。

新学期、涼子と学食で言い争いをしていた言葉を思い出した。

「ひどい！！お金持ちの涼子にはわかんないよ。私には親もいないし自分で食べてかなくちゃいけないんだから！」

全く反対の二人。

静香はちらつとヴィゴの方を見て、「乾杯っ」とワインボトルを高々と上げ一気に飲み干し、ベッドに倒れこみ、そしてくうくうと寝始めた。

ペロはあきれた顔をした。「これが天使か？ありえん」

「オレは満足だ」

ヴィゴはそついい、寝ている静香のオデコに軽いキスをした。

（とんだ寄り道をした。）

ペロは記憶を呼び戻した事を気まずく思ったのか、あわてて帰る用意をする。

魔方阵を呼び出す呪文をかけた。

そして魔方阵の上でぎゅっと縮こまると悪魔界で腕に噛み付いてきたオオカミになった。

「あああ！！お前！！なんでオレに噛み付いた？」

（・・・プリユキトス。また会おう。）

そついうとオオカミは尻尾を体に巻きつけてくるくると消えた。

・・・プリユキトス？

・・・このオレが？

この世で一番忌まわしい生き物、腐れ神の飼い主。

ヴィゴは地のそこまで落ち込んだ気がした。

突然静香の携帯がなり、ヴィゴは思わず出てしまった。

「もしもし？静香か？」男の声だ。

・・・。

「昨日のことだけど、謝りたいんだ。お前にはそれ相応の暮らしもさせる。お前の育ての親の借金も全部払ってやる。だから、別れるなんて言わないでくれ」

ヴィゴは携帯を慌てて切った。

彼氏と別れ話をしたのか？

別れるから、仕事を失うから、金がなくてあんな変な店にアルバイトまで。

「私の話も聞いて」

飢えるカムの前で静香はそう言ってた。何を話そうと思ったんだろう。

何も聞いてやれなかった。

幸せそうにワインボトルを抱えて眠ってる静香を抱え、移動の呪文をかけた。

彼女の部屋のベッドまで移動し、横たえた。

オレは静香の人生まで迷惑かけるわけにはいかない。大学もやめよう。にっほんになんて来なければ良かった・・・。

うーんと寝返りを打つ静香の頬に最後のキスをし、別れを告げた。

第七話

静香は軽い頭痛で目をさました。

ああ、そうだ。なんで頭が痛いのか。記憶が一気にもどったからだ。ヴィゴの子を身ごもり、穢れた罪として天界で処刑されたのだ。

・・・もう一度、ヴィゴに会いたい。

その一心で人間として生まれ変わってきた。静香の心が満ちた。今初めて人間界に来てよかったと思えた。

（ああ、幸せ。ヴィゴにもう一度会えた。）

静香はまたベッドに横になりもう一度眠りにつこうとした途端携帯がなった。

「もしもし？静香？今日のセドリツクの授業、あんたサボったでしょ？」

（静香はあわてて時計を見、今が午後の3時と知り眩暈を起こした）何回電話しても出ないし、ヴィゴに聞いても知らないの一点張りです。早く来てよ！！ヴィゴが大学辞めるって言うのよ！！」

「ヴィゴは？ヴィゴに代わって！」

涼子はヴィゴに携帯を渡したようだったがヴィゴは出なかった。

電話は切られ、ツーツーと淋しい音が聞こえる。

ヴィゴが大学辞める？

昨日のピンサロの件、怒ってるんだろうか？

そうそう、そういうえば生まれ変わる時にヴィゴからもらった指輪を持ってきたはず。

たしか、あのへその緒の箱に。

アレを見せればヴィゴも私がアビリルだって気づくわ。もう離れるなんて考えられない。

静香はあわてて着替え、バスに飛び乗った。例の指輪をはめて。

指輪は久しぶりに光をうけ、キラキラ輝いた。

・・・ヴィゴに早く会いたい。

窓の外は静香のうきうきした気持ちとは裏腹に、どんより曇っていた。

バスはなぜか、突然スピードを上げ、客たちはおびえた声を上げる。そして一目散にガソリンスタンドに向かって突っ込んでいった。

意識が遠のく中で、煙の中を黒い3人の影が自分を取りまいていた。・・・何？コイツら。

「・・・プリュキトスは男のはず。なぜ女がその指輪を持つてる？とにかくよこすのだ」

静香には恐怖はなかった。元天使の誇りがそれを許さない。静香は影達をにらみつけた。

「誰が渡すものですか！しかも誰よ、あんた達。悪魔じゃないわね。・・・」

そいつらはガソリンタンクを剣でぶちこわし、手の中に小さな火の玉を作り出した。

「人殺し！！」

静香は黒い影をなじり、ソイツにしがみついた。

火はぽとん、とガソリンに落とされ、バスの方へとじょじょに近づいていく。

炎はバスを燃やし、辺り一面地獄と化した。

「女ごと連れて行け」

ソイツらは白い光の球を作り出し、静香を抱えあげ、その中に入った。

静香は黒い影に抱えられ連れ去られてしまった。

気がつくと辺り一面美しい海が広がっている。

木でできた住み心地の良さそうな家がいかだにのり無数、海に浮かんでいる。中にはこじんまりした小さな教会、公園もあった。そこは静香にとって懐かしい場所だった。

（まさか・・・天界？）

そして街の中央に見覚えのない異様に巨大な白い塔がそびえている。それは街とは対照的で非常に近代的な、冷たいカンジをかもしていた。

黒い影達は木の影で着ていたローブを脱ぐ。見た目は上品な年寄りだった。いかにも天界にふさわしい。

しかし、静香はソイツラを見てぞっとした。忘れもしない。

ソイツラはアビリルを「赤ん坊を身ごもった、汚らわしい」と処刑にした議員だったのだ。彼らは全く覚えてないようだったが。

塔に向かう道すがら、議員達に敬意を表し、祈りを捧げる天使達がいる。そして議員達は天使たちに祝福を与えた。

白い塔の扉は重々しく開けられ、たくさんの武装した天使たちに見守られながら透明のエレベーターに乗り込んだ。

周りを見ている者がいなくなると議員達は途端に態度を変えた。

「女よ、その指輪をどこで手に入れた？持ち主は男だったはずだ。」

「・・・知らないわ。落ちてたの」

静香は本当の事を隠した。

議員は腹立たしげな顔をし、静香の頬を殴りつけた。

そして静香の肩を引っつかみ、心を読もうとした。

静香は抗い、実にくだらけな事でも頭を一杯にさせた。

議員達はあきらめた。

「この女の心は忌まわしくて読めぬ。

もう少し浄化してからにしよう。とにかく指輪を破壊しなければ。」

「バスはどうなったの？」

「知らぬ。どうでもいいことだ」

静香は白い塔の最上階に下ろされ、乱暴に閉じ込められた。
なんで議員が私の婚約指輪を狙ってるのよ？

塔はとても寒く、高い空気とりの小さな窓からは天界が見渡せた。
静香がイスを持ってきて2つ重ね、それによじ登り天界を眺める。
やっぱり見覚えがある。ココ。この塔は知らないけど。確かココには天界の王、ラファエ様が住んでた宮殿があつたはずなのに。

と、突然一人の男が入ってきた。

「・・・なにをしてる？」

静香は驚いてイスからころげ落ちた。

「いきなり、声かけないでよ・・・。アイタタタ」

男は静香を助けおこし、イスに座らせた。

「私、いつまでここにいなきやいけないの？人間界に帰してよ。そうだ！バスはどうなったのよ」

「・・・あまりにも惨いことなので、私の独断で部下を助けによこした。

なぜ、貴方が指輪をもっているのか。それを調べる必要がある。」

「人間界に帰してよ。会わなきゃいけない人がいるのよ」

男は静香の顔をひと目見るとかなり驚いたようだった。

「・・・貴方、もしかして・・・。アビリル？・・・私を覚えてないだろうか？」

「え？何？私知ってるの？」

ペロが私に記憶戻しの呪文をかけて、自分がアビリルだってだけ思い出したの。」

「ペロ様？どなただろう、存ぜぬが。」

「あなたは？」

「ルーと申すもの。」

「ごめんなさい、覚えてない。」

「仕方ない、それより指輪をどうやって手に入れたのだ？」

「指輪はなんなの？」

「貴方の持ってた指輪にはラファエ様が封印されているのだ。」

「ええ！！なんで？しかもなんでヴィゴが持ってたのよ？」

「ヴィゴ？プリュキトスの事か？悪いが記憶を覗かせてもらおう」ルーは静香の肩を痛いほど引っつかんだ。静香は抵抗したが、一気に静香の記憶がルーに流れ込む。

ルーは静香の心のヴィゴを探した。
いた。

置いてあつた弁当を勝手に食べ（マルクスの大事な愛妻弁当だった）
怒られている男。

・・・コイツか。

なんだか、おかしなヤツだ。

不思議な目の色をしている。

すぐにでも人間界に探しに行こう。

しかし・・・いつ、アビリルと出会つたのだろう。どこで接点が？
ルーは必要な情報は得られたにも関わらず、なお、心を覗き続けた。
・・・悪いと思いつながら。

その男は有名な老舗、神デパート「ヘブンハレブン」で一角を借り、
歯のマニキュアを積み上げていた。

ヘブンハレブンは議員達が白い巨大な塔を作るまでは天界一の大きな建物だったのだ。

その頃ののん気な雰囲気に含まれてる天界の映像にルーは少し、ホツとした。

それにしても議員達は何の為にあんな巨大な白い塔を建てたのか。

ルーは未だに不思議だった。ラファエ様が追放されてすぐに着工が始まつたのだ。

神界に届くほどの巨大な塔。

悪魔界から改造人間を集め、奴隷のようにこき使った。

そうだ、あの出来事。

ルーは眉をしかめた。

あの時、改造人間の一人が議員達を見て、恐ろしいことを口にしたのだ。

「・・・アンタ達、見覚えがあるぞ。私は人間界では科学を専門にしていたものだ。アンタ達是我々科学者が決して踏み込んではない禁断の知識を、それとは知りながら人間界に広めた奴らだ。私は人間の将来を予期し、恐ろしさのあまり悪魔界に逃げ込んだ。アンタ達、何が目的なんだ？」

その改造人間はすぐに殺された。それだけでは終わらず、議員達は魔王に改造人間狩りを命令したのだ。あの事件は何だったのだろうか。あの時モルーはそれ以上追求しなかった。それにしても禁断の知識って？

・・・気を取り直し、静香の記憶を覗き見る。

ヴィゴが汗をかきかき、せっかく積み上げた商品の山。その一番バランスの重要な部分からアビリルは一つ、何かを抜きとった。

（こんなもの、あるんだ。）感心しているアビリルの横で積み上げた商品は総崩れ、男は憤り駆けつけてきた。

男は猛烈に怒りながらも天界でケンカは許されないので必死で声を抑えながら

「てめえ・・・じゃないあんた・・・なんていう事を・・・サッカー見なきゃいけないのに、オレ残業じゃんか！・・・いやいや、ワタクシ、残業させていただかないとダメになりアソバシタ。あれ？」

「・・・ごめんなさい。私も手伝うから。」

手伝い始め、再び山を崩し、あわあわとあせるアビリルをポカンと見ていたヴィゴは大笑いしはじめた。

「使い慣れない敬語は舌を噛むよ。」

まさか天使様が手伝ってくれるなんて言ってくれるなんてな。嬉しい。

でもさ、君・・・手伝ってもらわない方がいい気がする。」

神の国でけらけら楽しげに笑いあってる二人は異様に目立った。

「君は齒のマニキュアなんてしなくても、とてもキレイだよ」

ヴィゴは積み上げた商品を満足げに眺めながら言ってくれた。アビリルは嬉しかった。そんなふうに褒め言葉なんて天界ではかけてもらえないから。

友達がいなくてさみしく、すっかり仲良くなった男と少しでも一緒にいたかったので他の商品も見てみたいと言った。

ラメ入りの白粉、忘れた時のための賛美歌特集、お経特集。

「まさかの時の天使の羽もあるよ。洗濯とかするんだろっ?」

再び笑い出したアビリルはヴィゴの目をじっと見つめた。

「・・・羽なんてないわ。それにあっても忘れないし。・・・それにしてもキレイな目。あなたみたいな人がこの世界にずっといてくれたら良いのに。ここはつまらなさ過ぎる」

ヴィゴはアビリルをお茶に誘ってくれたがアビリルは断らなければいけなかった。

「・・・あんまり異性と話してはいけないの。」しかしヴィゴはしつこくせがんだ。

「罪深いオレを救うためには君とお茶をしないとイケないんだ。施しだよ、施し。」

神の国ではエネルギーだけを糧としている。

ヴィゴはバイヤー用の喫茶店にアビリルを連れて行き、そしていろんなものを注文しては食べてみせてくれた。

「オレ、ヴィゴって言っんだ。」

こうしてヴィゴとアビリルはデートを重ねた。

アビリルにとって天界は窮屈だった。

朝はお勤めから始まり、昼もお勤め、夜もお勤めだった。

合間合間の休憩も、「自分たちの存在する世界は本当に実在するの

か？単にあると思っ込んでるだけなのか？」というくだらないテーマで何時間も、何日も、そして何年も話し合っていた。

（あんなたちは存在しないかもしれないけど、私は存在してるわ！）

そう叫びだしたいのをこらえた。久々に会いに来てくれたヴィゴにこの質問を試してみた。

「自分たちの存在する世界は本当に実在すると思う？私たちは何年経っても結論が出ないの。」

公園から廃墟の教会に行き、海に沈む夕日を階段に座って眺めるのが二人のデートコースになっていた。ここだと、ひと目にもつきにくく、たまに手を握り合う事も出来る。ヴィゴは腰に手を廻したが、つたが、ごくごくたまにそれも許した。

ヴィゴはキョトンとした顔をし、そしてアビリルを抱き寄せた。

「今、確実にオレ達は存在してるよ。」

愛してる。・・・アビリル」

そしてキスをしてきた。

初めてのキスだった。

でもアビリルはその情熱に答えきれず、顔を背けたのだ。

「・・・私、ありえないほど、規律を犯してる」声が震える。

「どんな？」ヴィゴはアビリルのおでこにキスをしながら聞いた。

「あなたとこうして会っている、そしてキスも。」

「会いたくないの？」ヴィゴはキスをやめて心配そうに聞いた。

アビリルは首を振った。「そんなじゃないけど」

でもヴィゴにたいしてはいつもそっけない態度でしか答えられなかった。人を愛する事がなぜか罪なように思えたのだ。

こういうデートが3年ほど続いた。

ヴィゴは会えない時もマメに人間界で素敵なプレゼントがあれば神の国へヤタガラス飛羽便で送ってくれた。

・・・なんでこんなものばかり買つくせにバイヤーとしては成功

してるんだろう？

アビリルはヴィゴから送られたどんぐりで作った民芸品を指で突きながら考え込んだ。

本当はバイヤーを辞めてもらいたかったのだ。いつ、裁判にかけられるとも限らない。

裏金を積まなければ即逮捕、死刑になるかも。

そして新たな心配事。

ヴィゴが体を求めてくるようになったのだ。

3年も我慢すればヴィゴは限界だった。「オレ・・・死んじゃうよ」しかし天界人は、結婚後に生涯に一度しかセックスをしてはいけない事になってる。

それも目隠しをして。

そして一度で妊娠しなければ運命として一生子供は持てないのだ。

ヴィゴはそれを聞いて悶々とした。

「何の為に神はそういう行為を生き物に与えたんだ？子孫を残すのがオレ達生き物の原理じゃないか？

それを否定するなんて、それこそ冒涇だよ」

しかし、アビリルにも限界があった。

けして興味がなかったわけではないのだから。

そういう気持ちをヴィゴに打ち明け、人間界にイイモノがあるって張り切って持ってきたのが変なゴム製の風船だった。マルクスに教えてもらったものだった。

しかし、この「今度産む」は使い方を間違えたのだ。

アビリルたちはこれをお守りと思い、廃墟の教会の茂みの中で祭壇を作りそこに飾った。

そして生涯一度きりと決められていた行為は、何度となく繰り返された。

案の定妊娠してしまった。

ヴィゴは喜んでくれた。

ヴィゴの育ての親、セドリックは天使たるアビリルの貞操にあきれ

たらしいが、結婚は喜んでくれた。

ヴィゴはアビリルに例の指輪を婚約指輪としてプレゼントしてくれた。

「これにはオレの友達が入ってるんだ。信じられないと思うけど。グリフって言うんだ。

子供の時はいつも守ってくれた。次にグリフと友達になるのはオレの子だ。だから、アビリルが持っていてくれ。お腹の子に話しかけるだろう。」

アビリルはヴィゴからのプレゼントは仲間たちにバカにされるので今回だけは笑われたくない、大事なものとしてこっそり隠しておいた。

そして覚悟を決め妊娠している事を天界の議員達に懺悔した。議員たちは冷たい目でアビリルを見下ろしていた。

「妊娠？天使ともあろう者が。穢れておる。死ね。」アビリルは死刑にされた。

指輪はアビリルの魂を救いとり人間界に落としたのだ。

・・・ルーは驚いた。

アビリルの行方がわからず、皆で探し回った。その時に議員達も一緒に探してくださり、そして結局見つからず、お別れの儀式を執り行ってくださったというのに？

第八話

バス事故の知らせは大学中をパニックにさせた。

涼子は「まさか静香乗ってないよね？」と真つ青な顔をしてつぶやく。

「とにかく見にいってみよう。静香なわけ、ないじゃん。こんな時間から来るはずない」

涼子は声を震わせながらいった。

ヴィゴは何度か静香の携帯を鳴らしたが、出してくれない。

（さっきの静香の電話に出ればよかったんだ。くだらない意地なんて張って・・・）

もし、静香が事故に遭っていたら・・・）

涼子の車にヴィゴ、哲平が乗り込む。

そして恐ろしい現場に着いた。

もうもうと煙が立ちこめ、まだ炎が燃えている。

「・・・事故で行方不明なのは・・・静香さん24歳。」

警察無線の声が聞こえる。

・・・ヴィゴは心臓が破裂するかと思った。

「静香？静香が事故に遭ったの？」涼子は泣き叫び、哲平の胸に顔をうずめた。

哲平も蒼白になり、「静香はどこですか？」と警察に問いただしていた。

ヴィゴはその場にうずくまり、嗚咽を漏らした。

こんな炎のセイで、静香が・・・。

やっと会えたのに。

・・・オレも此処で死ぬ。

静香を一人で死なせるものか。

「ヴィゴ、危ないよ！」涼子が引きとめるのも聞かず、炎の中に突進していく。

哲平はヴィゴを炎から引き戻そうとしたが、到底かなう相手じゃない。

なにせ口キの血が流れているのだから。

追いついてきたセドリックとマルクスでやっとヴィゴを炎から引き離れた。

「オレは人を愛してはいけないのか？」

咽喉から血が出るほど叫んだが、言葉にならなかった。

声が出ない。

ものすごい怒りが体中を襲った。

真っ黒な霧が足元から咽喉元までせりあがってくる。霧は次第に形作り、黒い蛇となり、ヴィゴにまきついた。

ヴィゴは気を失った。

涼子は自分のマンションに連れて行くといった。そこなら広いし、ここから遠くないところだから連絡があればすぐ駆けつけられる。

涼子のマンションは地上30階の所にあった。

最高級マンションの最上階。

セドリックとマルクスはヴィゴをつきつきりで見張り、哲平は警察との連絡に大忙しだった。

涼子はヴィゴの側に静香の写真を置き、いつでも見れるようにしてやった。

「ヴィゴはなんでこんなになっちゃうの？ 静香だけじゃなくヴィゴまで死ぬかも・・・」

ヴィゴはときどき痙攣を起こし、病院に連れて行ったほうが、と忠告する涼子をセドリックが止めた。

「ワシらでできるだけの事はするから」

ヴィゴは夢の中で暗闇の中をさまよっていた。

すると、小さな手がヴィゴの手の中に滑り込んだ。手はヴィゴを暗闇から引き出そうともものすごい力で引っ張る。

「うわっなんだよ!!」

(ヴィゴ。ダメだよ。そっちに行っちゃ。アイツを蘇らせちゃダメだ。)

「グリフなのか?」ヴィゴが叫んだ。

その夜、涼子のマンションに真っ白な爆発ヘアの少年が尋ねてきた。

「・・・藤原君?」涼子が恐る恐る聞く。

「・・・はい。そうです。可奈子のお姉さんですよ。可奈子の事・・・絶対に連れて帰りますから。」

「なんなの?可奈子家出してるの?私のトコには来てないよ?それにしてもナニよその頭。」

藤原君はマジメなところがよかったのに。染めたのね。カラコンもしちゃって。」

藤原はイヤイヤと頭を振った。

「これにはイロイロ事情があるんです。

あのう・・・その男のヒトを連れて行かなきゃならなくて。これ、伝言です」

藤原はセドリックにロバートからの伝言を移したメモを渡した。

「長々のご無沙汰申し訳ござらん。(以下長々と季節のご挨拶が続く。)

さて、本題だがプリキトスをこちらに渡してほしいのだ。ロキの息子、ヴィゴの事だ。魔王はありがたいことにまだ、ロキの息子とは気づいてないらしいが。人間界にいる彼を狙ってベルセルク達が押しかけるだろう。ソレは人間界のために避けねばならん。まず、薬を飲ませる。「半悪魔の鼻くそ」は気付け薬になる。

藤原の鼻くそで事足りるだろう。ほじらせろ。

そして歩けるようになったら藤原にその男を託してくれ。」

セドリックは藤原に頼み、鼻くそゲットした。

そして丸薬をヴィゴに飲ませた。

気を失ってるヴィゴに飲ませるのは大変だったが。

ヴィゴはあまりにもでか過ぎる丸薬に何度かえづいたが、
（周りで見てる皆もなぜかえづいた）どうにか飲み込んだ。

「まさかヴィゴがロキの息子とはな。ワシもロキには会った事はないが……。」

「……君、ヴィゴを任せて大丈夫なのか？」

藤原は「任せてください」と言った。

薬はよく効き、ヴィゴは意識を取り戻した。

「歩けますか？まず、飢えるカムから悪魔界にいきます。

ロキが待っていてくれるはずです。」

涼子は「静香がどうにかなってるって時に連れて行ったりしないで！」とさげんだが、

ヴィゴが自分で立ち上がり、連れて行って欲しいとお願いした。自分のせいで人間界に迷惑をかける訳にはいかない。

マルクスがついて行く、と言ったがヴィゴは断った。

「……大丈夫だ。それより静香のコト、オレの代わりに見届けて欲しい。」

マルクスはわかった、と言い反対する涼子を引き止めた。

藤原はヴィゴを気遣いながら歩きはじめた。

「……その目の色。……そっくりです。」

ヴィゴは返事をしなかった。

「……いい人ですよ。僕も最初はこわかったけど。」

藤原は大人の男が歩きながら大声で泣いてる姿を見て胸がつまった。

藤原とヴィゴは飢えるカムにたどり着いた。

店の前には巨大なシートがかけられたバイクが止まっている。

ハーレーの倍はあるだろうか？

藤原はギイとドアを空け、「ヴィゴさんを連れてきました」と言った。

暗がりではビールを飲みながら何かを食べている匂いがする。暗がりで光るうす紫色の目。

アレがオレのオヤジ？

ヴィゴは鼻をすすりながらも、心をかたくなにした。

・・・オレをプリユキトスとして生まれさせた男。ロキ。

ヴィゴもロキの噂だけは聞いていた。

神でありながら悪魔に身を堕とした男。

ソイツがオレのオヤジだったのか。

「・・・泣いてるのか？」

ロキは冷たく言い放つ。

「藤原、お前は这个世界に残れ。お前が来たところで役にもたたんからな」

そういうロキに藤原があわてた。

「僕は可奈子を一人で置いておくわけには行きません。・・・迷惑だらうけど、連れて行ってください。」

「・・・勝手にしろ。」

店の奥に光りが灯り、一つ目女が偽造書類をかいて持ってきた。

「ああ、あんた、見覚えがあると思ったら、この前店に入ろうとしてロキに追っ払ってもらった人間ね。

かなり蹴られたり殴られたりしてたから店の前に死体で転がってると思ったのに。

いつの間にかいなくなつて。まあ、私はおかげで警察にも追求されずに助かったんだけど。

あなたがロキの息子だったとはね。そういえばあの時、目の色が一緒だと思つたわ。

悪かつたわね。」

「悪かつたって・・・アンタは息子を殴ったり蹴ったりしたってわけか？」

ヴィゴはあきらかに陰悪ムードに陥った。

藤原はアワアワとあせり、一つ目女に入れてもらったコーラを机にぶちまける始末。

「・・・とつとにかく、悪魔界に行かないと。」

「・・・僕の鼻くその効き目もいつまで持つか。」

「ちよつと！！僕の鼻くそってなんだ？」

ヴィゴは藤原に問いただし藤原は気まずくだまりこんだ。

ゴンドラは用意できてるわよつと一つ目女が案内してくれた。

「お前らガキはゴンドラで来るんだな。」

オレは、悪いが少し探したい女がいる。」

「そんな・・・。一緒に来てもらわないと。」

藤原がつぶやいた。

「とにかく後で人間コロニーで会おう。必ず行くから。・・・それとお前の女は生きてる。もう泣くな。ガキじゃないんだから。」

ロキはそういうと、店の外の巨大バイクにまたがった。

ヴィゴはロキを追いかけて外に出る。

「静香が生きてる？どこでだ！」

こんなときでもなければ、物好きのヴィゴにとってロキのバイクは「超イケテル」品物だった。シルバーのボディに神を冒瀆するタトゥ模様デカデカとペイントされていた。

「天界でだ。」

ロキは素晴らしい残し、バイクは街に走りさった。

「・・・天界で？静香が？」

呆然と座り込んだヴィゴを藤原はせきたてた。

「・・・ロキさん、勝手だなあ。とにかく。さあ、僕たちは悪魔界に」

「・・・オレに・・・コレに乗れって？」

藤原はブツブツ言うヴィゴを白鳥のゴンドラに乗せ、例のごとく白鳥は下品な音を立て暗闇を進んでいった。

「可奈子って君の女？」

「・・・いやっ違います。トンデモないです」行儀悪く座るヴィゴに席を占領され端に縮こまっていた藤原はあわてて否定する。

「そりゃ涼子の妹ならかわいいだろうがな。・・・性格が想像できる。すごく気が強そうだ」藤原は無言で頷いた。

「静香だ、すつげえキレイなんだ。」ヴィゴが自慢げに携帯の待ち受け画面を見せた。ヴィゴは静香が生きっていると知り、ホッとした様子だった。

「・・・知ってます、さつき見せてもらったので。」

藤原は自分達が悪魔界に来たいきさつを手短に話した。

「そりゃ気の毒だったな。オレも悪魔飼いつていうのは知っているし、悪魔を連れて歩いてる人間はたまに見かけるよ。でも君と同年のヤツがロキを飼ってたなんてな。」

ヴィゴ商店の十字架ペンダントを藤原がしているのを見つけたとき、ヴィゴは大喜びした。

「それ、今キテルよ。かなりね」

ゴンドラは悪魔界に着き、二人はかつこ悪く街のだ真ん中に投げだされた。

「あぶないっ」

藤原は悪魔界に戻ってきて太郎の力がよみがえり、すばやい動きで這い回ってる大ムカデからヴィゴをかばった。

「ごめりんこ〜」と大ムカデに乗っていたデーモンは叫ぶ。

「・・・サンキュ。藤原。つたく、悪魔みたいな野郎だ。・・・つて悪魔か。」

「悪魔界だと、僕は一応ケルベロスと合体して強くなれるんです。街も安全に歩ける。」

悪魔を悪く思わないで下さい。悪魔って慣れてくるとけっこうお人好しが多いですよ。」

この街ならヴィゴも何度が来たことはある。

バイヤーの商品の売れ行きを確認したり、売上をちよろまかす露天商のチェックなど。

露天商の不正が発覚しても相手は悪魔だから力でかなう相手ではなかった。

時たま、強い改造人間を雇い、懲らしめてもらうが謝礼もバ力にならなかった。

歩いていると、ヴィゴの商品のコピーが露天で売られていた。

「・・・ああああ！！！」

ヴィゴは露天商のグールにつかみかかった。

「ナンだよ、オレ商品じゃん！」

ヴィゴはグールに投げ飛ばされ、あわてて藤原に助け起こされた。

「・・・ひどい。オレ商品なのに。」

「急いだほうが、いいと思います。」藤原は道草ばかり喰うヴィゴに少々いらだちながら言った。

早く可奈子に会いたい。人間コロニー53番地。そこに可奈子がいる。藤原の足どりは軽かった。山下が一緒にいることなど、藤原はとくに忘れてしまっていた。

ぶっ壊れた人間コロニーには「入るにや」とロープが張られている。しかし、悪魔どもは好き勝手に入り込んで家具だの、食べ物などを勝手に盗み出していた。

「ひどい連中だな」ヴィゴは顔をしかめながらつぶやいた。

「人間コロニーはこの前ベルセルクたちに襲われたんです」

藤原は道端で呆然とすわりこんでいる人間コロニーの住人に声をかけた。

ソイツは藤原には見覚えがあった。

補習授業を受け持っていた先生だった。

「すみません、人間コロニー53番地はどこですか？」

ソイツは声を発せずアゴだけで、近くのマンホールをさした。

「は？どこ？」ヴィゴは訳がわからず、大声で問いたです。

藤原は（このヒトってかなりせっかちだよな。大人のくせに）と心でつぶやき、

「たぶんあのマンホールの下だと思います。」と言った。

マンホールをもぞもぞと下りると、ものすごい悪臭が鼻を突く。

「うつわ。くっせえ。死ぬぞ、こりゃ」ヴィゴが騒ぐ。

藤原は「あのう、ここは一応隠れ家なんで、少し静かに・・・。何か明かりになるものありませんか？」

と聞いた。ヴィゴは携帯をとりだした。

二人で暗闇を携帯の明かりを頼りに進んでいくと、ポツと小さな明かりが見え、扉が見えた。ノックすると女の声がする。

「誰？」

「可奈子だ！俺だよ、藤原！」藤原が叫んだが、音が反響し聞こえづらい。

「はあ？はつきり言いなよ」

ヴィゴが咳払いして活舌たつぷりに言った。

「あのさ、藤原クンに連れてこられた。ロキがココで待ってるってそういうと、扉が開く。

かわいい顔の女の子が覗いた。

「ああ、ロキの息子でしょ？目を見ればわかる。ああ！！藤原！！」「可奈子っ無事だったんだ！！！」藤原がヴィゴを押しつけ可奈子に飛びついた。

「藤原じゃん！！よかった〜無事で。って抱きつかないで。」

それにナニ、その頭。タンポポみたい。」

女の子は男物のぶかぶかの服を着ていた。

その子はヴィゴにイスを勧め、ココアを出す。

「ロキは？」「どっかに行っちゃったよ」

「フーン」といいながら、可奈子はヴィゴ用に入れたココアを飲みだした。

「名前は？プルンキンタマだったっけ？」

「・・・ヴィゴ。」

「可奈子・・・そういえば山下は？」藤原は恐る恐る聞いた。

可奈子は奥の部屋を指差した。

「私達が悪魔界に来た時、スーパーマルトミでベルセルクたちにかまってさ。

そいで裁判所に連れて行かれ、入国資格があるかどうか調べられたの。

（オレは喰らうメイトの裁判で来たのだ。早く帰って欲しければさ

つさと逃げた人間を探し裁判をすることだな。」ロキはそう言ったわ。

山下は早く檻から出してほしい一心でベルセルクに取り入ろうとしていた。

（ロキのことなら何でも教えますから）って言ってた。

ベルセルクは山下だけを檻からだし、魔王のところへ連れて行くと言ったの。

まる一日ほど、檻に入れられていたかな？

私、咽喉がからからで死にそうだった。

ようやく檻から出されたのは次の日の朝だったの。

ロキの入国が正等のものである事を確認したから。山下は結局魔王の満足いく情報を持ってなかったみたいで、ボロボロになって帰ってきたわ。

今、奥の部屋で寝てる。怪我してるの」

藤原が「どくたーに見てもらったほうがいいんじゃないかな」といい、可奈子はほっとけば？と冷たく言った。

「オレ、少しなら癒しの魔法使えるし、やってみようか？」ヴィゴが提案した。

「マジ？なによ、お兄さんやるじゃん。」可奈子は山下の所に皆を連れて行った。

山下は明らかに弱っていた。

可奈子はタダの切り傷と思ってるみたいで、簡単に絆創膏が貼られていた。

傷をみたヴィゴはこのままだと死ぬかもしれない。直感的にそう思った。

「ロキは・・・この傷を見て何も言わなかったのか？」

ヴィゴは信じられない思いで可奈子に聞いた。

こんなヤツでも一応飼主なのに・・・なんて冷たいやつだ。

「うん、ほっときゃ治るって。っていうかナニ？ヤバイの？」

ヴィゴは絆創膏をはがし、真っ黒に変色した傷に手を当てた。

「うつわ。ナニその色。最初そんなんじゃないかったのに。」

「藤原、悪いけど、そのペンダント使わせてくれ。」

山下は意識を失っている。

・・・このままだと、闇のしもべとなる。

ヴィゴは台所に行き、果物ナイフを探してきた。

そして山下の変色した傷にナイフを突き立てた。

可奈子は叫び、藤原はヴィゴを止めようとする。

「なにするんだ！殺す気かよ！！」

すると、傷から血が噴出し、そして真っ黒の長虫が這い出てきた。

ヴィゴは藤原にナイフを持たせ、十字架を構える。ブツブツ何かを唱えた。

「・・・ナニ？アレ」

長虫はヴィゴたちに向かって鎌首をもたげていたが、何かを確認したのかあわてて壁の割れ目からぬるつと出て行った。

「くそつ。逃げやがった。アイツが体の中を喰いやぶる。生きながらの屍になるんだ。あの長虫は魔王に操られたしもべ。コイツはロキの飼い主だから、操れるようにしようと思ったんだろう。」

生きながらの地獄を味わう。ロキのヤツ、知っていてほったらかしにしゃがって！

悪魔みたいなヤツだ！！」

だから悪魔なのよ、と可奈子はつぶやき、山下に駆け寄った。

「・・・大丈夫？山下？」

山下はうーんと起き上がり、傷だらけの二の腕を見てあわて始めた。藤原が手に血だらけのナイフを持っていた事から、

「藤原！！おれを殺そうとしやがって！！」

違うつと藤原は叫んだが、山下は睨みつけるだけだった。

ヴィゴは山下の手に自分の手をかざし、なにやらブツブツ唱えはじめた。

「これで傷はふさがる。安心しろ、死なねえよ。」

ヴィゴは魔法に力を使いすぎ、近くのオンボロソファーに座り込ん

で寝始めてしまった。

可奈子は「このまま、ここに寝かせておいてあげましょ」と言つて、白い布を毛布代わりにかけてやり、藤原を促し、部屋から出て行くとした。

「可奈子、おれもそつちに行くから」山下は何とか起き上がり、藤原が手を貸そうと差し出したが、ばしつと叩いて断つた。

「お前なんか、大っ嫌いだ」

可奈子は山下の頬を叩き、「いい加減にしなよっ」と言つた。

「そもそもアンタのセイで私達ここに来てるの。アンタが死にそうになつてるのをこのプルルン金玉さんが助けてくれたのよ？」

「・・・たぶん、プルルン金玉じゃないと思うけど。」藤原は遠慮がちに忠告した。

山下は知るかつとつぶやいた。

とにかくロキが帰ってくるまではここにいてはいけない。

3人は元いた部屋で気まずい思いをして座つた。

・・・そもそもロキが山下に飼われ、喰らうメイトしたいきさつはこうだつた。

人間界に落とされたロキはくだらない飼い主に恵まれた。

そして大量に人間を食っている様子を残酷に微笑みながら見ている飼い主もついでに喰つてやつた。

しかしいくら人間を喰つても飼い主を喰つても満たされる事がなかった。

セックスフレンドの店、飢えるカムでヤケ食っていたロキの、たまたま隣に座つたロバートにこう、忠告されたのだ。

「貴様、知ってるのか？」

人を喰うたび記憶が減っていくのだぞ。

飼い主の命令だからって必ずしも喰わなければならない事はない。

人間飼われ全書 第456条に書いてある。

喰わない権利としてな。

覚えておけ。」

その時のロキはロバートに余計なお世話だ！と殴りかかったが、ロバートは気にもしないようだった。

「自分も悪魔飼いの経験がある。」

そうしてポケットから可愛いリボンをつけたケルベロスの写真を出した。

「太郎だ。ワシが20人目の飼い主だったそうだ。」

最初は魔王に飼われていたが、エサの時に魔王の小指を噛んだらしく人間界に堕とされた。

最初は手がつけれんくらい乱暴で、事があると魔王のところにはかり帰りがつたが、

いまではワシを信頼してくれておる」

ロキはこの日から時々ロバートと一緒に飲むようになった。

「結局運命には逆らえん。ロキ、お前の運命は人間食いをするためだけとは思えん」

ロキは記憶を失っていたのでなんとも答えられなかった。

「お前は神だったんだぞ。その記憶まで失くしたのか？」そうロバートに言われロキは驚いた。

「もし、運命の神がいるのだとしたら・・・。

それに賭けてみようと思う。

オレはタマゴに戻る。ロバート・・・。タマゴを天界の上から投げ落としてくれないか？

オレを飼うべき人間の下へ落ちてくれるはずだ。」

そうしてロキはタマゴ帰りした。

ロバートは天界に行ける資格はないので、ヤタガラス飛羽便に頼む事にした。

「このタマゴを落としたらいいんでヤタガラスねえ？」

そう言つてヤタガラスは首に唐草模様の風呂敷を括りつけ、天界に帰っていった。

帰る途中、ヤタガラスは風呂敷がやけにもぞもぞするので道端で括

りなおそうと一休みする事にした。
すると、そこに大きな黒いオオカミが出てきてヤタガラスは縮み上がった。

「・・・なんでヤタガラスか？急いでいるんでヤタガラスよ・・・」
ヤタガラスは恐ろしさからタマゴを置いて逃げてしまった。

オオカミはタマゴをくわえ、人間界に下り立ち、山下美紀の眠っているベッドの中に押し込めた。

そして山下がタマゴを奪い取ったのだ。

山下の誕生日の日だった。

ロキはこの日タマゴから生まれた。

山下を飼い主として。

ロキは山下に飼われ、くだらないいじめっ子だの、うるさい親戚のババアなどを食わせられた。

運命の神にゆだねた結果がコイツか？ロキは後悔した。

ただ、妹の美紀とはよく遊んだ。

山下に隠れ、２人でベッドにもぐりこみ、怖い本を読み、おいしいお菓子だのを隠れて食べた。

だんだん父親は帰ってこなくなり、母親は酒におぼれ始めた。

美紀が中学になるころの話だ。

美紀が年々美しくなっていくのが原因だったらしい。

父親は美紀の美しさに魅せられ母親は嫉妬に狂った。

そしてまた、ロキの心は美紀に奪われた。

ロキにとって人間界に落とされて以来の幸福な時だった。

美しくなった美紀の髪を何時間もブラシで梳いてやった。この黒髪は何かを思い出させる。

ある日、美紀が掃除をしているとき、山下の隠し持っていた好きな子の写真を見つけてしまったのだ。

それは普通にとったスナップでなく、あきらかに盗撮だった。それは見逃せないほどの量だった。

美紀はその事を母親に告げ、母親は学校に連絡してしまったのだ。

その日、山下はロキに母親と美紀を喰うよう命令した。

その後、山下の可奈子の隠し撮りは、ますますエスカレートしまヌケな幼馴染の藤原にたのんで、盗聴器まで仕掛けようとした。

「この本を可奈子の本棚にこっそり返して来てよ。おれ、借りっ放しで怒られるからさ。」

悔しい事に藤原はよく可奈子の家に遊びに行っているらしい。

実際には可奈子の母親の自宅料理教室に藤原のおかんが通い、出来立てのご馳走を晩御飯代わりに藤原に試食させてるだけなのだが。

藤原はいつも炊きたてのご飯とふりかけを持参し、家では絶対味わえない何とかソースのかかったステーキだの、白身魚の香草焼きだのを食べた。

可奈子は藤原がそうやってジャージでのそのそ来る日がキライではなかった。

藤原がご飯をたいらげ、可奈子の母親と藤原のおかんがコーヒーを飲みながら世間話に花を咲かせてる間、2人でお気に入りCDを聞いたり、漫画を読んだりした。

学校では可奈子は超モテモテで話しかけるなど、藤原には考えられなかった。

その可奈子がこうして自分の横でCDを聴いて小声で鼻歌を歌っている。

歌はへたくそだったが、横に寝転びながら藤原は幸せだった。

可奈子は藤原が漫画に夢中になると、耳に指を突っ込んでやったりいたずらをするのが面白かった。

学校ではこうして自分らしさをさらけ出すなど、とてもなかった。ましてやジャージで頭にタオルを巻き、柿ピーを食べながら番茶を飲むなど。

可愛い、モデル志望の可奈子で通っていたからだ。

可奈子のお姉さん、涼子から借りたホラー映画を見るため、ソファを背もたれに床に座り二人は毛布をかけあい、怖いシーンに備え顔

を隠す準備をした。

母親にだまって用意したチューハイを片手に可奈子は柿ピーをつまむ。

しかし、映画はものすごくつまらなくて、可奈子は酔いも回ってうたた寝をし始めた。

そして藤原の肩にもたれかかってきた時、藤原は我慢ができなかった。

小学生のときからずっと好きだったのだ。

藤原は可奈子の唇をみつめ、こっそりキスをした。

唇が触れるか触れないかの怪しいキスだったが、藤原には精一杯だった。

そうして有頂天になった藤原は山下に頼まれた本をど忘れし、そのまま可奈子をもたれて眠るのを幸福に思った。

本はそのまま藤原が持ち帰り、かばんから飛び出していた本「モーニング息子」は、藤原のおかんがテレビを見る際、肘の高さ調整のために使われた。

山下は藤原を問いただしも出来ず、可奈子に告白する事にした。

たぶん、クラスきつての男前のおれだから振ることはないだろう。家も金持ちだし、おしゃれだし。

山下は休日にも可奈子をおしゃれな喫茶店に呼び出した。

可奈子は何のことか大体検討はついた。多分、付き合ってたって言われるんだろう。

返事はイエスと決めていた。

せっかく初めての彼氏になるんだもん。かつこいいほうがいい。

お姉ちゃんも初めての彼氏は一生の思い出になるんだから、よく考えた方がいいっていったけど。藤原だったら許すだってさ。

あんな、ダサイ男、今時マイふりかけ持参だし。

しかし、本当に山下に告白されると可奈子はしどろもどろだった。飲んでいた紅茶カップがガチャガチャ震える。

「・・・好きな人でもいるの？」

そう聞かれ、「・・・藤原が好き」と答えてしまったのだ。

山下は猛烈に怒り、飲んでいたカップを投げつけてきた。

こうなったら可奈子も黙ってない。

水をぶっ掛け、「あんたなんて、サイテー。」と言い捨て店を飛び出した。

その夜、藤原から珍しく電話があった。

なんだか声を聞くとホツとする。

そう伝えたかったけど、恥ずかしくて言えなかった。

ただ、心配なのはなんだか藤原の様子がおかしかった。

部屋で一人CDを聞きながら、「藤原が好き」と言った自分を思い返した。

でも一緒にいると楽しいとか、ホツとするとかそのレベル。それが好きって事なの？

ふと、ベランダに異様な気配がした。

振り返ってみると、そこには大男が覗き込んでいた。

可奈子は声にならない悲鳴を上げ、ヘッドフォンを投げつけた。

「・・・ガキの女か。まあいい。山下が呼びだ。」

そうして抗う可奈子を肩に担ぎ上げた。

山下の部屋に連れて行かれるとそこは「THE ストーカーの部屋」だった。

可奈子の写真が所狭しと張ってある。

制服の写真、体操服の写真。

夏の水泳大会の水着写真。そして、カーテン越しに影絵のように写っている着替えをしている写真まで壁に貼ってあった。そして壁紙ごと写真がカッターで切り裂かれていたのだ。

「・・・何これ？」

可奈子はおびえながらも山下をにらみつけた。

「ああ、君の写真だよ。おれが好きだった可奈子ちゃんの。今は反吐が出るくらいキライだけどね」

そうして喰らうメイトの全容を聞かされた。

「おれは可奈子と一緒にじゃなきゃ悪魔界に行かない。だってお前のせいで喰らうメイトになったんだ。おとなしくつきあっておけばこんな事にならなかったのに。」

山下は明らかにおかしい理論で攻め立ててくる。

可奈子はロキに助けを求めたが、ロキはぼうつとしていた。美紀を思っていたのだ。

ロクサーヌの記憶が戻った今、美紀はロクサーヌの生まれ変わりと
いう事は一目瞭然だった。自分たちの子供がプリユキトス。どうす
ればいい？オレが堕神だったセイだな。しかし息子も息子だ。くだ
らん商売なぞするから目立つんだ。バイセン村で農業でもしてりや
よかったのに……。

「……ロキさん？藤原も悪魔界に？」

ロキは我にかえり、あわてて頷いた。

「私も連れて行って。藤原に会いたい。」

可奈子は心のそこから藤原に会いたいと思った。

可奈子は自分の隣でソファに身をうずめ、ペラペラと悪魔雑誌を見
てる藤原をながめた。

（私、藤原のこと好きなんだろうか？）

「ヴィゴさんて、魔法使えるんだね、もしかしてみいこの呪いを解
く方法知ってるかもしれないな」

藤原はそんな事をつぶやきながら自分のココアのおかわりを練り始
めた。

山下は藤原を睨みつけていたが、

「あいつ、ヴィゴって言うんだ。ヴィゴって誰？」

「ああ、ロキの息子さんだよ」と何気に藤原は答えた。

「フーン」

「その頭、タンポポみたいだね。」可奈子はフワフワと撫でながら
藤原に話しかけた。

「そう、太郎って言うケルベロスと合体したんだ。ヴィゴさんは今はあんなんだけど、ホントはすごいヒトなんだって!」「そうなんだ」可奈子は感心したようにヴィゴの寝ている部屋を見つめた。

ヴィゴは夢の中でなつかしい光景に会った。

美しくも崩れかけた建物の側で花が咲き乱れている。

一人の少年が振り返り、ヴィゴはあっと叫んだ。見覚えがあったのだ。

（久しぶりだな！グリフじゃん！）

・・・ヴィゴ、思い出してくれたんだ。

（オレがいじめられた時、よくなくさめてくれたよな。オレの初めての友達だ。おぼえてるよ。）

・・・ボク、ヴィゴを守るんだ。アイツから。

（アイツ？腐れ神の事か？）

・・・さっきヴィゴが彼女の事で怒った時、少しだけ顔を出したんだ。真っ黒で。気味が悪くて・・・。

（ナンだそれ？真っ黒いヤツ？まあ、よくわかんねえけどもう大丈夫だ。静香は生きてたんだし。ソイツをこれ以上暗闇から呼び出すなんて事、しねえよ。）

・・・ボクもそう思ってる。でもね、ソイツ次にボクを狙いはじめたんだ。ヴィゴはあてにならない。お前がいい。

あのイヤな出来事を思い出せて。

そういう少年の周りに黒い煙が巻き上がった。

・・・うわっこわいよ。助けて・・・。

「グリフ！逃げろ!」ヴィゴは叫び起きた。

そして真っ白い布に包まれた自分を見下ろした。

・・・それは猛烈に臭かった。

「ナンだよ、これふんどしじゃん。すっげえ臭いんだけど!」

隣の部屋から叫び声がする。

「すごい人って・・・そうは見えないね」藤原と可奈子は顔を見合わせ笑った。

「俺、見てくるよ」藤原は奥の部屋に行き、可奈子は山下と二人つきりになった。

「・・・何よ」じつと見つめてくる山下に可奈子が警戒した。

山下は突然可奈子に近寄り口を塞ぎ、叫べないようにした。

「騒ぐと魔王に言いつけるぞ。・・・あんな、藤原のどこがいいんだ？」

そういうと、無理やりキスをしてきた。可奈子は思いっきり山下の頬をぶったたたいた。

「最低！！」

山下は藤原が物音に気づく前に外に飛び出していった。

「可奈子っ大丈夫か？」藤原はあわてて駆け込んできた。

「来るのが遅いよ！！何してたの??」可奈子はワンワン泣きながら藤原につっかつかった。

「ヴィゴさんが、ふんどしに絡まっちゃって・・・山下は？」

「出て行っただわ。死んじゃえ！」

藤原は「山下が街に出て行った？」とあせりだした。

「大変だ！！人間ストリップ野郎たちにつかまっちゃうよ！俺、山下を探してくる。」

可奈子は「行かないでよ！！危ないよ！」と叫んだ。

「どんなヤナヤツでも一応友達だから。すぐ連れ戻すよ！」

藤原は出て行ってしまった。

可奈子は泣き出した。

ヴィゴはふんどしからやつと逃れられ、部屋に入ってきた。

「なんだ？なんの騒ぎだ？」

「山下が魔王に会いに行くって。」

あんたのことも魔王にチクルわ」

ヴィゴはチクルという意味がわからなかった。

「・・・それに、オレのことも告げ口するかもな」

「・・・だからそう言ったじゃない？と可奈子にいぶかしげな顔をされた。

「サイッター。初めてのキスがあんなヤツに！」一時間ほど、藤原を待っていたが突然、サイレンが鳴り響きはじめた。

「またベルセルクたちのお出まし。」

「逃げるのよ、ココは危ないわ。」

荷物をあわててまとめ始めた。

そしてマンホールの入り口に止めてあったバイクにまたがり、エンジンをつかせ始めた。

ドーナツを買っていた持ち主のゴーストライダーが猛烈に追いかけてくる。

「ぶるるんさん、後ろに乗って。早く！」

バイクは空に浮き上がり、上下、左右グラグラと揺られた。

「・・・原付と全然違うね」

「・・・どこ行くんだ？」

「・・・知らない。どくさにまぎれてあんまり抱きつかないで。」

可奈子はバイクで街をすっ飛ばし、ヴィゴは可奈子の細いウエストに抱きつくしかしがみつくとこがなかった。

「全く藤原はお人よし過ぎるよ」

「・・・やめてよ、抱きつくの・・・。」

「藤原のタンポポ頭、どこからでもわかりそうなもんだがな」

「やめてったら！」

可奈子はバイクを留め、路上でヴィゴに説教し始めた。

「抱きつかないでよ！嫁入前の娘なのに！」

道歩く悪魔どもは可奈子の剣幕に面白がり、集まり始めた。

「・・・あの、可奈子ちゃん、落ち着いて」

「もう、最悪。ファーストキスも奪われるし、エロオヤジに腰は触られるし！」

「エロオヤジ言うな！」

「ああ、もう最低。あんたなんてベルセルクにつかまればいい。」

「お！ヴィゴじゃねえか！！お前懸賞金かかってつぞ。何した？魔王のパンツでも盗んだか？」

ものすごく体格の大きい顔中メーターだらけの男がヴィゴの肩をたたき、ヴィゴはよろめいた。

ヴィゴがたまにボディガードとして雇ってるモルボイという改造人間だった。

ヴィゴは事情を説明し、かくまって欲しいと告げた。

「うーむ。そうか。だが、人間コロニーはかくれるにはまずいぞ。

この前も襲われたからな。この間、ロバート達が人間の男の子と女の子を逃がしていた。そいつがお前らのさがしてる藤原だろう。」

「何それ！女の子って！！わたしより可愛いのか？」改造人間は頷いた。

「ひどい！」

「君も十分可愛いよ」ヴィゴは半ば投げやりで褒めたが可奈子は機嫌をよくした。

「とにかくどこか安全なところへ連れて行って欲しい。」

改造人間は自分の腕に仕込んだ電卓でヴィゴに代金を表示した。

¥1000000000000000000

ヴィゴは承諾し、さらさらと小切手を切った。バイヤーで稼ぎまくった全財産だった。

可奈子が尊敬の眼差しで見つめる。

「お兄さん、お金持ちだったんだ」

「こっちだ」

改造人間は追いかけてきたゴーストライダーを殴り倒し、バイクにまたがり、ヴィゴ、その後ろに可奈子が乗った。

可奈子はヴィゴにしがみつくのを恥ずかしそうにしていたが、それどころでなくなったのか、痛いほどひつついてくる。

「可奈子……。苦しい」

「ごめん……。だって……。怖いんだもん。」

可奈子の案外大きな胸を背中に感じながらヴィゴはまんざらでもな

かったが。

改造人間が連れてきてくれたのは廃墟の教会だった。悪魔界に教会？と疑問に思うが、人間界からきた人間達が神に祈りを捧げるため建てた。魔王は嫌だったが、心の狭いやつっと思われるのがイヤで笑顔で承諾したらしい。魔王は案外いいやつなのかもな、ヴィゴは内心思った。

「この地下に部屋がある。ここなら隠れてても大丈夫だ。藤原にあつたら伝えておいてやる。ほんで、ロキにも伝えておくよ。」

ヴィゴは「ああ。オヤジにヨロシクな」といい、改造人間は顔中のメーターを狂わせながら叫んだ。

「ヴィゴ！お前、ロキの息子だったのか？」

そんな人から金は受け取れん。

そういつて小切手を返そうとした。

ヴィゴはもらっておいてくれ、というし、改造人間はイヤイヤと差し出す。

「可奈子がもらってあげる」

そういうと可奈子は二人から小切手をひったくり、笑顔でポケットにしまった。

二人はああ！！と顔をしたが遅かった。

モルボイは惜しそうに二人に別れを告げ教会を後にした。

ヴィゴは地下におりる階段を見つけ一人でさっさと下りていった。薄暗い地下で小さなランプが唯一の明かりだった。

第九話

暗い部屋に一つのベッド。

水がポタポタしたたる音がする。

ヴィゴは落ちていた燭台に薄気味悪い形の蠟燭を挿しこみ、ライターで火をつけた。

可奈子は勧められるまでもなく、ベッドにうつぶせに寝転び、肘をついてあごを乗せた。

そしてヴィゴの髪を弄んでいる。

・・・さっきの夢に出てきた子、いつ以来だろう。ああ、そうだ。アビリルに子供が出来て、婚約指輪として渡してから現れなくなっただ。

なつかしいな。

・・・オレ達の子供が出来た事、静香覚えてなきやいいけど。っらい思い出だから。

そういえば真っ黒いヤツが出てきたってグリフが言ってた。

今思えば腐れ神の事だろうナ。腐れ神がオレの呼び出しを待っているって事だろう。

でも腐れ神がグリフを狙ってるってどういうコトだろう？

あの子の過去に何があったんだろうか？

腐れ神を呼び出すほどの怒り、憎しみを持ってるって事なのか？

可奈子はしまいと耳に息を吹きかけはじめた。

ヴィゴは可奈子の頭を叩くフリをした。

「・・・ごめんなさい」

可奈子はおとなしくベッドに横たわり壁側に顔を向けた。肩が揺れている。泣いてるのだろうか？

ヴィゴは可奈子の心を読んだ。

そこにはいつ人間界に帰れるかわからない恐怖が渦巻いていた。生きて帰れるのか？という恐怖。

そして藤原にまた会えるのか？という恐怖。

こんなに元氣そうに振舞っているけど内心は恐怖で一杯だったのだ。ヴィゴはベッドに腰掛、可奈子の背中をさすってやった。

「大丈夫、必ず帰れるから。藤原君って彼氏とな」

可奈子は壁側を向いたまま、うん、と頷いた。

ヴィゴはそのままベッドに横になり二人仲良く眠った。

6時間ほど眠っただろうか？

暗闇の中で可奈子はもぞもぞ起きだした。

隣にはあの男が眠っている。

（こんな時によく寝れるよね）自分の事を棚に上げて可奈子は思った。

そしてこれからの事を考えた。

可奈子は山下とのキスが忌まわしかった。

（お嫁入り前なのに）

可奈子はヴィゴの寝顔を覗き込んだ。

「そんなのはファーストキスにはならないよ。マヌケ彼氏にとっけ。」ヴィゴはそう言ってくれたけど。

可奈子の髪がヴィゴの頬に当たる。

「・・・静香？」

そういつて暗闇の中でヴィゴが抱きしめてきた。

「ああ！やめてやめて！！」

可奈子は金切り声を上げ、ヴィゴはベッドから落ちた。

「なんだよ、お前が紛らわしい事をするから・・・」

「・・・さあ、朝ごはんにしましょう」

可奈子は照れくさいのを抑えるため部屋から飛び出していった。

・・・朝飯なんて、こんなトコにあるはずない。

「あまり、うろろろするなよ」

抱きしめたのが静香だと思い、反応した部分が収まるまで落ちたトコロから動けずヴィゴは叫んだ。

可奈子が用意したのはヤケにグロテスクな果物だった。

アメリカ製のグミキャンデーのような派手な色合い。

「墓場にたわなに実っていたの」得意気に可奈子が披露する。

「こんなの食えないよ」

どうにか動けるようになったヴィゴがつぶやいた。

可奈子には「そんなもの食うなよ、腹壊すぞ」と忠告し、一階に上がっていった。

朝の礼拝堂はキレイだった。

ヴィゴは壊れかけたパイプオルガンの前に座り、鍵盤をおそろおそろ触ってみた。

音はまだ、鳴るらしくヴィゴは聞き覚えのある曲を弾き始めた。

ふと、頭がもぎ取られてる神の像に十字架を掲げ一心に祈りを捧げている少女が目にはいった。

（あれ、オレ商店の十字架じゃん！）

ヴィゴは有難い顧客に（まいどっ）ともみ手をし、邪魔をしないようそうろつと立ち去ろうとした。しかし可奈子がにぎやかにヴィゴの音楽に合わせデタラメの歌を歌いながら階段を駆け上がってきた（シー！静かに！！）ヴィゴが目で合図しても可奈子にはわからなかった。

「うわつびつくりした、あんた誰？」

少女はゆつくり顔を上げた。

とても美しい横顔に可奈子は驚いた。

キレイな黒髪が光りに輝いている。

「・・・驚かせてごめんなさい。」

ヴィゴは可奈子の頭を無理やり下げさせ

「オレ達地下にいますので、どうぞ心置きなく。」

・・・それ、いい十字架ですね。なんとというか・・・素晴らしい。」

と告げた。

「・・・お邪魔しています、これですか？ホントに安物で恥ずかしいんですが・・・」

と少女に言われヴィゴはあわてて可奈子連れ、地下に逃げ込んだ。可奈子はなんだか納得できず、

「そうだ、この果物食べさせてみよう。」といい始めた。

ヴィゴが止めるのも聞かず、可奈子は果物を抱え一階に上がっていった。

「これ、どうぞ」

少女は可奈子に「ありがとう」といい、おもむろに一つ取り上げた。

「・・・あのう、食べない方が・・・」ヴィゴが止めたが少女はかぶりついた。

「おいしいわ。これミルクの味がする。」

・・・

ヴィゴと可奈子は先を争って果物を奪い合った。

「ホント、おいしい。」

可奈子が勝ち、ヴィゴは可奈子の食べた残りを奪った。

「ああ！！ひどい！！ぶるるん金玉のくせに！！」

「それ、言うならプルキュトス。」ヴィゴは果物をほおぼり、うん、おいしいと言った。

「・・・プリキュトス？」

少女は首をかしげながらヴィゴを見つめた。

「そう、ぶるるん金玉」可奈子は笑いながら言う。

可奈子は「ここでロキと待ち合わせしてるの」と言った。

「・・・ロキ？ロキがここに来るの？」

少女はあわてた調子で聞いてきた。

「ああ、来るかどうかかわかないけどな」

ヴィゴがパイプオルガンに行儀悪く腰掛けながら指を果物の汁だらけにして言った。

少女は自分を美紀だと紹介した。

そして人間界から来て改造の手術を受けたのだ、と。

可奈子がかもしやつ思い、聞いてみるとやはり藤原と一緒にいた事が判明した。

「藤原さんっていい人ね。励ましてくれたり、守ってくれたり。」
可奈子は急に不機嫌になった。

「・・・ヴィゴ。咽喉が渴いたからもつと果物持ってきてよ」

「は？なんでオレが？」指をなめていたヴィゴは、睨みつけてきた可奈子の剣幕にたじたじになりあわてて教会を飛び出す。

二人になった途端、可奈子が美紀に食ってかかりはじめた。

「美紀だったよね？藤原ってヤツとイチヤイチヤしてたわけ？」

人が心配して悪魔界までついてきてやつてるのにいい気なものよね。私なんか、藤原と一緒に風呂に入ったことあるんだから！子供会の時だけど・・・。」

美紀はポカンとした顔をしてたが、可奈子がヤキモチを焼いてるとわかると、途端に笑い出した。

「藤原さんはロキと一緒にいる大事な女の人の為に強くなるってケルベロスの太郎と合体したわ。あなたが、その女の人のね。すごく可愛い子で自分なんか相手にしてもらってないんだって言うってたわ。」

「やだ、可愛い子だなんて」

あわてて教会に戻ってきたヴィゴは二人が険悪ムードから、互いに手を絡めあい、友情を誓い合ったのを見て抱えていた果物を全て落とした。

「やだ、なに驚いてるのよ、ねえ美紀。」

「大丈夫？おじ・・・じゃない。お兄さん」

今おじさんって言いかけたよね？とヴィゴが美紀に食ってかかるうとする可奈子が止めた。

「まあ、いいじゃない。どっちでもさ。それより美紀もロキを探しに来たわけだし。」

美紀は自分がロキに助けられた事、もう人間界はこりこりでロキに

会いたくて悪魔界に来た事を話した。

「ロキが人助けね。私も親切にしてもらったから。ヴィゴは彼の息子なんだって」

可奈子がさらっと言つてのけた言葉が美紀を驚かせた。

「どつりで瞳の色が同じだと思つた・・・。」

ロキにしてはやさしそうな顔。ロキほどかつこよくはないけど。でも・・・なんだかなつかしいわ。」

「褒めるかけなすかどちらかにしてくれる？」

ヴィゴがぼそつとつぶやき、二人は笑つた。

皆、それぞれ自己紹介をし、可奈子は静香とヴィゴの恋の話を何度も聞きたがつた。

ヴィゴはそれこそ事細かに話し始め、ベッドの中の静香の反応まで話し始めたときには美紀から横面パンチをくらつた。

可奈子は聞きたかつたみたいだが。

地下室のベッドは女の子二人に奪われた。

ヴィゴは一階の祭壇で寝ることになった。

こうして3人でロキを待つことになった。

が、2日、3日たつてもロキは現れなかつた。

ヴィゴは困惑していた。心の中で怒鳴り声がいつも響いているのだ。思い出せ、あの出来事をと。腐れ神がグリフに呼びかけてるんだろう。

ヴィゴは心を覗き込まないよう、はしゃぎまわつた。そうすることでグリフも言葉に耳をかたむけないでいい気がしたのだ。

しかしこんなにはしゃいだのは、この間の学園祭以来だ。あの時は・・・ホントにやりすぎた。しかし、あのギターってやつはホントにかっこいい。

毎日ヴィゴはパイプオルガンの前で弾きまくり、あまり弾き過ぎたのか、急におかしな音をたてはじめた。

「うわっこわれた・・・」

モルボイが藤原に聞いた情報をくれた事は3人を安心させた。

「藤原が街をうろつろしてるところをロバートに見つかり、かなり叱られたらしい。」

ロバートは太郎をねぎらうために、普段からの行きつけの店、メイ Dock カフェに連れて行った。

そこにお気に入りのケルベロスがいるのだ。

彼女に事情を話し、藤原を守ってもらうよう説得した。

ロキの行方はロバートも知らないらしい。」

モルボイは小切手を期待して可奈子を眺めたが、可奈子は知らん振りをした。

モルボイは恨めしそうに可奈子を見つめ、さみしそうに帰っていった。

結婚相手を選べといわれたとき、まっさきに頭に浮かんだ女性がアビルだった。

ルーは気をとりなおして優しく言った。

「アビル。いい子だから少しやすみなさい。」

静香をベッドに寝かせ、オデコに軽くキスをした。今、ルーはヴィゴに嫉妬していた。

ルーは身震いした。嫉妬など。醜い感情だ。

そう思いなおし、ルーはあわててドアから出て行った。

・・・ヴィゴに会いたい。静香は寝返りをうちながらつぶやいた。

あの婚約指輪をもらったとき、どんなにうれしかったか。そして未来を語るヴィゴがどんなに優しくかったか。

その時驚いたことにちいさな少年が静香の意識の中に現れた。少年はおびえていた。

「大丈夫？」静香が話しかける。

・・・僕、怖いんだ。君がこんなとこ連れてきたから。ここはキライ。裏切り者の二オイがする。

「・・・あなた、もしかしてラファエ様？」

・・・

・・・ヴィゴに会わせて。僕、ヴィゴを守らないと。

ルーは姿勢をただし、議員達が悪魔界から匿ってきた少年のいる部屋に入った。

（こんな汚れきった魂の少年を今度の祭典に使うなぞ。天使の少年を使えばいいのに。おかしいな）ルーは不思議に思った。議員達はルーには祭典のお花を持たせる係の少年を見つけた事になっていたのだ。

少年は山下だった。議員達が指輪破壊の生け贄を買いに悪魔界の合体センターに行った時、道の途中で山下が悪魔達に苛められ、泣いているところを見つけたのだ。

山下は持ち前のずるさで、自分が何も知らないかわいい少年を演じ、議員のおめがねになかった。

ルーはその少年を着替えさせ、腕の傷の具合をみた。

議員達は悪魔に苛められた時につけられたと思い込んでるが、違う。

魔王に長虫を挿入され、誰かが処置した。

ラファエ様しか知らない方法。不思議だ。

キレイに整えられた部屋で少年はえらそうにふんぞりかえっていた。ルーにへりくだる必要はない。山下は即座にそういう事を見抜く能力に長けていた。

「あのさあ、ロキに復習したいんだけど。

そいで、可奈子って女と。そいでバカ藤原。

おれを殺そうとしやがって。」

「・・・まずはその腕の傷の事を聞きたい。」

ルーはため息をつきながら山下の腕をとった。

「コレ？マンホールの下の部屋で男に刺されたんだ。なんでも長虫が体中を食い破って生きながらの屍になる魔法を食い止めたとか言ってた。あの男、頭がいかれてるんだ。」

山下はくるくると指を頭の上でまわした。

「・・・男とは？知ってる奴か？」

山下は首を振った。

「なんで？知りたいの？アイツ、誰だったわけ？可奈子がロキの息子だって言ってたな。」

ロキにも息子がいるらしいな。」

「ロキの息子？」

「そつだよ、ソイツもついでに殺してよ」

山下の記憶をさぐったルーは驚いた。

・・・ヴィゴだ。

ルーは山下につめよった。

「ソイツは今、どこにいる？」

「知らない。知ったことか！！」

「何を騒いでいる？」

議員の一人が部屋に入ってきた。

山下はきつちり座りなおし、いかにも罪のない目で議員を見つめる。

議員は山下にやさしく微笑んだ。

「不自由してるものがあれば、コイツに言いつけるんだぞ。お客様なのだからな」

山下は「十分よくしていただいてます。」と言った。

「ルー、指輪を持っていた女、

手荒なことでもしない限り吐かないだろう。

殺してはならん。吐くまでいたぶるがいい。」

と言った。ルーはあせった。

プリユキトスの恋人とばれたら再びアビリルは殺されるだろう。利用されるかもしれない。

ルーは議員を押しつけ、静香のもとに走っていった。議員は？という顔をし、山下は肩をすくめる。「あの方、すこしおかしいですね」と言った。

・・・ヴィゴの記憶を消すしかないか？

ルーはあわてて部屋に向かった。

部屋にもどると静香は待ちくたびたようにぼうつとした顔で座り込んでいる。

「ああ、待ってたの。今ね、指輪の子が、ヴィゴに・・・今すぐ・・・」

ルーはあわてて静香を黙らせ、震える手をオデコにあてた。

「急がないと。貴方を救うためだ。」

彼は小声で記憶を消す呪文を唱えた。

そして静香は死んだようにベッドに倒れこんだ。議員達が部屋に入ってくる。

「この女か？指輪を持っていたのは？」

ルーは「聞き出そうと苦しみの魔法にかけたら気を失いました。後で必ず報告します。」

「そうだったのか？後で報告するように」

議員は手をふり出て行った。

静香はキョトンとした顔をした。

「ルーなの？」

ルーは驚いた。ヴィゴの記憶を消した反動で、何者かに消されていた記憶が蘇ったのか？

ともあれ、思い出してくれた。

ルーはうれしかった。

「早く逃げよう、悪魔界にでも」

「ちよつと待って。頭が痛い。それよりロクサーヌは・・・。」

静香はあわてて話し出す。

「ラファエ様の子じゃないのに……。彼女、どうなったの？」

ロクサーヌがアビリルに子が出来た事を打ち明けていたとは。

これは天界のトップシークレットだったのだ。

ロクサーヌはラファエの妻だった。他の男の子なぞ、ゆるされるはずもない。

「ロクサーヌは私に相談しに来たの。こっそり抜け出してきて。すぐにラファエ様に懺悔しにいかなきゃって二人でこっそり会いに行ったの。私は宮殿に入るのは許されてないから、忍び込むのは大変だったけど。」

ラファエ様はロクサーヌを本当に好きだったのね。私の子として、王に任命するよ。っておっしゃったわ。そして簡単に儀式も行われたの。まだ、お腹にいる子に戴冠式を行うのはおかしいけど。

その時、ラファエ様はとても悲しそうだった。」

ルーは驚いた。

・・・ヴィゴが王に任命されていた？

「今まではね、ロクサーヌは無理矢理許婚にされたからずっと泣き暮らしたの。前みたいに街にも出れないし、私にも会えない。

でも、あの時、自分の子を王として認めてくれたラファエ様に感謝していたわ。そして子供がうまれるまで、二人は仲良く宮殿で暮らしたの。」

ルーはその頃の事を思い出した。

議員達はラファエ様の子ではない事を確信していた。子が出来るはずがない。

実は議員達が子供のときラファエに子が作れない体に改造していたのだ。議員達は、ラファエ様は体が弱く、子なぞ作ろうとすれば、それこそ死んでしまうと言っていた。議員達はいつでもラファエ様を気にかけてらした。

アビリルが静かに続けた。

「ロクサーヌの子が生まれたとき、私も呼ばれたの。お産で意識が朦朧としているロクサーヌを見舞ってやってほしいって。

そしてラファエ様と議員様が言い合ってる事を聞いてしまったわ。

「アンタの子ではない。」

議員様はそう、断言してた。驚いたわ。ラファエ様にあんな偉そうな口をきくなんて。

そしてラファエ様は静かに答えられたの。

「私の妻の子だ。あなた方には迷惑はかけぬ。」

ラファエ様はロクサーヌの恋人が誰か知ってたみたい。それでも自分の子として認めるなんてなんて優しいのかしら？

でも議員達は怒ったわ。「アンタは気が狂ってる。その子供には忌まわしい印がついているではないか。ルーよ。そのガキを殺せ。」

ラファエよ。お前も天界の王には相応しくないのは明らかだ。見ておれ。今に追い出してやる」

そして話を漏れ聞いた私を宮殿から追い出したわ。記憶を奪って。」

ルーは忘れもしない、子を殺せと命令されたあの日を思い出していた。

その子の腕にはプリュキトスの印がついていた。古代からの言い伝え、プリュキトスの怒りは腐れ神を呼び出す。私もその子が天界の脅威になると感じた。そして疑いもせず、その子を抱き、殺しも出せず、悪魔界をさまよった。そして結局虚無の狭間に向かったのだ。自分で殺す勇氣もなく、あんな恐ろしい穴に落とそうとしていた自分が今さらながらはずかしかった。

しかし、ラファエ様の魂が私の元に訪れた。

虚無の狭間のまさに落とそうとした瞬間だった。

「その子を私に渡してくれ。自分で始末をつける。一緒に狭間に連れて行く。」

正直、ほつとした。自分の手を煩わさないですんだから。

しかし、今、思えばラファエ様は子を殺さなかったのだな。

次期天界の王を守るためラファエ様は守り神として指輪に入られたのだ。決して腐れ神を甦らさぬよう、ヴィゴが怒りに自分を見失わないよう。

ラファエ様は今までヴィゴを守ってこられた。

いままで腐れ神が蘇らなかったのはひとえにラファエ様のおかげと言ってもいいだろう。

しかし指輪が存在するのは議員達にとって脅威だ。自分たちが追放したラファエがこの世に存在するというコト。それは未だに天界の王であり続けているというコトを意味する。

ルーはあわてた。

「議員達は指輪を破壊するだろう。指輪を破壊すれば、ヴィゴの身が危ない。腐れ神はもう邪魔するものがなくなるのだから・・・。」
ルーはそういうと、悪魔界から連れてこられた子供を思い出した。
・・・祭典なぞ、真っ赤な嘘。あの子を指輪破壊の生け贄に使うつもりだ。

魔王はお気に入りのソファで頭を抱えた。

天界は責めるだろう。プリユキトスを見つけれない私を。わかるわけがない。あの目撃者の裁判官はなぜか記憶を失い、手がかりとなる似顔絵はヘタクソで切り株のお化けかと思っただけだ。バイヤーの奴等に聞いてものりくらりとかわしやがる。「ヴィゴ商店？ヴィゴ？確か・・・そう。切り株みたいな顔だよ」とか抜かしやがる。ワシの人望のなさを笑ってるのだろう。

それにしてもおかしい事が続く。悪魔界で癒しの魔法が使われる。

よほどの高レベルの神がまぎれこんでるのだろう。

それに口キが悪魔界に戻ってきた。人間飼われ身分のアイツがなぜ、

悪魔界にいる？

（オレは喰らうメイトの裁判で来たのだ。早く帰って欲しければさっさと逃げた人間を探し裁判をすることだな。）

本来なら悪魔界での催し物として最高のものなんだが。喰らうナイトを雇い、戦わせるあの見もの。しかし今回はごくつまらん。人間のくだらないガキをめぐって喰らうメイトなぞ。

飼い主は（ロキのことなら何でも教えますから）と言っていた。

ソイツには操れるように長虫を挿入しておいた。

何かの役には立つだろう。

だが、魔王の挿入した長虫はヴィゴによって取り出され街をさまよっていた。

美紀が悪魔界に来ている。そうロバートに聞き、心が乱れていたロキがソイツを見つけた。

「・・・山下に入ってた長虫か？」

ロキは話しかけた。

（うるさい。私はいそがしいのだ）

「山下を喰い終わるには早すぎるじゃねえか？」

（うるさい。お前の息子がぬきおったのだ。）

あの癒しの魔法は王でなければ使えないからな。あいつは腐れ神の飼い主であり、次期天界の王。事実上、善と悪の全てのものの飼い主となる。

大ニユースだ。神界と言えども手を出すことはできまい。もしくは神界ですら脅威となる男だ。）

オレの息子が？ヴィゴが天界の王に？

ロキは長虫をつかみあげた。

長虫は頭をもたげて抗議したが、ロキは考える暇もなく口のなかに放り込んだ。

長虫はロキの腹から飛び出ようともがいたが、ロキは腹を押さえ、おさめた。

「動くな。消化されたいか？」

長虫はおとなしくなった。

（消化してみる！魔王に連絡が行くぞ。我々ペットを殺されると魔王はどれだけ怒るかわかるだろう？怒りはヴィゴに向く。

私はココでお前のはらわたを食う。

消化も出来ず、お前は生きながらの地獄を味わうんだな。）

ロキは吐こうとしたが、長虫は笑い飛ばした

ロキははらわたを食われながらも、消化できず、呻いた。

（・・・情けない事になった。）

ロキはロクサーヌの言った事をおもいだした。

最後に無理やりロクサーヌに会いに言った時だ。

「このお腹の子、ラファエ様の跡継ぎになるの。ロキ、貴方には申し訳ないけど会わせることは出来ないわ。私達は二度と会えない。会わないほうがいいの。」

私はラファエ様の愛に応えないと。・・・私達、とても重い罪を負うことになったわね。」

ロキはロクサーヌに裏切られたと苦しんだ。

ヴィゴが天界の王。オレの子が。本当だったのか。

地面にはいつくばってるロキにベルセルクはつまずいた。そして軽く驚いた。

「おお、ロキ。探してたのだ。喰らうメイト裁判だ。簡単に済ませるから早く来い。お前バカか？地面に口づけなぞ。」

「いや、腹が痛むだけだ。・・・裁判と言うが、飼い主も居ず、どうやってするのだ？」

「てめえの飼い主には魔王様がちゃんと長虫を挿入してある。・・・のはずだが、いつまでたっても出廷しない。」

ロキの腹の長虫はのた打ち回り、ロキは腹をおさえた。

「喰われるヤツも見つけたのか？確か藤原とかなんとか・・・」

「すでに裁判所に確保している。雌のケルベロスといったところを捕

「まあ。」

「アイツ……。ドンくさい事を。じゃあ、ドラゴンは？」

「飼い主の女のガキを喰っちゃったらしく途方もない大きさになっている。」

「そいつはすでに確保している。」

「ロキは腹を抱え立ち上がった。」

「ベルセルクはロキを立ち上がらせ、鎖でしぼり馬に担ぎ上げ、裁判所へと連れて行った。」

「裁判所には藤原と巨大なケルベロス。花子。」

「首には真つ赤なりボンが結ばれていた。」

「あと、巨大なドラゴンが情けなそうな顔をして藤原にくっついていった。」

「ロキさん……。」「

「藤原が小声で話しかける。」

「山下が街に逃げ出しちゃって。僕追いかけたんです。そしたら、悪魔達にいじめられてる山下を見つけました。」

「僕が助けようとしたんだけど、悪魔達には到底かなわないし……。そうこうしてると、白いマントを着た3人の人たちが山下を助けたんです。」

「ドラゴンに甘えられながら藤原は困った顔で話した。」

「白い人？天界人だな。」ロキは小声でつぶやいた。

「天界人？僕も一度は白い人たちに、声をかけられたのですが（コイツは使えない。半悪魔だ）って。」

「その事はベルセルクたちに話したのか？」

「いいえ、ロキさんに言わなければと思って。」その時、空が揺れる大地震が起こった。

「天界で何かが起こったのだ。」

「裁判所の天井がくずれはじめ、皆あわてて外に飛び出す。」

「ロキは藤原を抱え上げ、裁判所の外に飛び出した。」

「指輪を破壊しようとしたのだらう。何かが起きたんだ。そのドラ

ゴンはオレが借りる。オレは空からヴィゴを探す。

お前はケルベロスに乗ってヴィゴを探せ。ソイツのの嗅覚は頼りになる。

癒しの魔法をつかうなと伝える。面倒な事になる。」

藤原はメイドッグカフェから、付きまとはなれないケルベロス、花子に乗り教会を目指した。

魔王の浮遊城では地震が感じられず、相変わらずのん気に浮遊していた。

ベルセルクがあわてて駆けつけ仮面の下で何かもごもご報告した。

魔王が邪魔くさそうに手で合図し、仮面をとらせると、ベルセルクは一息つき、声高々にさげんだ。

「天界に、ハップニング！」

魔王は巨大な双眼鏡を取り出し、ベルセルクに手伝わせながら天界の様子をのぞいた。

天界は大騒ぎだった。

ラファエの魂が塔から天界に溢れ出た。塔からは人々があわてて飛び出す。

「なんなんだ？」魔王がつぶやいた。

静香は突然天界を襲った衝撃に耳を塞いだ。

「マズイ。ラファエ様が記憶を取り戻し、それが天界に溢れ出てきている。」

生け贄と共鳴したのだ。あの子供、どんな記憶を持っていたのだ？とにかく今は逃げなければ。」

ルーは静香をつれ、塔を駆け下りた。

塔を飛び出し、アビリルとヴィゴがデートコースに使っていた廃墟の教会に向かう。

海は荒れ、大波が次々と迫ってきていた。

「このままだと、巨大な津波が来るだろう。
ここから悪魔界に行こう。通路があるのだ。」
ルーは教会の飛び込み、パイプオルガンを叩き壊し、秘密の通路にとび込んだ。

その夜、壊れてしまっているパイプオルガンがごそごそ、がさごそと妙な音を立て始めた。

ヴィゴはその上の祭壇で寝ていたので（なんの音だよ、まったく！いい夢見てたのに！）と不機嫌に起き上がった。

その音は地下まで響いているみたいで可奈子と美紀も様子を見に来た。

「・・・ヴィゴ、うるさいよ。」

「オレじゃないよ」

パイプオルガンが好き勝手に鳴り始め、途端に沈み始めた。

「一体何事！！」

どーんと大きな音がし、人間がなだれ込んだ。

「ナンだよ。誰？」ヴィゴがおそろおそろ携帯をかざし様子をうかがった。

可奈子がおそろおそろ近づいた。

「なに？お化け？」

（すっごい生きてるから）静香は不機嫌に心の中でつぶやいたが、この世界の空気が忌まわしく慣れるまで口すら聞けない感じだった。（すっごい眩しいんだけど。）

しゃがみこんで顔を背ける静香にヴィゴはますます携帯を静香に近づけた。

「・・・すっごい静香に似てるんだけど。」

「見間違いじゃない？だってすごいキレイなヒトなんでしょ」可奈子が偉そうに言った。

どっちにしても女には可奈子は容赦なかった。
美紀も静香を覗き込み、

「ヴィゴの彼女のわけないわ。こんなキレイな人。ヴィゴにはもつたない。」

と言った。

ヴィゴは美紀に喰ってかかった。

「あのさあ、美紀ってさあ、オレのコト褒めないよね。」

オレ褒められると伸びるタイプだし。ホントあんたの子じゃなくて良かったよ」

「私もヴィゴなんて産まないわ。産むなら可愛い女の子希望よ。」

と美紀は笑いながらつぶやいた。

「ヴィゴは残念ながら女の子には見えないね」可奈子も笑いながら言った。

「とにかくこの人たち、朝までココに置いておこう。お化けかもしれないしね」

と可奈子は結論づけた。

「さあ、美紀。寝にいくよ」

「オレを置いてくのかよ。最悪だな。」

ヴィゴはそうつぶやき、座り込んでいる二人を見た。

「ああ、わかんね、寝よ」

「・・・。なんで」

再び祭壇で眠ろうとした男に腹立たしげに静香は声を発した。

自分たちのねぐらに訳のわからないモンが飛び込んできたのにわからないから寝る？

危機管理最低レベル。

ルーはやっと声が出せるようになり、ヴィゴに話しかけた。

「・・・男を捜している。ロキの息子だ。ラファエ様を抑えるには彼しかない。」

「・・・は？・・・知らね・・・。なんだよ、お前ら。」

ヴィゴは嘘をついた。

「ナンだよ、ジロジロ見んな」

ヴィゴはルーにどなった。

「おい、可奈子、美紀！オレを助ける！」

ヴィゴは階下に声をかけ、ルーたちの方を向いた。

「どこから来たんだ？」

「天界だ。」ルーは静香をヴィゴの目から見えないよう隠した。

「パイプオルガン同士が繋がってるんだ。」

「オレのパイプオルガンが天界に聞こえてたのか？すっげえ恥ずかしいんだけど！」

オレのラフマは泣けるだろ？」

静香は思わず大笑いした。

ヴィゴはキレイな女の人に受けたのが嬉しく、ルーの背後を覗き込んだ。

「オレ、面白かった？アレ、やっぱ静香？」

静香はキョトンとした顔をした。

「静香じゃん？マジで？マジで？」

そういいながらヴィゴが静香を抱きしめようとし、静香はヴィゴの頬を思いっきり殴った。

「？静香だよな？なんで？オレのこと忘れたってのか？」

静香はルーの後ろに隠れ、「貴方なんて知らない。」と言った。

ヴィゴは祭壇にへたり込んだ。

ルーは「彼女を知ってるというのか？・・・彼女はアビリルだ。」と告げた。

「貴方・・・もしや？そういえばアビリルの記憶の男に似ている。

その目の色・・・。」

「・・・アビリル？」ヴィゴはルーを思いっきり無視し静香に話しかけた。

「オレとアンタ、結婚する約束までしたんだけど、覚えてねえの？いつも、ヤタガラス飛脚便でプレゼント送ってたじゃん、着払いで悪かったけどさ。」

静香は覚えてない、と首を振り、ルーはヴィゴにつめよった。

「指輪を持っていたことは？父親の名は？」

ヴィゴは「知らない知らない!!」と教会の端にふてくされて座った。

美紀が心配して声をかけてきた。

「ヴィゴ、なにがあつたか知らないけど、私もおかしなこと言われたんだ。」

あのルーって人に、ロクサーヌ!!って呼ばれて。」

「六さん?なんで美紀が六さんなんだよ。時代劇か?」

「・・・ロクサーヌよ。」

「他人の空似チャンだ。気にすんな。しかし、オレ達のねぐら、とられちまうな。」

可奈子がルーと言い合いを始めた。

可奈子に美紀のことを聞き出そうとし、可奈子が「本人に聞けば?」と冷たく返答したのが気にさわったのだ。

「貴様、子供のクセにその口の聞き方はなんだ!そこに座れ。」

「助けてよ、ヴィゴ。この人、急に飛び出してきたくせに根掘り葉掘り聞くんだもん。」

朝になったというのに空が真っ黒になり、気温がどんどん下がってきた。天界の太陽が霧におおわれてしまったからだ。

改造人間の美紀はなんともないみたいだが、可奈子は震えヴィゴに寄りかかっている。

「なんだか寒いな、ケド火をおこす薪がねえんだ。」

ヴィゴはブツブツ言いながら教会の中をうろついた。

「このイス使うぞ」そっくりいながら座ってたルーを手で払いのけると、手でバキバキと割り始める。

しまいには祭壇まで壊そうとしはじめ、ルーが立ち上がった。

・・・ケンカでもする気かしら?静香が息をのんで見守っていると驚いたことに、ルー自身が祭壇を壊しはじめた。

「・・・今は暖の確保が大事だ。神もわかってくださる」そして祈りを捧げた。

ヴィゴはしばらく呆然とルーを眺めていたが

「おう！」と手伝いはじめた。

こうして大量の薪が出来上がり、ヴィゴは満足気にながめた。

ヴィゴはかつて中庭だったところに薪を積み上げ、火をつけた。

「こうしてみると、キャンプファイヤーってやつを思い出すな。静香……」

って覚えてないんだよな。」

涼子や哲平、他の生徒たちも交えて海辺でバーベキュー大会をしたことを思い出したのだ。

「そういえば、妹も誘ったけど、来なかったって涼子が言ってたな。なんで来なかった？楽しかったのに。」可奈子は肩をすくめた。

「だって彼氏連れて来いって言うんだもん。」

「藤原でよかったじゃねえか？」ヴィゴが冷やかした。可奈子は赤くなつた。

「……うるさい、プルルン金玉」

ヴィゴは大げさにため息をついた。

ルーは美紀に必死で天界の話をし、思い出してもらおうと躍起になった。

記憶呼び戻しの呪文をかけてもなんともないらしい。改造されているからだ。

可奈子が茶々を入れている横でヴィゴは静香を見つめていた。

「あのさ……。ホントに覚えてないの？」

そのヘアスタイルは静香だよ。

長い髪をばっさり切ってさ。オレ、怒ったじゃん。じゃあ、なんでアンタに怒られなきゃいけないのっていわれてさ。

その言葉がショックでサ。オレ、寝込んだじゃん。」

静香は、そういえば、と髪を撫でた。

以前は腰までの長い髪だったのが、今は肩にあたるくらいの長さ。しかも少し茶色。

「静香にしてみれば自分の髪切っただけなのに。悪かったよ。でもオレ、気づいたんだよ、そんな時にさ。彼女に似てるから静香を好きなのか？って。アビリルが死んでしまつてオレの心にポツカリ空いた穴。」

静香と会えた日。・・・ここに未来があるって思った。

オレ、やり直せるかもしれないって。」

ヴィゴは鼻をすすった。

静香はヴィゴを不思議そうに見つめながら聞いている。

「・・・実際はアンタには恋人がいて、オレなんて相手にしてもらえてなかったけどさ。」

事故の直前に電話くれてたのに・・・。

アビリルのころの記憶が戻ったこと、オレに知らせようとして電話くれたんだろう？

婚約指輪、大事に持つてくれてたんだな。

アンタは絶対静香なんだって。

オレがそういうんだ。間違いないよ。」

静香はヴィゴの視線が耐え切れず下を向いた。

・・・私、静香っていう名前なの？

「私・・・わかんない。ごめんなさい」

ヴィゴは「あやまることないよ」といい、静香にやさしく微笑んだ。ルーは美紀に必死に話しかけ、美紀は泣き出しそうに可奈子に助けを求めている。

「ルー、あれ、何言つてんの？六さんがどうとかさ。」

ヴィゴはアゴでルーたちをさした。

「ルーの妹のロクサーヌによく似てるのよ。」

私も似てることには驚いたけど。

大親友だったの。子供産んで、それっきり会えなくなっちゃったの。」

「それじゃあ、美紀じゃないよ、子供なんて産める年じゃない。」
ヴィゴは解決つとばかりにルーのところに行き手を大きく振り返し

た。

「美紀は産めねえよ。赤飯段階だ。」

突然、外を眺めていた可奈子が叫んだ。

「化けものがこちらに走ってくる！！」

第十話

突然、外を眺めていた可奈子が叫んだ。

「化けものがこちらに走ってくる!!」

ソイツは教会の前でヒラリッと止まり、その上に藤原が死ぬ思いでぶら下がっていた。

可奈子の言う白い化けモンとはケルベロスの雌、「花子」だった。

藤原は力尽き、花子から滑り落ちた。

「藤原!!」

花子が彼女なりに心配そうに恐ろしい尻尾を震わせてる。

ソレはシャーシャーと音を立て、みんなをびびらせた。

「ああ、可奈子、美紀もいるんだ。良かった、無事で。ああ、ヴィゴさん。」

ふんどしの件はすみませんでしたって・・・ロバートが・・・言うてました」

そこまでいうと、藤原は気を失った。

「あれはロバートってヤツのふんどしだったのか？最悪だな。」

藤原は地下のベッドをあてがわれしばらく休む事にした。

可奈子は上機嫌で何回も地下を覗きに行った。

花子は本当に大きかった。

二抱えほどある太い首に真っ赤なりボンが結ばれてる。

可奈子が階段を駆け上がった。

「水が欲しいって。井戸の水は、飲めるのかな？」

静香は可奈子と一緒に井戸を見に行った。

バケツの代わりに情けなそうな顔をした頭蓋骨が使われている。

「ヴィゴに飲ませてみてもいいな。毒見よ。毒見。」可奈子はそう

いうと、井戸の水を汲んだ。

「ヴィゴ、咽喉渴いてるんなら水あげようか？」「・・・ああ、ありがとう」

まだ、中庭にいた静香は可奈子を止めにくいこうと走り出した

「ヴィゴさん！飲まないで」

ヴィゴは躊躇なく頭蓋骨からぐびぐび飲み乾した。

「なんか、シヨンベン臭い味がする。可奈子のか？」

「違うよ、臭いなら、藤原には飲ませられないわ。水が欲しいんだけど。」

可奈子が心配そうにつぶやいた。

「そうか、藤原が飲みたいなら、ヴィゴ様が一肌脱いでやろう。

おい、可奈子、火を起こせ。水を煮沸してだな、この桶にためてだな。」

静香はため息をつき、美紀がいるベンチに座った。

「私、人間界では友達なんていなかったから、あの二人見てると楽しいの。」

お兄ちゃんも・・・。始めは優しくかったのに、突然人が変わっちゃって。」

「つらかったのね。」静香は美紀の肩を抱き寄せた。

美紀の肩は改造されていてとても冷たかった。

（天界では1・2を争う美しさを持っていたロクサー又が・・・。改造人間になってしまっなんて。）

「ロキに会いに来たの。」

私を喰わずに逃がしてくれた。

あのときのロキの目。忘れられない。

ロキはね、本当は私が飼う予定だったのよ。

誕生日の日にベッドにタマゴがもぐりこんで。」

「タマゴがベッドに？ロキのタマゴなんて人間界ではものすごく高いはずよ。」

誰が置いたのかしら・・・。

あなたにロキを育てさせようとしたって言う事？」

「知らない。でも私恐竜の卵だと思ったの。」

お兄ちゃんに見せてあげた。

その瞬間からお兄ちゃん人は人が変わったようになっちゃった。」

（悪魔のタマゴを前にすれば、その人の最悪の感情が表に出てきてしまう。）

この子のお兄さんはもともと少し乱暴な子だったのね。）

このとき、ヴィゴは笑顔で頭蓋骨をさしだした。

「咽喉渴いてない？」

二人は猛烈に首を振った。

「そうか・・・。花子！！水飲むか？」

花子がヴィゴに甘えてきて、ヴィゴの手から水を飲み始めた。

「ヴィゴ！！藤原が呼んでる、大事な事を伝えたいんだって。」

ヴィゴが藤原の下に行くと、藤原は弱った体を起こしながら言った。

「まだ、きつそうだな。オレ様が治してやろう」ヴィゴは軽く藤原に手をあて、目をつぶる。藤原の表情が和らいだ。

「なんだか、体が楽になりました・・・。って！うわっ、ヴィゴさん、やめて下さい！」

「ナンだよ、回復してやったのに。」

「すみません、いい忘れた大事な話が。」

ロキさんが、ヴィゴさんに、癒しの魔法使っなって。悪魔界で使っなって」

（マジ？使っちまった。とヴィゴはつぶやいた。）

「美紀さん、山下が街で悪魔達にいじめられてたのを白い人たちに助けられてました。」

ロキがいうには天界人だそうです。そのまま連れて行かれたみたいなんです、ボク、追いかけようと思ったたらベルセルクにつかまっ

てしまつて。裁判の呼び出しがかつたんです。山下も一人で悪魔界にいるより、天界の方がマシですケドね。」

美紀が息をのむ。

「天界に？お兄ちゃんが天界にいるなら、私行くわ。」美紀が言つた。

「一人で行かせるわけにはいかないよ。私たちもそこにいく。ねえ、藤原。」

可奈子が力強く言つた。

「私、とにかくルーさんたちにも知らせてくるよ。天界人だから一緒に رفتてくれるかも。もしかしてお兄ちゃんのこと、なにか知つてるかも。」美紀が駆け上がつていく。

ルーは美紀から事情を聞くと地下に怒鳴り込んできた。

「天界に行く？今は危険なんだぞ。」

「美紀の兄貴がいるんだよ。危険だったらなおさら助けにいかねえと。なあ、美紀。オレも行くよ」

ヴィゴは言つた。

ルーが声を震わせる。

「兄が天界にいるのか？」

まさか、あの少年？

「なんか、知つてるの？お兄さん？」

可奈子が言つ。

「いや……。ルーはごまかした。」

静香は藤原たちについて行こうとしたが、ルーは止めた。

「アビリルは私とココと一緒にいてくれ。」

「……。ナンだよ、お前らイチヤイチヤするな！二人にさせるものか！」ヴィゴが不機嫌そうにつぶやいた。

「ルー。お前、天使なんだろ？女に手、出すんじゃネエよ。」ヴィゴとルーが睨みあつてると藤原達は待つてられないとでもいうように、

そそくさと通路に入っていった。

「待てよ。ガキ3人で危ないって。オレも行くから。」

3人を追いかけようとするヴィゴをルーは振り返らせた。

「・・・なんだよ。」

「ヴィゴ殿。」

ラファエ様は生け贄の失敗により天界にとって脅威の者となつてしまった。

「・・・脅威の者？ナンだそりゃ。」

ヴィゴはポカンとした。

「・・・アンタの持っていた指輪に天界の王、ラファエ様が入っていたのだ。知らなかったのか？長年持つてて？なんと鈍感なヤツだ。」

「そんなの知らねえよ。指輪の子？ああグリフのことか？アイツはそつとしておいてやらなきゃダメなんだ。アンタ、いじめたのか！オレの友達なのに？」

「指輪はラファエ様なのだぞ。グリフなぞ、勝手に名づけるんじゃない！」

ヴィゴは、それが？という顔をした。

「グリフはオレの友達だ。それより天界はどうなる？」

「ラファエ様が記憶を取り戻し、それは天界に溢れ出てきている。

ラファエ様が事実上まだ、天界の王なのだ。神界は怒りに狂つて王なぞ見捨てるだろう。天界は虚無になる。」

「神界が見捨てる？なんだよ、それ。」

「神界は我々天界のそのまた上におられる神の世界だ。そこから幾人か神が天界に出張してこられる。」

まあ、出張してくる神も修行という形で来られるのだが。」

「そんなこと、どうでもいいよ。」

それより天界が虚無になるんなら、可奈子達どうなるんだよ！連れ

戻さなきゃ。」

ヴィゴがパイプオルガンの通路に駆け寄るとどーんと、教会が揺れた。

パイプオルガンの道が崩れ落ちた。

「・・・最悪だ。あんた、人殺しだよ。」ヴィゴがルーにつかみかかった。

静香があわてて引き離す。

「時間はたっぷりあるわ。天界の入り口はココだけじゃない。あきらめないで。」

ヴィゴは静香になだめられ、教会のイスに乱暴に座った。

「虚無って裁判所の橋から落ちたやつが行くところだろう？永遠に落ち続けるっていう。」

「そこは虚無の狭間だ。虚無の国とはまた違う。狭間には底がない。本来の虚無の国は天界の処刑場とつながっている」

静香が心配そうに二人を見つめていたが、

「・・・なんか焦げ臭くない？」とつぶやいた。

にらみ合ってた二人は窓に駆け寄る。

ベルセルクたちは巨大な刀を抜き、ドラゴン達は教会の周りに火をつけていた。

「・・・戦わねば。」ルーが言う。

「なんでそんな結論なんだ？あの化けもんと戦えってのか？イヤだね。」

ヴィゴが窓を覗き、声を荒げた。

「なんなんだ？あのどてかい刀。サーフボードくらいあるぞ」

ルーは静香を抱き寄せ、静香は外を見守る。

その様子を腹立たしげにヴィゴは見ていたが、ルーが止める間もなく、ふいに外に飛び出した。

「待て待てったら。」ヴィゴは叫んだ。

ベルセルクはヴィゴの姿を見た途端、刀を下ろし、ドラゴンは自分

たちのつけた火を必死で消した。

「貴様、プリキトスか？ やつと見つけた。右腕に入れ墨を持つ男よ。魔王様より話がある。」

「オレの居場所を教えたのはモルボイなのか？ 無事なのか？」

「殺しはしない。動けなくしたただけだ。」

「・・・改造人間の部品は高く売れるんだ。道端で動けなくなったら、それこそ悪魔ドモが群がり、部品を剥ぎ取る。

死ぬ事も叶わず、助けも呼べない。殺すよりひでえじゃねえか！」

すると後ろにいたルーがつぶやいた。

「改造人間なぞ、滅びてしまえばいい。神から与えられた命を口ポツトにすり替えた罪深い奴等」 ヴィゴは振り返り、ルーにつかみかかった。

「お前！ 美紀も同じ目に合せれるのか？」

美紀は六さんなんだろう？」

「今は違う。ロクサー又なぞではない。前世がロクサー又だったただけだ。」

「じゃあ、その静香はどうなんだ？ 前世がアビリルで、アビリルの時の記憶がもどり、静香の記憶がなくなっちまっても？ そこにいるアビリルさえ生きてれば静香としての記憶はなくなってもいいのかよ。静香を返せ！」

「私は何もしてない」 自分が記憶を消した事を棚にあげ、ルーはつぶやく。

二人が言い争い、ヴィゴが完全にベルセルクに尻を向けた。

ベルセルクは「無視するんじゃないやねえええ！」

と叫んだ。

「魔王様が来る。敬礼！」

上を見上げると魔王の浮遊城が近づいてくる。

フィーンと降りてきた階段に劇的なポーズで降りてくる男。ヴィゴたちは息を飲む。

アイ アム 魔王。

超ゴージャスなマントをはおり、見えている肌は真っ黒く、時々練炭が燃えるように赤く光る。

「・・・ロキの息子だったのだな・・・モルボイに聞いた。・・・いい男じゃないか。」

魔王は巨大な体を華麗にくねらせながら挨拶した。

ヴィゴは体を固くし、魔王の視線から目をそらせた。

「貴様、天界人か?・・・反吐がでるわ。」魔王はルーをにらみつけた。

「魔王よ、議員の言いなりになり次はヴィゴを突き出すつもりか?」ルーはバカにしたように言う。

魔王は怒りに体を膨らませた。

あたり一面、マグマがあふれ出す。

ベルセルクたちは飲み込まそうになり、あわてて近くのドラゴンに乗り、回避した。

「ああ、うるさい!何も突き出すとは言っていない。コイツ街の合体センターに売りつける。ヴィゴ殿だったな?私の城を案内しましゅうぞ」

「・・・いや、コイツも一緒に。一応・・・仲間だから。」ヴィゴはつぶやいた。

ヴィゴたちは城に連れ込まれた。

「ヴィゴ殿、こちらへ」悪魔界を見渡せるゴージャスな部屋に案内されヴィゴはキョロキョロした。

「どうぞお気楽に。」魔王は着ていたマントを脱いできた。

驚くことに黒い肌に見えてたのはよろいで、肌の色は白く、病弱な男という印象を受けた。

ソファアに座り込んで、ベルセルクが出してくれた紅茶をすすっていたヴィゴが、妙に近づいてきた魔王に警戒した。

「・・・オレ、言つとくけどアッチの趣味はないから。」

「・・・貴方の腕のしるしがみたいのだ。」

ヴィゴは、ああ、とした顔をし腕を捲り上げて見せた。

「コレだ。蛇が絡みあってる？お互いを喰いあってる？みたいな。シブイだろ？」

「どうだろう？腐れ神の飼い主よ。力を私にくれ。そして天界を我々の手に治めよう！」魔王は一人でもりあがった。

ヴィゴは、は？という顔をし、

「アンタの世界はココだろう？悪魔界で満足しろよ」

「天界のやつらが何かと口出ししてくる。」

私は所詮、この世で最初の汚物から生まれたもの。バカにしているのだ。」魔王は腹立たしげに言った。

「汚物？プリキュトスよりマシだよ。そんな事いうやつは無視だ、無視。」

「天界を無視なぞできるか。」魔王がつぶやいた。機嫌悪く、悪魔界を見下ろす。

「パワーが欲しい。悪魔達は私をバカにしている。」

「悪魔達にアンタが嫌われてるのはアンタが悪いんだよ。」

モルボイが言ってた。この間も改造人間狩りがあつたって。

なんでそんな事するんだ？

別に悪さするわけじゃないんだろ？改造人間狩りがあれば、ヴィゴ商店の売上も落ちるんだ。カンベンだよ。あんたら、まちがって人間も殺すじゃん。血のレートもむちゃくちゃになるし。そうだ！マジでさ、アンタ、天界よりイケテる世界作ってみるよ。神界つてやつではucci認められればいいじゃん。」

ヴィゴが魔王に提案した。

魔王は「・・・簡単に言うな、殺されたいか？」といい、ヴィゴを黙らせた。

天界よりイケテる世界を作れ？

同じような事を大昔、ロキにも言われた。

「お前は魔王なんだぞ。」

悪魔界のリーダーなんだ、しっかりしろ。

天界はお前が思ってるほど立派なモンじゃあない。神界は、天界も人間界も悪魔界も平等に見ている。生まれなんて関係ない。与えられた境遇で、どう生き抜くかだ。」

・・・ロキの言うとおりなのか？

私は天界を意識しすぎるだけなのか？

改造人間なぞ、どうでもよい、勝手に生き延びるがよい。

そう思ってる私をのしり、改造人間撲滅運動のキャラクターにまでされてしまった。

確かに血のレートが狂う。血持ち悪魔達は私をうらむのもそのせいだろう。

魔王は街のパトロールのベルセルクを引き上げるよう命令を出した。天界の様子がおかしい。そちらの警備につけ。

街には即座に命令が伝わった。

ベルセルクたちは今、まさに人間コロニーを襲うところだったが命令を聞くといちもくさんに浮遊域に帰りはじめた。

街は大喜びだった。

ロバート達も胸をなでおろした。今、まさにロバート達の隠れ家にベルセルクが入ろうとし、小型爆弾を投げつけるところだったのだから。

ひっそびさに悪魔界に声が響いた。

「魔王万歳。」

静香は牢屋の隅に縮こまっていたが、魔王に近づかれおびえていたルーが前に立ちはだかるが、ベルセルクが払いのける。

「この女は高く売れるだろう。」

魔王は静香の顔を持ち上げ、よく見た。

「それともヴィゴの慰みモノに置いておこうか？連れて行け」

「これからどうするつもりだ」ルーが聞いた。

「ふん。腐れ天界を頂く。」魔王は今までとうって変わった恐ろしい調子でつぶやいた。

藤原達が天界を目指して歩いていたパイプオルガンの通路は音をたてて崩れ始めた。

「急ごう！閉じ込められる！」

藤原達は花子にとびのり、おいそぎで天界を目指した。

天界は一面海で藤原達を驚かせた。

波が高く家を襲い、たらいやら、歯ブラシやらいろんなものがぶかぶか浮いていた。

空は悪魔界より陰気な雰囲気漂っている。

街を取り巻く黒いモンヤリした霧のせいで、街全体の色がなくなり、グレー一色と化していた。

「・・・なんでだろう、懐かしい気がする。」

海を眺めながら美紀がつぶやいた。

天使達は藤原達がバシャバシャと水を蹴りながら歩いていくのをぼんやりと眺め、咎めもしない。

悪魔と、半悪魔の藤原が歩いてるっていうのに。

しばらく歩きつづけると街の中央に白い巨大な塔が聳え立っているのが見えた。

「なんか、病院みたい」可奈子がつぶやく。

どうやらその塔から黒い霧のようなモノがあふれ、天界を暗くしているようだった。

入り口はきつちりと閉ざされていたが、見張りがいなかったため、藤原達は遠慮なく入る事にした。

美紀が「お兄ちゃんがココにいる気がする」と言ったからだ。

花子は塔に入るのをいやがり、外で待つ、と言って聞かなかった。花子を外に待たせ、塔に入り込む。

塔の中はひっそりと静まり返っていた。

透明なエレベーターに可奈子は興奮し、3人は乗り込む。

エレベーターは勝手に止まり、3人は外に出た。

美しい装飾が施されたドアが半開きになっていた。覗き込むとどうやら礼拝を行う場所のようだった。

しかも特別室のようなカンジ。

「なんだか王様とかがお祈りする場所みたい」

美紀がヴィゴ商店の十字架をかがげ、祈りを捧げた。

礼拝堂の奥に別の通路があった。

「なんだろう？　いつてみようよ。」可奈子がヒョイと覗き込んだ。

そこは礼拝堂には似つかわしくない怪しい雰囲気の一部屋だった。

「ふうん、礼拝堂っていった事なかったけど、台所もあるんだ。

まな板にしちやデカイね。」可奈子が真剣につぶやく。

美紀がまな板？という顔をして可奈子の後ろから覗き込んだ。

可奈子がまな板と呼んだ美しい祭壇は、血にまみれていた。

その部屋の奥に何人かのモノが蠢いているのを藤原は太郎の耳で感じ取った。

（誰かいる。見つからないように）藤原はつぶやく。

（何してるんだろう？）可奈子がつぶやく。

美紀があたりを見回すと、小さなはしごがかかっており、天井部屋にあがれるようだった。

（あそこに登って見てみようよ。）

二人は頷き、はしごをのぼる。

天井部屋はホコリっぽく、藤原達は咳をこらえながら進む。

下をのぞくと、3人の白いマントですっぽり体をおおった奴等が祭壇の周りでなにやら祈っていた。祭壇の上にはなにやら蠢くものがあり、白い布がかけられている。

（気持ち悪い、オカルト集団みたい）可奈子は鼻にしわをよせ、つぶやいた。

ソイツラが祭壇の周りに火を焚き始め、

「ああ、なんとということだ。ラファエが蘇ってしまった。」とつぶやいた。

「このガキ、ラファエと何か共通の記憶でも持っていたのだろうか？」

「ありえん、こんなガキは早く燃やしまおう。そして一刻も早く、アイツを探し腐れ神を利用してラファエの溢れた記憶を吸い込ませるのだ。」

ソイツラは布をはぎとった。

なんと祭壇の上に山下が寝転んでいたのだ。

（お兄ちゃん！！）美紀が叫びそうになり、可奈子と藤原が揃って口をおおう。

山下の出血は酷かった。しかし、そのモノたちは山下にかまうことなく自分たちの祈りを続けている。

何度か、炎が上がり、炎の中に恐ろしい顔が浮かんだ。

「おお、魔王。待っておった。指輪を破壊しようとしたら、ラファエの記憶が天界にあふれだした。あいつは未だに天界の王だったのだ。」

神界め、他に王の予定がなければラファエの次にお前らが王になれば、
と言いおったくせに。」

ソイツラが炎に駆け寄る。

炎の魔王はブスブスくすぶった。

「なんだと？魔王よ。」

腐れ神の飼い主を確保したのか？でかした。少しは役に立つのだな。
何をしている。早くここに連れて来い！！

ソイツの腐れ神でラファエを飲み込ませよう。」

議員達は炎に向かって話しかけ、炎はブスブスとくすぶり、消えた。

「迎えに来いだと？魔王め、態度をかえやがって！！悪魔界に見せしめの雷を落とそう。」そして3人はその場から立ち去った。

その隙に美紀ははしごを下り、祭壇に駆け寄って言った。

「お兄ちゃん！！」

山下はうつすらと目を開ける。

ドキッとしたようだった。

「・・・なんで？そうか。ここは天国だからか。美紀も天国に来れたんだ。」

「大丈夫？とにかく逃げなきゃ。可奈子さんも来てるわ」美紀が山下をおこそうとした。

「可奈子・・・お前も死んだのか？」

「失礼ね、死んでなんかない！」はしごを降りながら可奈子と言う。

「ヴィゴさんなら、血を止めれるのに。」藤原が天井部屋からひらりと飛び降り、残念そうにつぶやく。

美紀がとりあえず縛ったうでから、まだ、とめどなく血が流れていた。

「フン、藤原まで。ロキに喰われなかったのか？マズすぎるからか？」

藤原は軽く無視をし、山下をオンブした。

そのとき、美紀が小さく叫んだ。

議員の一人が戻ってきたのだ。

「ガキを燃やすのを忘れたと戻ってみたら、なんだ？お前ら？」

皆は駆け出したが、美紀と可奈子が捕まってしまった。

「なんと、ラファエの女にそっくりだ。

驚いた……。この女、使えるぞ。

残念ながら改造されてるが、人間と合体しておけば改造してることはラファエにはわかるまい。」

他の議員達も何事かと戻ってきた。

「この女を囿にラファエを呼び出そう。

そしてあてがっておけばよい。腐れ神の飼い主が現れるまでな。

そうだ。この人間女と合体させればよい」そういうと可奈子の手を引つつかんだ。

「離してよ！！ジジイ！！」可奈子は振りほどこうと必死にもがいた。

しかし、ジジイのクセにものすごい力を発揮し、ソイツは可奈子を抱えあげた。

「合体の準備をしろ」

藤原は山下を抱え物陰に隠れていたが、二人が合体させられそうになるのを見て、思わず飛び出した。

「……。ナンだ？お前は？一体何人いるんだ？」

「あのう……。えつとう……。」そして思わず口走った。

「……。プリユキトスです」

可奈子と美紀も驚いた。「ええっ？」

皆は啞然、と口を開いた。

「……。お前が？」

藤原は猛烈にうなずいた。

「魔王がココに来ていましたので。」

「……。証拠は？」と聞かれ、おもわず、山下の腕を捲り上げた。

「この傷を治したのは私です。」

議員達は「……。バカな。プリユキトスが癒しの魔法なぞ使えるわ

けない。

とにかく準備が出来るまで閉じ込めておこう」と言った。

「天界にもこんな汚いところがあるんだね」可奈子がのん気に牢屋の中を見回した。

床を這いずり回る虫に美紀は叫び声をあげ、可奈子が踏み潰していた。

「藤原がヴィゴに化けるのはそりや無理だよ。

ヴィゴはなんだかんだいってもかっこいいもん」

「・・・これからどうなるんだろう。」藤原が頭を抱える。

とにかく・・・逃げなくちゃ。

地響きが伝わってくる。

議員達が悪魔界に裁きの雷を落としているのだ。

悪魔界も大変だろう。ロバート達、ヴィゴさん達、元気にしてるかな・・・。無事だといいいけど。

山下の血は全然止まらず、気を失っていた。

美紀は幾度となく、巻いた包帯を縛りなおしていた。

「こんな時にヴィゴさんがいれば・・・。

とめる方法を知ってるかも知れないのに。」

可奈子もうん、そうね、と頷いた。

美紀が「こうするのかな？なんだかわかる気がする。」

そういつて自分の首に下げていたヴィゴ商店の十字架を掲げた。思いつくまま言葉をとなえる。

可奈子が「無理無理。無駄だっ！」

と突っ込むが、驚くべきことに山下の血は一瞬で止まったのだ。

「何何？美紀、なんでできるの？すごいじゃん！」可奈子が身をのりだす。

美紀が自分の手を呆然と見詰めていた。

「・・・ルーが言ってた。ロクサーヌにそっくりだって。さっきの議員達もいつてたよね？」

すると、山下が目を開け、美紀を見つめる。

「・・・。」山下は美紀を見つめ、苦しそうにため息をついた。

「お兄ちゃん！大丈夫？」

「アイツラが言ってた。母さんに会わせてあげるって。嘘だった。だって母さんは自殺したんだ。」

・・・天国に行けるわけないよ。

・・・そんな事わかった。

でも・・・もしかしてって思った。」

美紀は驚いた。

「・・・自殺した？」

・・・ごめん。私、何も知らなくて。

お兄ちゃんのお母さんは病気で死んだって聞いてたから。」

「人があんな真つ黒になるなんて思っても見なかった。

母さんは自殺したんだ。オヤジはそれを見て言った。

面倒な事しおってって。

そして知り合いの医者に死亡診断書を書かせ、マスコミにもばれないようにしたんだ。

おれはいつオヤジに復讐してやろうか、そればかり考えてた。

おれ、ロキを飼いはじめて、全ての物を手に入れらるって思った。

あんな化けモンがおれの言うコトなんでも聞くし。でも悔しかった。兄のおれよりロキと仲良くしてる美紀がうっとおしかったんだ。

美紀はおれには笑顔なんてみせてくれなかったくせに・・・。
だから喰わせた。

藤原が言ってた。おれが狂ってるって。

ホントだったかもしれない。」

「ココは天国じゃないよ。お兄ちゃん。」

天界。私、ロキに逃がしてもらったの。だから、まだ生きてる。」

「・・・生きてる?・・・良かった・・・。」

山下はつぶやいた。

二人を心配そうに見つめていた可奈子は元気よく言った。

「山下、私もう怒ってないよ。こうして藤原とも美紀とも冒険できただから。・・・山下ともね。そうだよな?藤原?」

藤原はウンウン、と頷いた。

「後はココから無事に逃げれば冒険終了なんだけど。」

「そうだ、花子を呼んでみようよ!」

可奈子が言った。

「玄関にいるはずだし。太郎くんテレパシーでサ。」

「なるほど。」

藤原は（太郎、助けてくれ。花子に連絡を取ってくれ）と願った。

突然、塔が揺れた。

誰かが、塔に体当たりしてるかのようにだった。

「そうだ、花子だよ!俺達も壁に体当たりしよう。塔は横にぶつたおれるし、俺達は地下。」

牢屋は地下って決まってるから。多分・・・そいであいつらが塔から落ちるだけだ。」

可奈子もそうだねつといい、花子の呼吸にあわせ、壁に体当たりする。

すると、合せる様にドーンと大きな音がした。

雷が直撃したかのような振動。

「何何?」

ほどなく、ぐらぐらつと音がし、塔がかしいだ。

マズイことに自分たちは地下でなく、最上階にいることに今さらな

がら気づいた。

「やばくない？」

塔は徐々に斜めになり、藤原達は牢屋の隙間から飛び出し、出来る限り階段を駆け下り、透明エレベーターを目指す。

美紀が突然叫んだ。

「待って！！この部屋に指輪があるはず。今、呼ばれたの。連れて行ってって」

美紀が礼拝堂に飛び込もうとするのを山下が止めた。

「おれが行ってとって来る。」

山下はそういうと、指輪をとりに行った。

そうしてる間も塔は傾き、美紀は早く！とエレベーターの扉を押さえ、せきたてている。

とうとう、塔は真つ二つにおれはじめ、ちょうど、半分のところに山下がいた。

「指輪、投げるぞ。藤原キャッチしろ！」

藤原は指輪を受け止め、

「山下！はやくこっちに飛び移れよ！！折れちゃうよ！！」

「・・・藤原。」

「いいから早く！！」

「おれ、お前なんてドン臭くて大嫌いだって思った。

脅かしてやるうと思って口キをけしかけたんだ。まさか喰らうメイトになるなんて。」

藤原が「いいからこっちに飛び移れよ！」

山下は驚いたことに落ちていく塔の方に体を移した。「何で？」

「・・・かあさんに会いに行くよ」

山下が雲の中に消えていくのが見えた。

「山下！……！」

「藤原！危ないよ！早くエレベーターに！」

3人は泣きながらエレベーターに乗り込んだ。

エレベーターはかるうじて動き、3人は街にとびだした。

海は荒れ、風がものすごかった。

「あいつらに見つかからないうちに、悪魔界に戻らなきゃ！」

しかし、教会への通路が崩れてしまってる事を思い出した。

「どうしよう……。とにかく、隠れないと。」

「ヴィゴが後から来てくれるはずだよ。そう、言ってたもん。」

可奈子が半べそで言う。

塔が崩れ落ち、ものすごい地響きが起こった。反動で大きな津波が襲ってくる。

「とにかく隠れるところを」藤原が必死で叫ぶ。

藤原が近くの建物に二人を押し込めた。

そこはヘブンハレブンだった。外には議員達がうろついている。

「あいつら、波に流されればいいのに！」

「おれが何とかするよ、花子を呼べばいい。」

藤原は必死に願った。

（花子お願いだ。助けてくれ……！）

可奈子が叫んだ。

「なんだよ！アイツ……！藤原！変なの呼ばないで！」

真っ黒のオオカミがのっそりと入ってきたのだ。

「うっわっ。」藤原がかまえる。

「それ以上近づくと、噛み付くぞ！」と太郎の牙を見せながら言っ

た。

しかしオオカミは馬鹿にしたように立ち止まり、耳の後ろを掻いた。そして口を開いた。

「ロクサーヌよ。」オオカミはつぶやいた。

「？何？」可奈子はわめく。

オオカミは美紀にとびつき、押し倒す。そして、目を覗き込んだ。そしてなにやらブツブツ呪文を唱えている。

美紀ははらはらと涙がこぼした。

「美紀！！大丈夫？」可奈子がオオカミにタツクルし、藤原が羽交い絞めにした。

「・・・ヴィゴ。私の大事な子。」

可奈子はのけぞる。

「立派に育ってくれて。」

この指輪。私の形見としてヴィゴに渡せたたった一つの宝物。

ラファエ様がこの指輪に宿り、ヴィゴを守ってくださっていたのね。

「

オオカミはウザッたるそうに藤原から逃れ、体をプルプルつとふるわせた。

「そうだ。ラファエはヴィゴの守り神だったのだ。」

しかし戻ってはいけない記憶が蘇った。山下を生け贄に使ってしまったからだ。

山下は美紀をロキに喰わせた。

それはラファエにロクサーヌの死刑を思い出させることになった。

そしてそれは決して思い出されてはならない事だった。

山下の悲しみ、孤独感がラファエと重なってしまったのだ。」

「・・・お兄ちゃん・・・。ラファエ様・・・。ごめんね。苦しま

せて・・・。」

「指輪はその辺においておけ。もう、抜け殻だ。お前たちには大事な仕事が残っている。」

人間界に帰り、ロキのタマゴを飼うんだな。

ただ・・・間に合うかどうか。」

「なんだって？俺がロキを飼うの？」藤原が叫ぶ。

「お前じゃない。お前はいつもあっちの役だ。」

オオカミはにんまり笑ったように見えた。

「早く行け。」

そういうとオオカミは地面に魔方陣を書き、3人を放り込んだ。3

人は巨大な渦に巻き込まれ、気がつくと人間界に戻っていた。

第十一話

ヴィゴは部屋の隅に縮こまつて静香を心配そうにみやった。

「慰み者にでもするんだな」と魔王にあてがわれた女が静香だったのだ。

「・・・何もしないから、心配すんなよ」

「・・・」

静香はヴィゴを怖かったわけではない、というのを知らせてくれない切つてヴィゴに近づいた。ヴィゴは淋しそうに窓から外を眺めている。

静香が近づいてきたのをみてヴィゴは淋しく微笑んだ。

「ラファエ様つて皆は言うけどオレにとったらグリフだ。友達なんだよ。

自分で自分が止めなくなつてるんだろう。怒りが制御できないんだ。」

「・・・オレなら止めれるのか？とにかく行つてやらなくちゃいけない。」

静香はヴィゴの肩に手を廻した。

ヴィゴは自分の手を静香の手に重ねた。

「オレは好きな女と一緒に暮らし、ささやかな家庭が作りたかっただけだ。

アビリルの時も叶わなかったし、静香の時も・・・。
そんなささやかな幸せさえ許されないのかな・・・。」

静香はたまらず、かがみこみキスをした。

ヴィゴの唇は、静香のキスを驚いたように受け止めた。

「・・・有難う。うれしいよ。」

ヴィゴは照れくさそうに微笑み、静香は窓に近づいた。天界は相変わらず雷を落とし、この城にもいつ落ちてくるかわからない。

このとき、浮上していた城に雷が直撃した。

部屋中の飾りモノが音を立てて床に転がる。ヴィゴは床に叩きつけられ、気を失った。城が騒がしくなる。

「ヴィゴ！」静香は駆け寄った。

「天界のヤツらめ！！」

ベルセルク達が叫んでいる。

牢屋が壊れ閉じ込められていたルーが静香を探しにきた。

「アビリル？大丈夫か？」

「ヴィゴが！気を失っちゃったの！」

「天界が魔王に攻撃を仕掛けている。

ヴィゴを渡さないからだ」

第二の雷が城を直撃し、再び床に突っ伏した。

ヴィゴは目覚める気配はない。

ヴィゴは霧の中でグリフに出会っていたのだ。グリフは体が炭のように真っ黒になっていた。（議員のやつら、ボクにいやな子を与えたんだ。その子、ボクにいやな事、思い出させた。）

記憶が一気にヴィゴになだれ込んだ。

女が泣き叫ぶ中、手から赤ん坊を取り上げる。

その女は驚くほど美紀に似ていて、赤ん坊を取り上げていたのはル

「だった。」

天界人たちが広場にあつまり見物する中、美紀にそっくりの髪を刈られた女は真つ黒に塗りたくられ、虚無の国におとされた。

一人の男が広場に現れた。

「・・・私の妻を殺したのか？議員、いつから命令に逆らうようになった？」

「天界を見捨てた貴方に命令される筋合いはない。女一人、満足させず情けない男よ。」

貴方さまも、いい加減出かけられたらどうです？虚無の国はあちらですよ」

広場の群集からは忍び笑いが聞こえ、男は呆然と立ち尽くした。

「貴方様が女にうつつを抜かしている間、人間界に悪魔が暴れておりました。神界がお怒りです。責任を取っていただかないと。」

広場に移されたモニターには史上最悪の兵器が映し出されていた。

「ラファエ殿、怠慢でしたな。」

「人間に新しい太陽を与えたのはお前達だ。」

人間は・・・頭がよすぎる。その威力に気づき、兵器として使うことがわかってたのだろう？」

議員達は立ち上がり、女に塗りたくった黒い液体をラファエと呼ばれた男にかけ始めた。

「下らぬ事を。我々は人間に新しいエネルギーを教えてやっただけの事。」

感謝されこそすれ、責められることは何もない。

現に今、人間ドモはそれがないと生きてはいけぬではないか？

汚れた神よ、目の前から消えるがよい」

群集も一団となり、ラファエを責め始めた。

ラファエの着ていた真っ白のローブは黒くよごれ、美しい金髪もどろどろになってしまった。

ラファエはよろめきながら、虚無の国に身を躍らせた。

その様子を物影から見つめていたルーは止める様子もなく、赤ん坊を抱き悪魔界へと旅立っていった。手には殺すためのナイフが握られている。ちらつと産着がめくれ、ヴィゴは赤ん坊の腕に自分と同じ、入れ墨が入れてあるのを見つけた。

ヴィゴはがばつと起き上がった。

あたりを見回し、ヴィゴはルーを見つけた。

「・・・お前。オレを殺そうとしたのか？」

ヴィゴはルーにつかみかかろうとし、雷の衝撃で床に倒れた。

ヴィゴは床にはいつくばったまま、怒鳴った。

「何が天界だ。悪魔以下じゃないか！よってたかって人をいじめて、虚無なんかに突き落として！天界人なんて皆死ねばいい。オレにかまうな！」

かけよる静香にヴィゴは怒鳴りつけた。

「なんでキスなんかしたんだ？」

ルーに頼まれたのか？ヴィゴを手なずけとけってか？」

「違うわ」静香はヴィゴの剣幕にたじろぎながらも答えた。

「記憶はないけど、もう一度やり直せると思ったのよ。」

なぜ、昔の私が貴方を愛してたのかわかるから。」

ヴィゴにかけよった静香を乱暴に突き飛ばした。

「近寄るな！」

雷はさつきとは違う反応をいだした。

天に跳ね返るようになったのだ。

静香が不思議そうに窓から顔を出すと、巨大なドラゴンが城、めがけて飛んできて静香を驚かせた。

「やっと見つけたあ、改造人間達が今、雷を鏡でもって跳ね返してるんだ。

キャンペーン中止のお礼に魔王の城を助けるんだ。

でも君達は早くお乗りよ。ロキが待ってる。

バイセン村だね。お腹が痛くて動けなくなっただんだ。」

ルーは静香を引っつかみ、ドラゴンに寄せ、ヴィゴを乗せようとした。

「・・・オレにかまうな、ココで死ぬつもりだ。」

「アンタを死なせるわけにはいかない。」ルーが言った。

「・・・王さえ現れれば。ヴィゴ、天界に行ってくれ。私も天界に向かうから。」

ルーはヴィゴをドラゴンにのせ、自分は窓から身を躍らせた。

「ああ、怖いよう。」ドラゴンは泣きべそをかきながらもロキたちのいるバイセン村へと飛んで行った。

日も落ち、天界の雷がますます酷くなっている。

だが改造人間達もがんばって跳ね返っていた。

ヴィゴたちは古い要塞跡で朝が来るのを待つことにした。

枯れ葉を集めてきてドラゴンが火をつける。

「天界なんてどうやっていけばいいんだよ。道順くらい、教えてくれたらいいのに。」

ホント、ルーってどっか抜けてるよな。

いちいちうるせーくせに肝心な事言い忘れるんだよ。

ドラゴンさんよ。マジでロキがバイセン村にいるのか?」ヴィゴが聞いた。

「うん、ヴィゴに会いたいんだってさ」

「親父がオレに会いたい?なんで?」

ドラゴンは不思議そうに目をしばたかせた。

「そりゃあ、自分の息子さんだからさ。」

ヴィゴはドラゴンに背をもたせ、遠い目をした。

「息子だからか・・・。」

まあ、オヤジなら天界への行き方も教えてくれるだろう。ついてきてくれるかも知れないしな。」

静香が枯れ葉を両手に抱えてきて、地面にドサリつと置いた。

「この上なら少しはマシかも。ヴィゴさん、どうぞ」

二人はふかふかの枯れ葉じゅうたんの上に横になり天界を見上げた。

「天界は・・・どうなるんだろう?」

「・・・ホント。塔は壊れちゃったし。海は荒れるし。」

多分、みんな陸に逃げなきゃ危ないわ。なんにもない土地だけど。ドラゴンは恐ろしい煙を鼻から出し寝始めている。

静香は上半身を起こし、ヴィゴを覗き込んだ。

空で光ってる雷がヴィゴのキレイな目にうつるのが見える。

「・・・思い出さなきゃダメ?今の私じゃダメ?」

「えっ？おれ・・・っていうか、静香じゃなきゃ。君でも・・・アビリルでもない。ごめん。」

静香はヴィゴの胸に顔をうずめ、泣いた。

「一度、・・・抱いてくれない？」静香は勇気を出していった。
「思い出せる気がするの・・・」

「無理するな。天界人がそんな事言つもんじゃないよ。」ヴィゴは静香を軽く引き離れた。

「ルーも、アンタにもひどいこと言っちゃったな。グリフの夢見て、頭がおかしくなっただろう。悪かったよ。」

突き飛ばしたりして。ごめんな。・・・もう、オレ寝るよ」
そういつと静香に背を向けた。

・・・横に静香がいるのに。ホントは記憶なんてどうでも良かった。今すぐ抱きしめたかった。
でも・・・グリフ、いやラファエをなんとかしなければ。
たとえ命とひきかえになっても。

もう静香を悲しませたくなかった。
巻き込みたくなかった。

ヴィゴの背中が寝ているとは思えないほど上下に激しくゆれている。
静香は一緒に悲しみを共有できないのを淋しく思った。
ヴィゴの背中に自分の背中をくつつける。

「・・・ヴィゴの背中、暖かいわ。」
ヴィゴは逃げなかった。
いつの間にか静香は寝てしまった。

朝、ヴィゴに起こされあわてて飛び起きた。

「案外寝坊スケなんだな。天使様なのにさ。」

昨日の雰囲気と違い、楽しげにのぞきこむヴィゴがいた。

静香は髪についた枯れ葉をとりながら起き上がった。

「天界の様子は？」

「雷が止まったようだ。今のうちにバイセン村に向かえる。

ドラゴン、もう少しがんばってくれ」

ドラゴンは、恐ろしい牙をむき出しにアクビをし、ヴィゴ達を背中に乗るよう促した。

なんだかモジモジしている。

「ぼくさあ。・・・ミルフィっていう名前なんだ。ドラゴンなんて呼ばないで」

「・・・それは失礼。なんだか乙女チックな名前だな」

「じゃあ、ミルフィ。お願いね。」

静香が言った。

久しぶりの故郷にヴィゴはうきうきしていた。

「何年ぶりだろう。アビリルが天界で殺されちゃって以来だ。

世界中を旅して回ったんだ。

最後はセドリックの大学で仕事する事になったけど。そこに、君がいたんだよ。」

「大学？」

ヴィゴは楽しげに想い出を話す。バイセン村に着くまではこの飛行を楽しみたかった。

「楽しそう、行ってみたいわ」静香はつぶやいた。

「ほら、あれがバイセン村だ。」 ヴィゴは指差し、ミルフィは一目散に降りていく。

ヴィゴは静香をミルフィからおろし、バイセン村に向かって歩き出した。

「ヴィゴが帰ってきたよ!!」

けたたましい鐘の音とともに村人たちがヴィゴを迎えに飛び出てきた。

セドリックはオイオイと泣き出すし、マルクスはヴィゴを抱きしめ、猛烈に熱いキスをした。

明るいう村人の笑顔と裏腹に、ごっつい体をした片足の男がヴィゴについてくるよう促す。

「・・・ロキが呼んでいる。私はロバートだ。」

「ああ、あの・・・ふんどしの。」 ヴィゴは何かを思い出したのか咳き込んだ。

ヴィゴは静香を村人の歓迎に任せ、ロバートの後をついていった。掘っ立て小屋の中にロキはいた。

ロキは苦しそうだった。

「大丈夫だ、すぐに収まる」

駆け寄ったヴィゴにロキが説明した。

「お前が山下から取り出した長虫のせいだ。喰った後に後悔したかな。」

「そんなの喰うなよ・・・オヤジ。大丈夫か？」

長虫に腹を食われロキは痛みをこらえてる。

「もしかして取り出せるかも知れない、オヤジ、そこに横になれよ。」

ヴィゴがかざした手をロキははたいた。

「何スンんだよ、痛えなあ！」

「やめろ、オレは死ぬんだ。」

ヴィゴは手を撫でながら、

「なんで？せつかく助けられるのに？

オレの昔からの唯一の特技なんだよ。」

ロキは顔をしかめた。

「特技じゃない。能力だ。王の証だ。癒しの魔法は王だけに与えられた能力。」

お前は・・・天界の王になる運命だったんだ。

どこでどう、まちがったか、変なヤツに育っちまったみたいだな。

「

「は？王？オレが？」ヴィゴは大声を出し、ロキの腹は猛烈に痛んだ。

「うるさい、でかい声を出すな。・・・指輪は？」

「今は天界にある。ルーが言ってた。」

ラファエが嫌な記憶を取り戻してしまったらしくて、オレしか止められないって。」

「では天界に行け。ラファエには・・・申し訳ないことをした。」

ロキはそいうと乾いた声で笑い始め血を吐いた。

「・・・オヤジ？」

「オレは死んでもまたタマゴになり、人間界で売られる。

まったくだらない飼い主に飼われるはめになる。

永遠に抜け出せない運命になっちまった。

愛してはいけない女を愛してしまった報いだ。

でも今回は違う。

最後に・・・息子に会えてよかった。」

ロキはそういうと、地面によこたわった。

ロキは死んだ。

「・・・オヤジ。」ヴィゴがロキにすがりつき、むせび泣いた。

「まだ、何にも話してねえじゃん！」

せめて天界まで・・・ついてきてくれよ。

アンタに文句一つもまだ、言えてねえのに。・・・アンタはいつでも勝手だな!!」

ロキはポワンと輝き、ダチヨウの卵くらいの大きさになった。
きれいな銀色だった。

オオカミがのっそり小屋に入ってきた。

「・・・ペロ・・・だろ？」涙を拭きもせずヴィゴは子供のように
グスングスン言わせながらつぶやいた。

オオカミはフンという顔をし、

「とんだ天界の王だな。」

そしてロキのタマゴを渡すようにいった。

「イヤだ。」

「ダダをこねるな。渡せ、新たな飼い主がおまちなねだ。」

出口を探し這いずり回っていた長虫をオオカミは踏みつぶした。

「ペロ、オレはどうすればいい？」

「どうしたい？」

「グリフが・・・ラファエがオレに助けを求めているのなら会いにい

きたい。」

「天界に行きたいのか？死者の森から行け。天界と繋がってる古い塔があるハズ。」

「ペロ・・・静香からオレの記憶がなくなってる。」

「よかつたじゃないか。悲しませたくないだろう？」ヴィゴはうつむいた。

「結局は・・・そうだな。運命に任せるんだな。」

ペロは肉球をヴィゴの膝にのせて言った。

村ではヴィゴと静香を歓迎する準備が始まっている。

肉を焼く匂い、スープの匂い。

静香が楽しげに村の女たちと下ごしらえをしているのだ。

ヴィゴは小屋からその様子を眺めた。

ロバートがヴィゴの姿を見つけ片足であわてて駆け寄ってきた。

「ロキが死んだのか・・・」

また、タマゴに戻り新たな飼い主と出会っただろう。

会える、生きていれば必ずな。」

ロバートはヴィゴに力強く言った。

「ロバート。オレ・・・天界に行くよ。」

皆に知らせないでくれ。巻き込みたくない。」

「・・・彼女は巻き込まれたんじゃないのか？」

「ルーと一緒になればいい。そう、伝えてくれ。」

「淋しいな、やっとロキの息子と話せると思ったのだが。」

ロバートはそういうと、ヴィゴに黒いマントと食料を渡した。

「気をつける。死者の森は危険だ。」

自分を信じる。そうすれば惑わされることもない。

ロキの息子である事を誇りに思っんだ。

お前の母親が愛した男だからな。」

「・・・言われなくてもわかってるよ。」

ヴィゴはロバートに教えられた死者の森に向かい歩き始めた。

第十二話

死者の森。

セドリックが子供達を集め、夜に語ってくれた話を思い出した。

「死者の森の呪われた木々の言葉に耳を傾けるな。

天国にもいけず、地獄にもいけない。

どちらから見放されたモノ達が木に宿り、旅人達を恐怖におとし
入れる。」

子供時代のヴィゴは頭から毛布をかぶり、マルクスに隠れながらその話を聞いた。

何日も一人でトイレに行けず、マルクスにあきれられたっけ。

マルクスがセドリックに相談し、そしてお守りとして指輪を渡され
たんだ。

「お前の唯一の持ち物だった。

母の形見だろう。」

お前が成人するまでは失くす恐れがあるから預かっておいたのだが。
コレを首から下げてなさい。」

ヴィゴは母の形見の指輪を握り締め、淋しいときは話しかけること
にしたのだ。

驚くべきことに指輪は答えてくれた。

ヴィゴの幼少時代のマルクスを除いた唯一の友達だった。

「グリフがラファエ様か何か、知らないけどオレの友達だったんだ
！！！！！」

小高い丘に立ち、ヴィゴは思いっきり叫んだ。

ルーの耳元で、もつともつと大声で言つてやれば良かった。
何度も何度も叫んだ。

最後、思いっきり叫んだ反動で丘を転げ落ち、したたか尻を打った。
「痛つてえ……。」

丘を見上げると、一気に距離を稼げたことに気づいた。

「……まあ、ラッキー……なのか？」

ヴィゴが尻をぶつけた木のコブを恨めしそうに見た。

「でかいんだよ、コイツ！」

ヴィゴは思いっきり蹴り飛ばし、次はつま先の痛みにうずくまった。

（ああ……つくづく情けネエ）

ざわっ。ざわわ。

「なんだ？何が起こった？」

ヴィゴが顔を上げた。森が一齐にざわめきはじめたのだ。

蹴り飛ばした木のこぶはよく見ると人間の顔だった。

一本の木にだいたい10人ぐらいの顔がついてるだろうか？

（ひどいわねえ！奥様。聞かれましたあああ？）

（蹴られはったんやて。ねええ！）

徐々に森全体に噂が広がっている。

コイツラがまさかの死者の森？

「……コイツら、近所付き合いハンパねええ……。」

ヴィゴはつぶやいた。

「マジすんません、許してください。」

（奥様、なんか聞こえましたあ？）

（なんにも聞こえしません！）

（ホンマにモノの知らん人は言つたげんとうう）（ねえええ）
ヴィゴはそろつと起き上がった。

木々は口勝手に話している。

「気持ち悪いわア」。動かはるえ、あの人」

「動くなんて、ねえ」

ヴィゴはいい加減腹が立つてきた。

死者の森？

結局は成仏できない迷える魂の墓場じゃねえか。
しかも、京都弁。

「てめえら、燃やしちまうぞ！立ちションしてやる！！」ヴィゴが
どなり、実行に移した。

「いやあ、大したモンも持ったはらへんのに。」「かなんわあ」

ヴィゴに向かって、木のコブの口が開き始めた。

ものすごい異臭がし、ヴィゴはむせた。

吸い込まれる・・・。

「何をしてる？」

凜とした声がし、木のコブに入りかけてたヴィゴは引きずり戻され
た。

死者の森はぴたつと口を閉ざし、なにこともなかったかのようにす
ましている。

「死者を相手にするな。引きずり込まれるぞ」

ソイツはすっぽりとフードをかぶり顔は全く見えなかった。

「・・・誰？」

ヴィゴはつぶやく。

「誰でもいい。なぜこんな危険なところをうろついてる？」

「オレ、天界の塔に行かなきゃならないんだ。」

っていうかアンタ誰？」

（虚無の国の人やわ。アンタ口聞いたらあかんえ）木のコブがささやく。

「うるせー。ささやきコブめ！」ヴィゴは再びコブを蹴った。

「やめろ！お前も顔を蹴られるのはイヤだろう。あやまれ。」ソイツはどなった。

ヴィゴはしおしおとあやまり、ソイツが見てないところでまた、蹴った。

再び足を吸い込まれそうになってるヴィゴを冷やかに振り返り、
「ついて来るのか？」ソイツはイライラしていった。

その夜、ヴィゴがとうとうへたばったので、急遽火をたき宿をとることにした。

「なんでアンタもこんなところついてるんだ？」

ヴィゴがロバートにもらったパンを枝に突き刺し焼き始めた。

「・・・虚無の国にいるのが辛くなった。」ソイツが言った。

「へえ。マジで？虚無って何にもないんだろ？名前は？」

「名前なぞない。」「へえゝなんで？」

ソイツはヴィゴの言葉をうるさそうに聞いていたが、とうとう早く寝ろと言った。

マントを体に巻きつけヴィゴが小さく丸まり、なんとか寝ようとした。

夜中にふと目が開いた。何かが聞こえたのだ。
どうやら歌のようだった。

（誰が歌ってるんだ？）

木の陰に虚無の国の住人が空を見上げて歌っていた。フードを脱いで。

その素顔は驚くほど醜かった。

蛇のような緑色のぬらぬらした肌。

あまりの醜さにヴィゴは驚いたが、その歌声をずっと聴いていた。朝までヴィゴはそこに座りこんでいた。

聞いた歌を思い出していたのだ。

「行くぞ」どこからか、声がした。

「・・・あの歌・・・。もう一度聞かせてくれ。頼むよ。」

しかし、彼はどんどん進んでいった。

男は後悔していた。なぜ、あの歌を歌ってしまったのだろうか？誰に聞かせるために？

天界から投げ落とされたロクサーヌを救ったのは彼だったのだ。

彼は毎日天界を思い、憧れを抱き天界へ通じる穴の下をうろついていた。

天界がなぜ、そんなにも自分をひきつけるのか。

彼は知らなかったのだが、実は彼は天界で生まれたのだった。

そして生まれた時、あまりの醜さゆえ見るものを死に追いやる。

そういう理由で虚無の国に落とされたのだ。

彼は醜神だった。

神界より使わされたラファエの右腕となるべきものだった。

議員達は醜神を追い出し、自分達が後釜に座った。

彼は地面を這いずりロクサーヌを自分のねぐらに連れて行った。

ロクサーヌは彼の看病で息を吹き返し、暗闇の中起き上がった。

「・・・ありがとう。あなたのおかげで助かった。」

彼はフーフーと息をもらした。

彼は言葉を持たなかった。

彼は地面を這いずりまわり、ロクサーヌの為に食べ物を探してきた。ロクサーヌには食べ物が必要なかったが、彼の気を悪くしたくなか

ったので食べた。

真つ暗闇で何かわからないものを口にするのは気持ち悪い。

しかしロクサー又は食べ、彼はフーフーと喜んで跳ね回った。

ロクサー又は自分の産んだ子を思い、涙している時は側で見守っていた。

彼女が時々口ずさむ歌も彼の耳に初めて聞くものだった。

ロクサー又は彼に言葉を教え、彼はじょじょに話せるようになった。彼はロクサー又は恋をした。

しかし彼は自分の醜さを知っていた。

明るい日の下でロクサー又は会えば驚いて死んでしまっただろう。

彼は初めて虚無の国の暗闇に感謝した。

しかし変化が訪れはじめた。

光が差し込み始めたのだ。

醜神であり、いまや虚無の王である彼の心が愛するものを得た事により幸福になったからだだった。

しかし虚無に差し込む光はそこに息づくものたちに絶望を与えた。

光を得た虚無の大地はブクブクと忌まわしい空気を吐くのを恥じらい、足が無数に生えた気味の悪い虫たちは自分の姿を恥じらい、目も持たず鼻も持たず、愛を語らうこともなくただ、食する為にだけ存在する口を持つ猛獣は嘆きの唸り声を上げた。

ロクサー又は虚無の国を歩きながら気味の悪い植物、虫、忌まわしい生き物たちに神の祝福の言葉をかけてやった。

虫たちは美しくなれるよう神に祈り、猛獣たちはロクサー又はの足元でうずくまり、精一杯自分の恐ろしい牙を隠しロクサー又はに甘えた。だが、彼はロクサー又はに会うことが出来なかった。

彼女が自分の醜さを知り、死んでしまったら？

一緒にねぐらで寝起きをし、食事を共にし、一日中語らい、歌を教えた。

その相手がこんなに醜いと知ったら？

彼は岩陰に隠れ、ロクサーヌがいくら呼んでも探し回っても出て行かなかった。

ある日、ロクサーヌは今まで聞いたことのないほど美しい歌を歌い始めた。

それは子供の為にロクサーヌ自身が作った歌だった。

子供がお腹にいる時、よく歌い聞かせていた歌だった。

隠れてしまった彼に出てきてもらおうと心を込めて歌った。

彼は聞きほれ、自分の姿を隠す事も忘れフラフラと光の下へ這いずり出てしまった。

ロクサーヌは驚いた。

しかし、それ以上に驚いたのは彼だった。

姿を見られ、その目に明らかに驚きが見て取れた。

・私の醜さに驚いている。やはり、彼女もアイツらと同じだった。彼は長くぬめぬめした指を彼女の首に巻きつけ、徐々に締め付けた。ロクサーヌは小さな叫び声を一つあげ、息絶えた。

・・・殺してしまった。

彼はロクサーヌを抱きかかえ泣き続け、緑の目は光を受け光り輝いた。

光は全世界を照らした。

議員達により天界を追い出されてうろつきまわっていた運命の神は驚いた。

なぜ、虚無の国に醜神がいるのだ？

醜神はこの世のあらゆる物の本来の姿を見抜く能力を備えている。彼が天界にいれば改造人間ドモが議員として、はびこる事もなかつ

ただろう。

天界の王の右腕、左腕になるはずの我々を追放したあいつら。私をオオカミなんぞと合体させよったあいつら。

運命の神は彼にゆっくり近づいた。

彼はロクサーヌをとられまい、と必死にかばった。

「彼女をよこせ。とつて喰ったりはしない。」

「殺してしまった・・・。」

「ロクサーヌのことは任せろ。お前は私と共にこい。」

ここにいるべき者ではない。共に戻ろう。」

しかし彼は首をふった。

「私はここしか知らない。もし、願いを聞いてもらえるのなら・・・。」

もう一度この世界を暗闇にもどしてもらえないか？

たぶん・・・この世界の皆がそう願ってる。」

オオカミはそうしよう、と頷き、ロクサーヌを受け取った。

虚無の嫌な思い出にため息をつきながら後ろを振り返ると、ヴィゴは辛そうに座り込んでいた。

「オレさ。体力ないんだよ。・・・少し待ってほしい」

「よわっちいヤツだ。」

「アンタさあ・・・名前がないと呼びにくいんだよな。ライドになよ。」

オレの飼ってたモグラの名前だ。あんた、子供でもいるのか？子守唄歌ってさ。」

「子守唄？あの歌が？」

「そうだろ？子供に無事に育って欲しいって言葉があったよ。」

オレ天界語なんてあんまり知らないけど、そこだけはわかった。ええと、こんな歌だったっけ」

ヴィゴは外れまくりの音程で歌い、ライドは「ひどいもんだ」と少し笑った。

「なあ、ヒドイもんだろ？ライド、歌ってくれよ」ライドはヴィゴの頭を少し叩くふりをし、先にたって歩き出した。そしてキレイな声で歌ってくれた。

ヴィゴはついて行きながら、歌をまねる。

「ヒドイもんだ！」ライドがヴィゴに向かって叫んだ。

再び夜をむかえ、ヴィゴは疲れきり地面に大の字になって寝転がった。

「もう、一步も歩けねえ。いつそのこと殺してくれ！」ライドが火を起こす。

「なあ、ライド。なんでそんなに深くフードかぶってんだよ。暑くねえの？」

ヴィゴは肘を突きながらライドに聞いた。

「私は……。醜すぎるから。それが私の罪なのだ。」

「醜いのが罪？何だよそれ。失礼だな。」

罪だなんてそんな事ネエよ。そりゃアンタに結婚は申し込まないけどさ。

オレには婚約者がいるんだ。

……。ついていたはずだったんだけど……。

ああ、思い出しちゃった。」

ヴィゴは急に元気がなくなった。

「どうした？」ライドがヴィゴのパンを焼いてやりながら聞いた。

「……。オレには恋人なんて持つ資格ないんだった。プリユキトスだし……。それに、オレのセイで2度も命を落とさせてるから。」

「……。明日には塔に着くだろう。もう、寝る。」ライドはヴィゴを改めて見つめた。

ライドは驚きパンを火の中に落とした。

火に照らされたヴィゴの顔はロクサーヌにそっくりだったのだ。

「おおう、もったいない。」ヴィゴはあわててパンを救出する。

「バイセン印のおいしいパンなんだ。」ヴィゴはパンについた煤を払いながらかぶりついた。

「貴方は・・・私の大事な人を思い出させる。」

「オレが？」ヴィゴはパンをかぶりながら聞いた。

「私はその人を殺してしまった。」

罪は許されないだろう。」

「マジでか？やばいなアンタ。なんで殺しちゃったんだ？」

「私を見て驚いたんだ。・・・彼女には受け入れて欲しかった。」

「なんで驚いたんだ？」

突然ライドはフードを脱いだ。

「・・・アンタ・・・シブいわ・・・緑のダースモールだ。」

ヴィゴはパンを取り落とし、感心してつぶやいた。

「昨日、私をみてもさほど驚かなかったな。」

貴方、変わってる」

「オレはこの世で最悪の生き物だ。可奈子に言わせりゃプルルン金玉だ。」

あんたなんてカワイイもんだよ。」

「もう、寝ろ。」ライドはヴィゴに背をむけ、寝転んだ。

「・・・オレが子守唄歌ってやるうか？」ヴィゴは淋しそうなライドの背中に話しかけた。

ライドは返事をしなかったがヴィゴは小さな声で歌い始めた。

シンとした夜にヴィゴの声は静かに響き渡った。音程はあやしかったが、ライドは久々にぐっすり眠れた。

天界への塔はそうとう古いものだった。

「崩れそうだな」ヴィゴは見上げて不安そうに言う。

「大丈夫だ。天界に来るべき運命のモノには塔はきちんとその役目を果たす」

ライドが言った。

「そうか。じゃあ、一気に上っちゃおう。」

「私は・・・登れないかもしれん。私は虚無の国のモノ。塔が私を拒むだろう。」

「グズグズ言うな。行こう。」

ヴィゴはライドをせきたて塔に登り始めた。

塔、と言うよりも、切り立った崖といった方が正しいかもしれない。ライドはビクビクしながらも、塔が自分を拒まないのを不思議そうな顔をしていた。

「なぜ？虚無の国のモノなのに？いいのか？私なんかが？」

「グズグズ言うなよ。あんた、実は虚無の国のモノじゃないんじゃないか？」

ライドは思い出していた。ロクサーヌを連れ去ったオオカミが言った事を。

（貴方はここにいるべき者ではない）

「そうかもしれない」

「なんだよ、自分のことじゃなか。たよりねえなあ。」

ヴィゴは笑い出した。ライドも笑い出した。

「さっさと登っちゃおう。塔の気が変わらないうちに！」

天界の海は荒れ、そして家は押し流されていた。

街の中心の塔は半分で折れ、下敷きになっている建物に天使達がむらがり、挟まってる者たちを助けている。

「ひでえなあ。魔王の攻撃かな。ってオレが天界のいうコトなんか聞くなってけしかけちゃったんだけどな・・・」

ナンマンドブ」ヴィゴは手を合わせる。

ヴィゴ達はあまりの高波におしながされそうになりヘブンハレブンに逃げ込んだ。

「なつかしい。オレ商店だ。」

そして水浸しの床に浮かんでいるヌーブラをライドに放ってよこした。

「アンタには想像もできないようなモンだ。」ヴィゴは自分の胸に当てて見せた。

ライドは目に当て、コレはいい、言っていた。

「コレは見たくないときにちょうどいい。」

私は妙にその人の本来の姿を見てしまうクセがあるから。」

「へえ。オレはどうなんだ？」

「・・・不思議な事に王の姿をしている。」

「・・・静香に言わせりやエロ王国の王子だもんな。」

「冗談でそんな事は言わない。本当に見えるのだ。」

「マジで？オヤジ、ホントの事言ってたんだな。」

「そうだ。天界の王だ。」

「天界か・・・もし、オレがマジで王さんなら・・・そうだな。幸せな国を目指すよ。」

だいたいさ、天界の住人は自分達が天界にいること事態幸せなのに、少しでも規律に外れると悩むんだ。

自分たちの定規を勝手に作ってさ。それで一ミリでも間違っていると悩むんだ。

ばかだよ。

悪魔界は魔王がいじけてる。

自分がこの世で始めて誕生した汚物から生まれたっていつまでもすねてるんだ。

生まれなんてどうでもいいじゃん。

自分がうまく治められてないと思って天界の意見を聞きすぎるんだ。魔王自身はそんなにヤナ奴じゃない。

天国、地獄でもけつきよく、そこを快適に過ごすのはソイツ自身の気の持ちようだよ。

アンタは虚無の生活を楽しんでたのか？」

「虚無には楽しいことなんて何もない」

「大事な人がいたって言うてたじゃん？」

「・・・そうだな。私の人生で唯一楽しかったことだ。」

ヴィゴはその様子を満足げに見て、そして歯のマニキュアコーナーを見つめ駆け寄った。

「ココも崩れてる。ヒドイもんだ。」

懐かしいな。たしか、この辺からアビリルが抜き取ってさ。」

ヴィゴはヌーブラまみれになってるライドを引っ張ってきて話をしはじめた。

「たしか、この辺だ。そんでさ、アビリルがオレの事をさ。」

こんなに積み上げるなんてかつこいいわゝ素敵だわゝって！キッスまでしてくれたんだぞ。」

明らかにヴィゴの記憶は脚色されていた。

ヴィゴはライドを前に座らせ、静香がどんなに美人かを語ってきかせた。

「オレさ・・・。大好きなんだよなゝ！」

ヴィゴはマニキュアを一つとり、ライドにほうってよこした。

「歯に塗るんだ。笑顔が引き立つよ。」

ヴィゴは歯をかちかちと鳴らし、ライドはふん、と鼻をならした。「オレは自分以外に大事な人が見つかるってのが一番幸せなことだと思うよ。」

アンタはそれをクリアしてる。いい人生じゃんか。」

ライドはそうかもな、と微笑んだ。

へブンハレブンの辺りがさわがしくなる。

議員達が子供を探しに来たのだ。二人が外をそうろつと覗くと3人の白いローブのジジイ達が歩き回っていた。

しかし、子供は見つからず、議員達はイライラしていた。

「どこに行きやがった！殺してやる！」

「まあ、そう言うな。天界からは逃げられん。あのガキがホントにプリュキトスならいいのだが。腐れ神飼いを放棄させれば、我々の手に入る。神界のつとりも夢じゃない。」

「神界のつとり？なんじゃそりゃ？」ヴィゴは思わず叫んでしまった。

ヴィゴに気づいたジジイたちは急に言葉を改め、店の中に入ってきた。

「・・・どなた様ですか？」

「オレ？グリフの友達だよ。ええつと、違う。ラファエだ。ラファエがなんだかおかしい事になってんだろ？会いにきたんだよ」

（・・・まさか。コイツが？さっきのガキがプリュキトスじゃなかったのか。）

ヴィゴは身構えた。「ナンだよ、お前ら。」

「・・・貴方、もしや・・・。」そういうと、男たちは途端に態度を変えた。

「ラファエ様の恐ろしい記憶が天界をおおってしまいました。

もう天界はおしまいでございます。

指輪の持ち主ならラファエ様の苦しみを止められるはず。

彼を・・・探さなければ。」そしてヨヨヨつと泣き崩れた。

ライドはヴィゴに目配せをしたが、ヴィゴは泣き崩れたおじいちゃん達を慰めようとしやがみこんだ。

「心配すんな。ジイちゃん。その為にきたんだ。」

ラファエを呼ぶよ。そいで後は任せる。」
議員達は優しく微笑み、「ありがとう」と言った。

「お前ら……。」ライドが叫んだ。

「私には見える。あんたたちは神じゃない。
神と人間の改造人間だ。

私を虚無の国に堕としたらろう？天界を手に入れるのに私が邪魔だったのだ！」

「コイツ、何を言っている？」

「……お前らは私に正体を見破られる事を恐れたんだ！

人間には絶対に知られてはならない知識をお前たちは与えた。

天界だけでなく、人間界まで手に入れるつもりなのか？」

「ライド？どうしたんだよ？血相変えて。」

「ヴィゴ、コイツらを信じるな。」

ヴィゴは爺さん達をながめた。

いかにも天界人らしくりっぱな人たちだった。

ライドは長旅のせいでマントはどろどろ、相変わらず緑色の顔をフードで覆い隠している。

見比べて、どっちを信用するかは考えるまでもなかった。

ヴィゴはあきれたようにライドに肩をすくめ、ライドに頬を思いつきり殴られた。

「痛ってえなあ〜！ライド、てめえ、なんで殴るんだよ！」

「その方を殴るなぞ。なんと恐ろしい。見た目も恐ろしいが。そう
だ、お前は悪魔だらう？」

「汚らわしい生き物め！！天界の空気を吸われるだけでも反吐が出
そうだ。」

「ヴィゴ殿、そんな生き物は放って置いて私たちと共に参りましょ
う」

ヴィゴはためらった。

「汚らしい生き物？ライドが？ヒドイ事言っな。お前らこそなんだよ？偉そうにすんな」

ライドは爺さん達に食って掛かるうとしたヴィゴを引き止めて続けた。

「お前らは自分達を選ばれた存在だと、信じ込んでいた。選ばれた私たちは、神として生きるべきじゃないか？」

神と合体し、今の地位を得たのだ。

お前たちに材料となる神を3人用意した大ばか者は一体だれなんだ？」

「マジ？なんだよ、あんたら人間なのか？」

ソイツラは真っ白のローブを顔まで引きおろした。

「・・・クラックス団かよ。オレの質問に答えろ。」とヴィゴはつぶやく。

「つべこべ言っな。ラファエを呼ぶんだ。」

「うるせーよ。呼ばねーよ。」

「えらそうに。プリュキトスが。」

・・・お前の心の怒りを引き出してやる。

怒りは腐れ神を呼び出させるだろう。」

男たちはヴィゴに魔法をかけた。

ヴィゴは目の前に突然現れた残酷な景色に叫び声をあげた。

燃え盛る火の中でバイセン村が焼き払われている。

セドリック、マルクス。昔からの仲間。

そして、なぜかロキ。藤原や可奈子。美紀まで。

バイセン村にいて逃げ場もなく、泣き叫んでいた。

「お前ら！早く逃げるんだ！！」

ヴィゴが助けに行こうとすると、建物は崩れ恐ろしい叫び声が響い

た。

炎はヴィゴにまで迫り、自分の体が燃えていく。徐々に皮膚が真っ黒になっていった。

「うわっナンだよ。」

皮膚が崩れ落ちてもなぜか死ねない。

「助けてくれ!!」

気がつくと、ルーが女と抱きあっている。

その女は静香だった。

「お前ら、何してるんだよ。離れろ!!」

静香は幸せそうにルーを見上げていた。

「やめろ! 離れろよ。」

ルーにつかみかかったヴィゴの手はボロボロとくずれてしまった。

「やめてくれ!! これは幻覚だ。本当のことじゃない。お前らの見せる幻だ。」

ヴィゴは叫んだ。

「幻覚じゃない。お前が望んだことだ。私達はお前の思いを映像にしかけた。」

「・・・やめろ。」

「お前が生まれ育ち、いじめられた嫌な思い出のある、あの場所を焼き払いたかつたんじゃないのか?」

「・・・やめろって言ってるんだ!

何を言わせたいんだ?

オレの心の闇を白状させたいのか?

ああ、オレだって色々考えるさ。

確かに眠れない夜なんか心の中でイロイロ想像するよ。でもな。現実にしたいわげじゃない。

てめえら、何してもいいのか?」

「まだまだ、怒りが足りんようだな。」

では、この男。ライドの記憶を覗いてみるか？」

ヴィゴは顔を背けたが、議員達は髪の毛をつかみ、顔を上げさせた。ライドは美紀にそっくりの女の首をしめ、じわじわと殺していた。

「美紀！」ヴィゴが思わず叫び、議員達にはやつく。

「美紀じゃない。あの女はお前の母親。ロクサーヌだ。

お前の母親を殺したのは、この男。

この気味のわるい青虫男だ。」

「・・・どういうコトだ？」

「この男は天界から堕ちて来たロクサーヌを虚無の国で遊び楽しんだ。

飽きて、殺したのだ。」

ヴィゴの頭は混乱した。

（大事な人を殺してしまった。）ライドはそういつていた。

まさか、オレの母親を？

「ライド？マジでか？オレの母親を？」

憎しみがヴィゴの心に溢れてきた。

アビリルを失った時の記憶、静香がバス事故に遭ったときの記憶。

体中の細胞に刻まれている憎しみが一気に目覚めた気がした。

ヴィゴの憎しみはラファエを呼んだ。

嵐は止まった。塔から溢れていた真っ黒の霧がヘブンハレブンになだれ込んだのだ。

真っ黒の霧が一塊に集まり、ヴィゴを取り囲みはじめた。

「おお、ラファエだ。そうだ、腐れ神よ。吸い取ってやれ！」

ヴィゴの中に真っ黒の霧が入り込む。

ラファエの記憶がヴィゴになだれ込んだ。

右腕、左腕となって支えてくれるはずの神が自分を見捨てた。

代わりに議員達が来てくれたから助かったものの。

魔王に天界を乗っ取られるところだったのだ。

それ以来、議員達に頭が上がらなくなり、いつしか実権は議員が握るようになっていた。

情けない王。

それは自分でもよくわかっていた。

唯一愛したロクサー又はロキに奪われた。

私を愛してくれる者なぞいない。私は一人ぼっちだ。

・・・誰が信じる？天界の王が孤独なぞ。

第十三話

ヴィゴの後ろに真つ黒のもやもやが現れた。それは次第に形作り始め、大蛇になった。

大蛇はヴィゴの周りを守るようにとぐるをまいた。ヴィゴは苦しみもだえ地面にうずくまった。

「おお。腐れ神だ。とうとう現れた。」

「その男を殺そう、そうすれば我々が飼い主となる。」男たちは口ーブから剣を取り出し、呪文を唱え始めた。

大蛇はもだえ、激しくのたうちまわる。

多分、腐れ神を少し遠ざける呪文なのだろう。

大蛇はヴィゴから離れ、議員達はチャンスとばかりに3人で剣をかが、ヴィゴを刺そうとした。

「ソイツに手を出すな！」

飛び出したライドがヴィゴをかばい、議員達の剣はライドの腹をつらぬいた。

ライドの腹からは銀色の血が流れ出る。

「・・・コイツ。なぜ銀色の血なのだ？」

もしや、天界の者なのか？

虚無に投げ落とした・・・醜神・・・。」

議員達はライドを見下ろした。

・・・生かしておくわけにはいかない。
醜神など。

再度、ライドに向かって剣を振り下ろそうとする。

その時突然、ヴィゴが顔を上げた。

「・・・ああ、わかったよ。ラファエ。確かにヒドイ世の中だ。・・・」

・全員・・・死ねばいい。腐れ神よ。ラファエに力を貸してやれ。」
ヴィゴは冷たくつぶやいた。

呪文の解けた大蛇が体の半分以上もある大口を開け、巨大な牙をむいた。

そして議員の首に喰らいついた。

首から大量の血がほとばしり議員は痙攣しながら地面に倒れた。

ヴィゴの中のラファエがいった。

（腐れ神よ、喰いまくったらいいいよ。ボクが新しい飼い主だ。もつともつとあるからね。もつともつと大きくなればいい。）

この世界には君へのご馳走で溢れている。）

ヴィゴの顔はロキの恐ろしい形相そのままだった。

ライドは血の出る腹を押さえ、ラファエに促され議員を喰い始めたヴィゴを見つめていた。

腐れ神はラファエを選んだ。

そして・・・ヴィゴはラファエに操られるだろう。

このままヴィゴに喰われても仕方ない。

そして自分の血が天界の者という意味を持つ銀色だというコトに驚いていた。

大蛇はライドに向かって大口を空けたが、喰う素振りは見せなかった。

急に嵐がおさまり、落ち着いたのもつかの間、ヘブンハレブンから真っ赤な血が流れ始め天使達はおびえた。
かけつけたルーは驚いた。

「私が中を見える。天界人は血なぞ持たない。
人間かなにかが紛れ込んで殺しあってるのだろう。見るな。穢れるぞ。」

そっ、ルーはヘブンハレブンに飛び込んだ。

恐ろしい緑色の男が腹を押さえていた。銀色の血がほとばしっている。

「コイツは何者だ？・・・天界人なのか？」

ライドは腹をおさえ足を引きずりながら外に出て行った。

誰も止めるものはなかった。声すらかけなかった。

我に返ったルーはヴィゴに駆け寄った。

「ヴィゴ、大丈夫か？」

ヴィゴは体中血だらけで涙が頬をつたって流れている。

「ヴィゴ。大丈夫か？先ほどのもの、何者だ？人間を殺しやがったのか？」

「・・・喰いたくなんかない。・・・喰いたくなんかないのに・・・」

「ヴィゴがうわごとのように何かつぶやいていた。」

「ルー・・・オレを・・・殺してくれ。」

「・・・かわいそうに。人間が喰われているところを見てしまったのだらう。」

さっきの緑の男。捕まえなければ。私は何をボーっとしていたのだらう。

ルーはヴィゴに眠りの魔法をかけた。

ヴィゴは前のめりで床に倒れる。

「忘れるんだな・・・。」ルーはヴィゴを担ぎ上げた。

「しかし、こんなに忌まわしい血は初めてだ。」

とにかくはやく陸に避難せねば。」

ルーがハレブンの外に出ると天使達が心配そうにいかだを近寄らせてくる。

その天使の一人が代表して言いにくそうに話しはじめた。

「我々の見間違いかも知れませんが、この建物の中に議員様達は入って行かれました。その後は・・・誰も入られてません。」

もし血があるとしたら、議員様が怪我をされたのでしょうか。」

「ありえん、議員様は神だぞ？汚らわしい赤い血のはずがないではないか？」ルーは少し怒った口調で言った。

（侮辱にも程がある。）

あたりは気まずい空気が流れた。

すると美しい鳥がルーの肩に舞い降りた。

「ルー様、天界の収縮が止まりました。」

ヤタガラスからの報告です。

皆の前に出るのは恥ずかしいと言うので私が代わりに知らせに参りました。

王が現れたのです。」

ルーは満足げに頷いた。

「やはり、ヴィゴか。神界が認めたのだ。この男こそ王。新しい時代が来る。王就任式の準備をしる。こんな時に議員達はどこに行かれたのだろうか？」ルーはあきれたように言った。

眠っているヴィゴをよそ目に天界は大忙しになった。

かなり海面が上昇し、折れてしまった白い塔はすっぽりと海に飲み込まれていた。

海に沈んでしまった街を置き去りにするしかなく、何世紀も前に捨てた陸を目指した。

植物も生えず、神のオーラも感じられない不毛の土地として陸を捨て、海を選んだ天界人たちは改めて陸に行き驚いた。

美しい緑が溢れ、小鳥達がさえずっている。

海でのあの嵐が嘘のように空は晴れ渡っていた。

ルーたちはテントをいくつも張り、その一つにヴィゴを運んだ。

ヴィゴはルーに抱えられ、死んだように眠っている。

ヴィゴは夢の中でもう、子供でなく大人のラファエに会った。

美しい顔立ちの彼はどこか淋しげな表情をしていた。

「あんたがラファエ・・・様なんだな？」

(・・・私の息子だ。やっと正しい名でよんでもらえた・・・)
数時間後ヴィゴはキレイなベッドで目を覚ました。

美しい女が手に水を持って現れた。

「お目覚めですか？王」

ヴィゴは女を恐ろしげに見ると、水を一気に飲み干し、むせた。

「ゴホっげふっおえっ」

天界に似つかわしくない下品な音が響く。

女は聞こえないふりをし、ヴィゴは気まずくベッドの上に縮こまった。

ルーが部屋に入ってきた。

「ヴィゴ殿。お目覚めか。」

ここは天界です。貴方のおかげで天界の収縮が止まりました。

貴方は天界に選ばれた。王となられたのです。」

ヴィゴは少し思い出してきた。

顔がじよじよにこわばっていく。

「・・・そうだ。オレ。変な幻影を見せられて。混乱してそれで・・・」

そこまで言うと、なんだか吐き気がこみ上げてきた。

世話役の女が駆け込んできて、ヴィゴの背中をさする。

「・・・ありがと。もういいよ。・・・もういいって。オレに触るな！」

ヴィゴは女に怒鳴りつけ、「・・・ゴメン。」とつぶやいた。

ルーは女を下がらせ、ヴィゴの横に座った。

「あれほどの目に会えば誰でも混乱する。」

ルーはやさしくヴィゴの髪をかきあげた。

「貴方は天界の王に選ばれた。自信を持つんだ。」

「なんだかぼうつとしてるよ。頭に霧がかかったみたいで。

なんでオレなんかが王なんだよ。プリュキトスなのに。」ヴィゴは外を眺めた。

「コレが天界？陸は滅びたんじゃなかったのか？あの趣味の悪い真つ白の塔は？」

「指輪が盗み出された時、真つ二つに折れました。」

それより悪魔界からアビリルが追いかけて来ました、たった一人で。

「アビリル？」

「ああ、貴方にとっては静香でしたね。」

「・・・やめてくれ。会いたくないよ。」

「しかし・・・。」

「・・・アンタが幸せにしてやれよ。好きなんだろう？」

「・・・。」ルーは世話役の女を呼び、伝言した。

「とにかく戴冠式は済ませていただかないと。」

ルーは今後の予定をとうとうと話し始め、ヴィゴはほとんど聞いてなかった。

（・・・静香。ごめんな。）

女は困惑した表情で静香の元を訪れた。

「アビリル様。・・・言にくいのですが。」

王は会いたくないと。」

「わかったわ。ありがとう。お願い、一人にして。」静香は女に微笑んでみせた。

戴冠式の時間が来て鐘の音がとどいた。

議員達はどこを探してもいず、ルーはこれ以上儀式を後伸ばしにしては、と議員抜きで執り行うことにした。

静香は泣きはらした顔を隠すようにローブをかぶり、天使たちの間にもぐりこんだ。

ヴィゴがルーに案内され祭壇に近づく。

急遽、廃墟となっていた教会から持ち出された祭壇は真つ青な空の下、緑の草むらの中に置くしかなかった。

「本来の王が来られたのだ。新しい天界が始まる。」

天使たちはヴィゴを見て喜びに湧いていた。

彼らの本音は議員達にほとんど愛想がついてたのだ。

ただ、ヴィゴの表情はとても疲れていて辛そうだった。

ヴィゴは感情を押し殺し必死で笑顔を作ってるように見えた。

ルーはヴィゴを気にながらも儀式を淡々と行った。

ヴィゴが王の杯を受けた瞬間、鳥たちは喜びの歌を歌った。

ヴィゴはその夜の宴会に参加することなく一人ですごした。

空には星が戻り、軽やかな微風が頬をくすぐる。

海は何事もなかったかのように静かにしている。

宴会の音楽が風に乗って聞こえてくる。

楽しいはずなのに、今までにないほどヴィゴは孤独だった。

（ライド……。オレをかばって刺されたんだ。）それだけは覚えていた。

ヴィゴは我知らず歌を口ずさんでいた。ライドに教えてもらった歌だった。

涙がとめどなく溢れ、嗚咽が漏れる。

（アイツ、母親を殺しやがって……。）

忘れたかった。

でも心の何かがささやき続けている。

耳をふさいでも聞こえてくる。

呪いの言葉。

ヴィゴは気を取りなおし、空を見上げた。

「・・・ヴィゴ？」突然静香の声がした。

テントの窓から聞こえてくる。

「・・・静香なのか？」

「・・・歌声が聞こえたから。宴会には来ないし、心配で。」

「・・・ああ。オレより静香は大丈夫なのか？」

「うん。・・・はいつていい？」

「・・・やめたほうがいい。オレ達もう会わないほうがいい。・・・人間界に帰れよ。ルーに頼んでやるから。」

風にのって静香の香水の香りが漂ってくる。

・・・すぐ、近くにいるんだ。

会いにくるな、といいつつ、ヴィゴは外に飛び出した。

静香は驚いたように立ち尽くす。

ヴィゴは静香を抱きしめた。

「会わないほうがいいんだよ。オレ達。

アンタが記憶を失くしてるのがせめてもの救いだ。」

そっついながらもヴィゴは静香を抱きしめ、キスをしていた。

「ルーと幸せに暮らせばいい。オレのことは忘れて」

そっついながらもキスをはやめられなかった。

静香はキスをされ抱きしめられながら、とうとう記憶が戻るのを感じた。

はらはらと涙が流れる。

「・・・ヴィゴ。愛してる。ルーのことなんて、持ち出さないで。」

「・・・ごめん。」

「・・・ヴィゴ、くすぐったいから。そこは鼻よ。」

「ゴメン、暗くって見えないんだよ。

でも明るいトコじゃイヤだろう？」

「そっでもないわ。」

静香がいたずらっぽく微笑み、ヴィゴは静香を抱き上げた。

「・・・星に見られる。」

「・・・見ればいいわ。早く抱いてよ。」

ヴィゴは静香に記憶が戻ったのを感じた。

だが、あえて言わなかった。静香も同じ気持ちだろう。

今があれば、記憶なんてどうでもいい。

オレ達はオレ達だ。

星空の下で静香は確実に自分の中に新しい生命が宿るのを感じた。

静香はほほえんだ。

「・・・イロイロあるけど、この世は素晴らしいわ。」

ヴィゴの心で何かが呪いの言葉を吐いた。

そんな言葉もどうでもよかった。

ヴィゴは静かに歌いはじめた。

ライドに教えてもらった歌。

歌いながら、ヴィゴは少し泣いた。

静香は「相変わらずへたくそねえ。」と言いながらヴィゴの胸に顔をうずめる。

ヴィゴは髪をなで、髪の香りをかいだ。

静香が合わせて歌い、歌声は優しく、そして心に響いた。

朝になり、いつの間にか寝てしまった静香はベッドに移されてることに気づいた。

・・・ああ、幸せ。

またヴィゴの事思い出せた。

誰かが入ってきて静香は「ヴィゴ？おはよう。あのね！」と話しかけた。

そこにはルーが立っていた。

「・・・ああ、ルー。おはよう。ヴィゴは？」

「王が……。見当たらないのです。」

「ヴィゴが？昨日は一緒にいたのよ。私をここに移したのはヴィゴだわ。」

「……。王と呼んでください。」

「ヴィゴはヴィゴよ。」

静香はルーにそう言い切りルーは驚いた顔をした。

「まさか、記憶が？」

「そうよ。戻ったの。ヴィゴの事思い出したわ。喜んでね。」

ルーは複雑な顔をしていた。

「……。では王はどこに？」ルーは声を震わせて聞く。

「朝ごはんでも探しにいったんじゃないの？」

朝から食欲だけはすごいんだから。

寝ぼけてパン一斤なんて平気で食べるのよ。」

ルーはテントを飛び出した。

「どうしたのよ！！」静香の声が響く。

天使たちを総動員し、ルーは天界を探させた。

ヴィゴには迷惑な話かもしれないが、せつかく王が見つかったのだ。逃げられては困る。

部下の一人がルーを呼んだ。

「ルー様……。ロキ？……を見たものがいます。」

ロキが天界にくるわけない。何があつたのだ？

一人の天使が震えながらルーに話はじめた。

「……。真つ黒の大蛇を後ろに従えた男が、私達夫婦を襲ったのです。男はつぶやいていました。

あつかましくもお前が持っているのか？王の持ち物を！！

指輪を返せ！！

確かに妻は指輪をしていました。

私が海に漂ってきた指輪を拾い、そして妻にあげたのです、

男は妻の指輪をもぎ取り……。なんと恐ろしい……。妻を喰ったのです！！」

「……喰った？」

「あれは口キです。あの目の色！あの表情！」

「口キ？いるわけがない。」

落ち着くんだ。男はどちらにいった？」

「あの山の方へ。あの悪魔め！」

ルーは指差された山の中に入っていった。

そこは小さな滝があり、ヴィゴが手を洗っていた。

そして指には指輪をはめていた。

「……王。こんなところに……。」

探しましたぞ。……何をしておられた？」

「……ああ、ルー。気がついたらここにいたんだ。」

なんだか手が臭くって洗ってたんだ。

それにしてもおかしいよな。隣に静香が寝ていたはずなのに。

でもさ、見つけたんだ。オレの指輪。

いつ見つけたんだろう？」

「……王、テントに戻りましょう。」

「ルー。喜んでくれよ。」

静香の記憶が戻ったんだぞ！

オレさうすごい幸せなんだ。指輪は見つかるし、今日はいいことばつかな。」

「……それはよかった。」

ルーに連れられ、テントに戻ったヴィゴは、静香に得意げに指輪を見せた。

「なんかさ、知らない間に指輪見つけたんだ。なぜか透明だけど。」

静香はルーに聞かされた事を思い出し、顔をこわばらせた。

「指輪が見つかって良かったわね。」

私はいいわ。ヴィゴが持ってたらしいのよ。

また、かわいい指輪買ってもらうから。

今度はすてきな、そうね。ブルガリなんてどう？

それより・・・ヴィゴ。疲れた顔してるわ。大丈夫？」

ヴィゴは静香にキスをした。

「そうだな、オレ、なんかすごい疲れてる。

昨日張り切りすぎたのかな？」ヴィゴは静香に微笑んだ。

「少し寝たら？」静香はヴィゴに優しく言った。

「そうするよ。目が覚めたら横にいてくれよ。

もう離れ離れはイヤだ」

「わかった、私はここにいますわ。いつでもヴィゴと一緒にいますわ。

忘れないで。」

静香はヴィゴのまぶたを閉じさせた。

ヴィゴが寝静まるとルーの元に急いだ。

「ルー。ヴィゴは全く覚えてないらしいの、どういうコト？

それにおかしいの。指輪がキレイな透明になってるのよ。」

「指輪にはラファエが封印されていた。だから濃い紫色になっていた。

ラファエは今、ヴィゴに入っている。

私の考え違いでなければヴィゴ殿は・・・ラファエ様に操られている。」

静香はため息をついた。

「ラファエ様を取り出す方法を探さねば。」

「ヴィゴはどうなるの？見捨てないで。」

「見捨てはしない。せつかく見つけた王だ。

狂われては困る。」

「そんな言い方しないで。王である前にヴィゴなのよ。」

静香は怒って立ち上がった。

静香がヴィゴの様子を見に行くと、ヴィゴは外を眺めていた。

「・・・ヴィゴ？眠れなかったの？」

ヴィゴは振り返り、静香にかけよった。

「どこ行つてたんだよ、側にいてくれって言つたのに。」

「・・・ゴメン。」

「ルーのトコに行つてたのか？」

「・・・そうだけど。」

「何しに!!」

「一体どうしたのよ。・・・痛い、離してよ。ヴィゴ、おかしいよ。」

「ゴメン。」ヴィゴは驚いたように離れた。

「いやな夢を見たんだ。ライドが死ぬ夢。」

「ライド？誰の事？」

「歌を覚えてくれたヤツだ。悪魔界から天界に来るのについてきてくれたんだ。」

怪我してるはずなんだ。オレをかばつて。」

「怪我？大変じゃない！手当てしなきゃ。どんな人？」

「どんな人・・・。ええつとなあ。そうだ。

涼子の家でスターウォーズ見ただらう？

それに出てくるダースモールに似てる。

緑のダースモールだ。」

「ダースモール？・・・ってなんだつたつけ？

ああ、あの毛むくじやらの。」

「違うよ。赤いヤツだよ。静香と涼子、気持ち悪いって騒いでたじやん。」

「・・・あんまり覚えてないけど。
とにかく毛むくじゃらじゃなくて、緑で気持ち悪い人？」

「・・・そんなんでわかるのか？」

「・・・多分ね。ルーに言ってくるわ。」

「オレも行くよ。それよりも、着替えるよ。」

ヴィゴは着替えさせられていたサラサラの服を脱ぎ、ゴミ箱から救出し、ベッドの下に隠しておいた、はいて来たジーンズとＴシャツに着替え始めた。

「こんなフリフリの王子様シャツなんて着てられるかよ。」

「・・・ライドさえ無事なら、今すぐ人間界に帰ろう。」

天界の王なんて冗談じゃない。天界も落ち着いたことだし。

このジーンズ、高かったのに、ゴミ箱になんか捨てやがってさ！うわっ、ナンだコレ？」

ヴィゴの服には議員の赤い血とライドの銀色の血がついていた。

「なんだ、この血。誰のだろう・・・。」

「・・・ヴィゴ。何か変わったことなかった？たとえば・・・そうですね。幻を見たとか。」

ヴィゴはキョトンとした顔をした。

「昨日の夜から今日の朝の話よ。」

「・・・ああ、あの後、外で静香が寝始めたからさ。ベッドまで運んできたんだ。どこでも寝るんだな、静香は。それでオレもその横にもぐりこんでさ。寝ただけだ。」

「じゃあ、その指輪は？」

「・・・そうだな。いつ手に入れたんだろう。」

静香はヴィゴの肩に手を廻した。

ヴィゴにキスされながらも静香は考えていた。

ヘブンハレブンで何があったの？

ライドって人に聞けばわかるかもしれない。

ヴィゴの唇は少し血の味がした。

静香は思わず、身をひいた。

「どうした？オレがこわいのか？何も覚えてないから？」

「・・・ヴィゴのコト、怖いなんて思ってたいわ。」

ヴィゴは静香の肩に頭をもたせる。

ライドの事を聞こうにも、その日は朝からルー達は忙しくしており、ヴィゴ達はほったらかしだった。ただ、部屋の前に幾人もの天使が武装して見張っている。

「・・・なんなんだよ。オレを見張ってるのか？」ヴィゴは不機嫌に言った。

ヴィゴが部屋から顔を出すと、天使たちはおびえたように、お辞儀をする。

それが辛くて、ヴィゴは部屋に閉じこもった。

「人間界に帰りたいよな、ここはつまらないよ。

静香は帰ったら一番に何がしたい？」

「・・・ヴィゴと暮らしたいわ。」

「そうだな。そうしよう。涼子のマンションに部屋が空いてるはずだ。

超ゴージャスだ。・・・忘れてた。オレ、一文なしだったんだ。ま

あいいや。寮に住めばいい。それじゃあ二番目は？」

「そうね、すごく濃いコーヒーが飲みたいかな。」

「それじゃあ、三番目」

「そうね。犬が欲しいわ。名前は・・・」

「ルーにしようよ。そいですっげえハマしたら「ルー！お前はホントに馬鹿だな！」って言うてやるよ。」ヴィゴは笑った。二人は取り留めのない話を話した。

次第に夜になり、静香は疲れてウトウトとした。

眠っちゃいけない。ヴィゴのコト、見てあげてないと。

静香が目を開けると、ヴィゴの姿はなかった。

「・・・ヴィゴ？」

テントの外の見張りの天使が倒れており、首を掻っ切られた後がある。

足元には銀色の血がたくさん流れ出ていた。

「大変・・・。」

静香があわてて探す。

辺りは銀色の血にそまっていた。

ヴィゴは月明かりの下で見張りの天使の肉を喰っていた。

静香が声をかけようとするのをルーがとめる。

「・・・今、ヴィゴに声をかければ・・・。

ヴィゴは傷つくだろう。愛するものに見られた事を。」

「でも・・・止めないと！」

「私達が止める。貴方は隠れてなさい。」

静香が振り返ると天使軍団が控えていた。

手には恐ろしい武器。

・・・ヴィゴ。殺されるわ。

静香が叫ぼうとした時、何かが飛び出した。
緑色の恐ろしい顔をした男。

静香は「醜神様・・・。」とつぶやく。

ルーは静香を見つめた。

「醜神だと？そう言われてみれば・・・。言い伝えどおりの姿だ。」
ルーはライドを見つめた。

「貴方、・・・何者なんだ？」

ライドは何も言わずルーを下がらせ、傷だらけの体でヴィゴに近寄った。

ヴィゴは気にせず、血をすすっている。

「ヴィゴ。止める！」ライドが叫んだ。

ヴィゴははっとし、我にかえた。

「ナンだ・・・。コレ。オレ、何食ってんだ？」

「ラファエの言いなりになるな。闇に勝つんだ。」

ヴィゴは自分の手を月明かりにかざし、血だらけの様子をみた。

「・・・オレが殺しちまったのか？」

「お前は心をコントロールする事を覚えなければいけない。」

「ライドじゃん・・・。大丈夫なのか？あれ、オレなんか怒ってた
気がするんだけど。」

ああ、そうだ。思い出しちゃった・・・。」

ヴィゴがうつむく。

徐々に顔つきがかわっていった。

「貴様、私の妻を殺した！！」

しかし、貴様なぞヴィゴに喰わせられるわけがない。

貴様みたいな青虫野郎！！青臭くて反吐が出るわ！！」

「ラファエ、怒りに飲み込まれるんじゃない。ヴィゴを巻き込むな。」
ヴィゴは抵抗するように手を前に突き出したが、痙攣をおこし、突っ伏した。
ヴィゴはむっくりと起き上がり、その表情はヴィゴのものではなかった。
ルーはつぶやいた。

「ラファエ様？・・・。」

ヴィゴは天界人に向かって罵り始めた。

「私を馬鹿にしてるのだろう？天使どもよ。
私を追放して楽しんだのだろう？」

確かに私は妻ひとり満足させられなかった。

確かに私はロキに嫉妬していた。

ロクサー又はソイツを愛していたのだ。

権力を使い、私がむりやりロクサーと結婚しようとしていた事を彼は知っていた。

ロキは私に文句を言いに来た。女を返せ。

私はバカにしたのだ。お前のようなヤツはそうだな。悪魔界に落ちろ。

ロキを悪魔界に突き落とした後、議員どもが現れた。私情で神を悪魔界に落すなぞ、神界が聞けば黙ってははいまい。

今回の事は目をつぶっておいてやる。

代わりにワシらが天界を勤め上げましようと思し出おった。私はだまされたのだ。

だが、そうまでして手に入れたロクサー又はロキを愛し続けた。

あの子を王に任命したのは・・・。自分の子だと思いたかったのだ。
醜神よ、お前ならひと目でわかつたくせに。議員たちの正体を。

そして運命の神も私を見捨てた。

誰も・・・私を助けてくれなかった。

私は一人ぼっちだった。

・・・私はヴィゴをもらう。ヴィゴは私を見捨てはしない。」
ヴィゴはつぶやくようにいうと、そのまま地面に横たわった。

「・・・ヴィゴ？」

静香がかけよる。ルー達が引き離そうとしても静香は離れなかった。
「あなた達、殺すんでしょ？ヴィゴのコト危険だって思ってるんでしょ？」

いつそのこと、私も一緒に殺して！」

ライドはやさしく声をかけ、ヴィゴから静香を引き離す。

「ヴィゴは殺させない。絶対に。」

ライドが静香を見下ろし、誰もいないテントに連れ込んだ。
ライドは小さな声で言った。

「・・・貴方はヴィゴの子を産まなければいけない。
新しい天界の王だ。貴方には私がついてる。」

「・・・醜神様。」

「当分ヴィゴには会わないほうがいい。子を産むまでは。
言いたくないが・・・ラファエがその子に気づくとまずい事になる。
ふたたび、狙うだろう」

「・・・わかったわ。命に代えてでも無事に産んでみせる」

「頼もしい。ヴィゴの女にふさわしいな。」

どこで産む？人間界か？」

「冗談！人間界なんかで産んだら噂で大学を辞めなきゃいけないわ。」

そうね……。バイセン村に女の人がたくさんいたのを覚えてる。ヴィゴの故郷だから、助けてくれるはずよ。セドリックもマルクスもいるから。」

「決まりだ。今すぐ発て。気づかれる前に。誰か供につけよう。」

静香はヴィゴに最後会いたいと思ったが、あきらめた。

決心が揺るぎそうだったからだ。

「……大丈夫よ、私、天界人なんてキライ。一人の方がマシよ。それよりヴィゴのコト、お願いね。」

静香はバイセン村にむかって旅立った。

「……ライドか？」

気を失って倒れ、そのままベッドに運ばれたヴィゴが辛そうな声を出した。

「ライド、怪我は大丈夫なのか？静香は？こんなオレに愛されて気味悪いだろうな。」

ライドは手を上げ、周りの者達を下げるよう命をだした。

ルーはライドに従った。それが自然なことのように思えたのだ。

ライドはヴィゴに駆け寄り、疲れ果てた顔のヴィゴにひざまずいた。

「静香は元気だ。今は言えないが、あと一年もすれば元気な顔を見せてくれる。」

天界が喜びに溢れる。」

「あと、一年も待たなきゃいけないのか？喜びってナンだ？」

「今はいえない。」

ヴィゴは「いじわるだな」とつぶやいた。

「ルーたちはオレを恐れている。」

それがわかるから、余計に辛い。」

「……恐れられるのは、確かに辛いな。」

「オレ、どうしたらいい？」

ラファエを通して議員達の行いを全部見ちまった。アイツラ、悪魔以下だ。

なんでラファエは止めなかった？

最悪の兵器を人間に与えたコトを知りながら。」

ヴィゴが辛そうにつぶやいた。

「ラファエはあきらめちまったんだ。

・・・冗談じゃないよ。

天界の王に見捨てられた人間たちはどうしたらいいんだ？

とにかく、アンタが来てくれてよかった。

なんだかとても安心するよ。

ずつといてくれ。幻聴がするんだ。

喰え、喰えって。もう、イヤだ。たくさんだよ。」

テントの外で待っていたルーはライドが出てくるなり、「いかがでした？」と聞いた。

ライドは首を振った。

ルーは不安そうにヴィゴの寝ているテントを見つめた。

「私が見張る。あんたは寝ろ」ライドが言った。

夜中、ヴィゴがおきあがり、真っ黒のローブをまとうのをライドは見ていた。

「・・・行くのか？」

ヴィゴはびくつとし、振り返る。

「ああ・・・今のうちに始末つけなきゃ。覚悟決めたら楽になったよ。」

静香によろしく。ルーが新しい恋人だ。オレが認めたって言ってくれ。」

「私もついて行こうか？」

「アンタは天界を見てくれ。オレの代わりに。実際のトコ、ルーは理想論ばかり並べるから鼻につくよ。」

「・・・母親のこと、本当にすまなかった。」

「・・・オレ、思うんだ。

お袋はアンタを見て驚いたって言ってたろ？

アンタのこと、醜神だって気づいたからじゃないか？醜いから驚いたんじゃない。

オレはそう思う。」

「・・・そうかもしれないな。」

「・・・行くよ。・・・あの歌、歌ってくれ。

・・・ライド、歌ってくれよ。」

ヴィゴはテントを出た。

ライドは小さな声で歌を歌う。

改めて歌を聞き、ヴィゴは涙を流した。

母親が作った歌。

オレの為に。

第十四話

ヴィゴは思い残すことはない。
死のう、と思つた。

どこに行こう？

虚無の国には生き物がいる。ライドが言っていた。
それじゃあダメだ。迷惑がかかる。
何にもないところ。

ヴィゴは迷わず虚無の狭間を目指した。
狭間は裁判所と虚無の国の狭間にある。
悪魔界の街、そしてバイセン村の近くを通っていく。

以前は魔方阵で簡単に移動できたのに、今はもう許されなかった。
天界はオレを探しまくるだろう。魔方阵を使うと居場所がばれる。
ヴィゴは歩くしかなかった。

虚無の狭間は永遠に落ち続けるところ。
オレの寿命はどれくらいあるのだろうか。
そんな長い間は落ちなくてすむはずだ。
たぶん、腐れ神が怒り、オレを殺すだろうから。

ヴィゴは月明かりを頼りに山を降り、海岸に出た。
波の音が心地いい。
小さなカニやら小魚がヴィゴに驚いてあわてて逃げていく。
以前の天界にはいなかったモノたちだ。

バシャバシャと波打ち際を歩いてるとふいに心の声が聞こえた。
(ヴィゴ、どこにいくのだ?)

ヴィゴは無視した。

（無視するな、私を！！）

（・・・ラファエ、もういいじゃねえか。）

（どういうコトだ？）

（アンタが思ってるほど、この世は悪くない。

見てみるよ、ほら、新しい生き物が楽しんでる。）

寝ぼけてヴィゴに求愛してくる鳥にヴィゴは軽く笑った。

（戻れ。戻るんだ。お前を乗っ取るのもわけはないんだぞ。）

「・・・アンタには無理だ。」

ヴィゴは声に出して言った。

ヴィゴは海岸沿いを進み悪魔街に行ける塔に向かった。

折れてしまった白い塔の近くにある。

ヴィゴは小さな舟を出し、黒いロープを体に巻きつけこいでいった。

天界の街があつた場所にたどり着くころには朝になっていた。

朝日に照らされた海の中は悲惨な状態だった。

建物は飲み込まれ死体は散乱し、天界にいるはずもない腐鳥が海の上に集まり始めている。

死体が浮かんでくるのを待っているのだろう。

ヴィゴを見て腐鳥はギャーと泣き喚いた。

悪魔街に行ける塔を見つけ、ヴィゴは舟を近づける。

塔の先が少しだけ海面に顔を出していた。

舟から降り、塔の隙間から中に入ろうとした。

足を滑らせ、かなりの距離を転がり落ち、ヴィゴは起き上がった。

「痛つてえ・・・」

驚いたことに海面の下にあるはずの建物の中に水は一滴も入っていない。

悪魔界から腐鳥が入ってきてヴィゴの頭上をけたたましく飛んでいた。

「うっわ。こっから入ってくるんだな」

ヴィゴは突っ伏し、腐鳥の襲撃から身を守った。

ふと、ポケットから転がり出た携帯を拾う。

「まだ、こんなもの、持ってたのか。」

携帯には静香とおそろいで買ったストラップがついていた。

ヴィゴは震える手で携帯を開け、電源を入れる。

待ち受けには静香と2ショットの写真。

静香が勝手に登録したものだった。

メールはホントにくだらない内容だった。

明日のお昼、学食で待ってるケド、えびフライ定食でいい？という静香ののん気なメール。

学園祭の焼きソバチケット10枚つづりを買って言う、涼子と哲平からの脅しのメール。

そのほか、単位が取れるよう、お願いしてくる困った生徒たち。最後にヴィゴが気づかなかったメールも届いていた。

静香からだった。

人間界でバスの事故の直前、あわてて打ったメールのようだった。内容は、簡単なものだった。

「ヴィゴ、愛してる。」

ヴィゴは携帯を抱きしめ、泣いた。

なんでオレ、死ななきゃならない？大事なものを残して？地面につつぷし、ヴィゴはむせび泣いた。

・・・薄暗いライト。

小さなバツクミュージックが流れている。

藤原は目をあげると、そこは飢えるカムだった。一つ目女が忙しげに働いている。

「改造人間撲滅キャンペーンが廃止されたのよ！今日は私のおごりよ！！」

そういうと、バーの悪魔達はわきたった。

横で気を失ってる可奈子と美紀を起こし、バーの奥から出てきた3人に誰も興味がないらしい。

そううつと裏口をあげ、外に出た。

久しぶりの人間界に3人は手を取り合ってつかの間喜び、そして山下が死んでしまった事をおもいだし、おとなしくなった。

人間界の空はぶあつい雲がおおっている。

それは皆の心もおなじようにくもらせた。

「・・・俺、帰るよ。おかんが心配してると思う。」

「そうね。私も・・・お母さんに殺される前におねえちゃんのトコに行くわ。」

多分私達1ヶ月はいなかったから。」

可奈子は美紀を誘い、美紀は喜んでついていった。

案の定、可奈子は涼子にかなり怒られた。

「あんたたち、一週間も家出なんてどういうコト？」

ニュースでは数人の女の子が行方不明になってるし、心配したのよ！」

悪魔界と人間界では時間の流れが違ふようだった。

リビングには静香の写真とヴィゴの写真が遺影のように飾られてい

る。

美紀は何も言わず突然、ヴィゴの写真を取り上げ、抱きしめた。

涼子が「……とビビッていると、

「なんでもないってば。美紀の飼ってた犬にヴィゴが似てるのよ」とわけのわからない言い訳をする。

涼子は「ヴィゴに似てる犬？ふうん。すっごいその犬見てみたい。」と言った。

二人を風呂に入れると、涼子は親に電話する。

「ああ、ママ？可奈子の馬鹿が帰ってきたわ。年頃の子はむつかしいのよ。

心配しないで。当分、うちで預かるわ。

静香はまだ、見つからないわ。ヴィゴもね」

そういうと、電話を切った。

そして静香とヴィゴの写真の前に立った。

「あんた達も早く帰ってきてよ……。」

涼子はつぶやいた。

ロキが人間界に売りに出される。

このニュースは瞬く間に人間界に広まった。

オークション形式でするらしく、全世界各地の中継ポイントでインターネットを使い落札される。

可奈子と美紀は飢えるカムを目指した。

藤原も誘いたかったが、おかんの外出禁止令は思いのほか厳しく、抜け出せずにいたのだ。

「でも参加したところでお金なんかないもん。ロキのタマゴなんて買えないわ……。」

美紀が落ち込む。

可奈子が言いにくそうに小さなバッグから小切手を取り出した。

「お金ならあるわ。ヴィゴから……もらったの。」

「可奈子・・・ホントにもらったの？」美紀は小切手を見てめまいをおこした。

¥10000000000000000

ヴィゴ商店とサインが入っている。

ヴィゴが荒稼ぎした全財産。

「・・・ホントにもらったの？」

「う・・・ん。忘れた。」

美紀に怒られる、と可奈子はしょんぼりしてたが、美紀はあっけらかんとしていた。

「いいじゃない。どうせ天界では使えないんだし。ロキを買いましよう。」

飢えるカムで美紀はロキをゲットし、余ったお金で可奈子は花子を買った。

見るからに残酷そうな男が花子を買おうとし、花子は泣きそうになっっていたからだった。

可奈子に飼ってもらって花子は大喜びだった。

花子はとてもフワフワしていて、真っ白でかわいかった。

「人間さえ食べさせなければこのままの大きさよ。」

飢えるカムの一つ目女は言った。

そして美紀にロキのタマゴを渡した。

「はい、大切に育ててね。ロキが一人前の男になったらまた会いにきてって伝えてよ。」

ベッドを空けて待つてるからって。」

美紀は真っ赤になり、ロキのタマゴを抱きそそくさと店を出た。

可奈子は一つ目女に手をふり、花子を抱きしめ店を出た。

二人は毎日タマゴを暖め、大事に見守る。

花子が時々抱きたがり、美紀はたまにそれをゆるした。

「花子ちゃんも女の子なのね。」

そして可奈子の誕生日の日、可奈子は藤原をクレープパーティーに誘った。

そろそろロキが孵化するころだからだ。

藤原のオカンは「クレープパーティーやて、かわいらしいわあ。この小豆の缶詰もって行き。」といい、外出禁止令が解けたのだ。

藤原は勇んで尋ねてきた。

学校ではあまり二人で話す機会がなく、久しぶりに会った二人はモジモジしていた。

花子は太郎の面影が残ってる藤原にじゃれ付き、耳を少し噛んでしまった。

藤原は耳を押さえながら、「・・・かわいいね。」と言った。

美紀はロキのタマゴを大事にかかえ、「少し散歩してくるね」といい花子をつれて出かけた。

「久しぶりだね。元気だった？」藤原はクレープを焼きながら聞く。
「・・・うん。たまに山下のこと思い出すけど。」可奈子は小さな声でつぶやいた。

「・・・だってファーストキスの相手だもん。」生地を必要以上にこね回しながら可奈子はつぶやく。

「ええ？どこで？」

「あの、マンホールでヴィゴがふんどしに絡まってた時。誤解しないでよ。」

無理矢理だったんだから。

ヴィゴは、そんなのはキスのうちに入らない、・・・マヌケ彼氏にとっておけて。」

「マヌケ彼氏？」

「アンタのことよ。ヴィゴ、私達がつきあってるって思ったみたい。」

「・・・。まさか。ボクなんて・・・。相手にされるわけないのにさ」

藤原は真っ赤になり、クレープは真っ黒になった。

「そうよ。ねえ。失礼だわ！」可奈子も赤くなりながら言った。

突然、美紀が駆け込んできた。

藤原と可奈子は見詰め合っていたのをあわてて離れる。

「大変！ロキが生まれるわ！！」

タマゴが割れ、中から小さなロキがえいやと飛び出した。

ロキはちいさな子供くらいの大きさで、お尻に小さい布をまき、髪の毛はつんつん逆立っていた。

大きく伸びをし、アクビをしていたが、藤原達に気づくと、ロキはふんぞりかえる。

「おう。オレはおそろしいか？」

可奈子は噴出し、藤原は笑いをこらえ、必死で頷いてやった。

美紀はロキを近くに座らせ、顔を拭いてやった。

「ヴィゴも小さい時こんなに可愛かったのかな？一度も抱いたことないから。」

「今からは抱つこできないよね。」

（ナニすんだよ！オレ、ガキじゃねえし！）とか言うよ、きつと。」

美紀は人間を食わず、事情を話し、飢えるカムからベジタリアン用の大豆肉を取り寄せた。

藤原と可奈子の血で支払った。

涼子はロキが見えず、たまにロキの上に座ってしまうこともあった。あわてた美紀が、「ロキ！」と叫び、涼子に「？私は涼子よ」と突っ込まれていた。

笑いでごまかそうとしてる美紀を見て、涼子は

「なんだか、笑った顔がヴィゴに似てるね」と不思議そうに言った。

ある日、空を覆っていた雲が晴れた。

長い間、太陽を見てなかった涼子は大喜びだった。

「これで布団が乾せるわ」

涼子はウキウキと言った。

「何か、状況が変わったのね。」美紀が空を見上げてつぶやく。
ロキが美紀の横に来た。

かなり大きくなり、ヴィゴとさほど変わらない大きさだった。

「・・・ヴィゴ。大丈夫かなあ」

ロキがいつもの通り、飢えるカムにベジタリアン用ご飯を取りに行くと、一つ目女が待ち構えていた。

「天界に王が誕生したんだって。」

ロキはそのニュースを夕食時に美紀に何気なくつぶやいた。

「私の子が？」

急に叫び、立ち上がった美紀を涼子は慣れた顔つきで座らせた。

「はいはい、美紀ちゃん。ご飯食べようね」

「会いたいわ。会いに行かなきゃ。」

美紀が構わずつぶやき、可奈子が「・・・美紀っ静かに！」とつぶやく。

「・・・会いたいわって言葉、お姉ちゃんの前では禁句なのに!!」

突然、涼子が泣き出した。

「・・・私も静香とヴィゴに会いたい。もう限界よ・・・」

「どこに行ってるの？死んだわけでもなく・・・。静香の遺体は見つからず、ヴィゴは藤原君とどこかに出かけてしまった。

藤原君は帰ってきてなんでヴィゴは帰ってこないのよ？

アンタ達、何かに巻き込まれてるの？私には知る権利があるわ。

何日も泊めてあげたんだから。」

「お姉ちゃん・・・。」

可奈子は、信じるわけない、と思いながらも今までの事を話した。
涼子はうつむいて聞いていた。

「静香って親はいないし、生まれた頃の写真も残ってないの。おかしいなって思ってたのよ。」

静香が天使でも生まれ変わりなんでもいい。

生きてさえいてくれれば。でもあの大吃いが天使だなんて信じられないわ。」

涼子は笑った。

「そいでその、ロキって子。ここにいるの？
花子ちゃんも？」涼子はビビリながら聞く。

「うん、お姉ちゃんが今上に座っちゃってるけど・・・。」

涼子のはねのき、花子は伸びをした。

「全く・・・見えないわ。」涼子はつぶやいた。

「あんたたち、これからどうするのよ」

「わかんない。」

「何の為にロキを育てたのよ？」

ヴィゴに会いにいきなよ。」

「無理よ。悪魔界になんて行けないわ。ものすごくお金がかかるんだもん。」

3人分なんて到底払えない。」

「一人いくらなの？」

可奈子が飢えるカムの女に聞いてきたところによると、一人1億だった。

「一人分くらい払ってあげるわ。」涼子と言う。

「私、こう見えても商才あるんだから」

FXで小遣いを何倍もにした涼子は偉そうにいう。

「一人って美紀だけ行くの？」

「ロキは？ロキも行きたいでしょ？」

「そうだな。アイツが天界で窮屈で死にそうになってるのは見物だろうな」

不思議な事にロキは人間を喰わないようになってから記憶が日に日に戻っていた。

いまでは自分が神だったことも覚えている。

可奈子は考え込んだ。

「私も山下もロキも悪魔界に行く時、お金なんてかからなかった。藤原は払ったみたいだけど。なんでだろ？」

「そうそう、喰らうメイトの裁判に出なきゃって言ってたんだ。」

「喰らうメイト？」涼子は耳慣れない言葉に顔をしかめる。

「うん、藤原がね。ドラゴンとロキに同時に喰らうメイトになって悪魔界に逃げ込んだんだって。」

それを追いかけて私達が行ったの。出廷したとでもいうのかなあ。」

「それ、いいんじゃない？」涼子が言った。

「また、藤原君には悪いけど、その、「喰らうメイト」になって悪魔界に逃げてもらえば？一人分なら払ってあげれるし。どう？」

美紀は勢いよく立ち上がった。

「そうね、そうしましょう。」

今日新聞の広告に「悪魔セールのお知らせ」が載っていた。

普通の人なら見落とすくらいの大きさ。

いやな予感がした。

藤原は新聞をたたんだ。

その時、頭上からラッパの音と共に、ココナッツを胸に当て、腰みのをつけハワイアンスタイルの悪魔が舞い降りてきた。

体型は太ったパグを思わせ、顔は幼稚園の芋ほりでしか出くわさないいびつな形の芋に似ていた。

どこことなく見覚えのある姿に藤原はココアをふきだした。

「はい、藤原はん。喰らうメイトですわあ。」

ケルベロスさん、ロキさんがたった今同時に、藤原食って来いと命令されはったところです」

ソイツは藤原をみて不思議そうにこう言った。

「あんさん、どっかで会ったかいなあ？」

「あははは・・・ははははは・・・」

・・・なんで？」

藤原は力なくつぶやいた。

「知りませんがな。お宅に恨みでも持ったはるんでしょう。」

とにかく、どちらか選んで喰われなはれ！ほな、よろしゅうに！」
その時電話がなった。

電話にかけてある、おかんお手製のかわいいレース編みをひっぺはがし、電話を取る。

「・・・もしもし」

「ああ、藤原？私。可奈子。」

うまく喰らうメイトになったわね。

もうすぐ花子連れていくから、逃げる準備しておいてよね。」

藤原は電話口に座り込んだ。

喰らうメイト・・・。悪夢がよみがえる。

電話を置いた途端、また、鳴り響く。

美紀だった。

「ごめんね。お願い。うまく逃げて。」

おかんが後ろから声をかける。

「あんた、可奈子ちゃん来はったよ。」

藤原はおかんの顔をしばし、眺める。

「・・・マズイ。」

そして風呂場の小さな窓から飛び出た。

可奈子がつまらなそうに玄関でうろうろしている。

おかんには見えるハズはない。

たてがみをなびかせてるあのケルベロス。大きさはラブラドールくらいだが、恐ろしい牙に大蛇の尻尾。

そして首には真つ赤なりボンが結ばれていた。

藤原はヘブンデイズに向かって走り始め、真正面に美紀を見つけ、すっころんだ。

美紀の横にロキが歩いていた。

以前よりかなり体格は小さく、ヴィゴさんによく似ていた。

以前に比べて顔がかなり優しくなっていた。

美紀が手をふった。

「おい、藤原さん!!」

あわわわ。

喰われる・・・。

藤原はダッシュしたが、ロキにかなうわけもなく、簡単につかまった。

「またこのバカ人間を喰えってか？美紀？」

「バカ人間じゃないわ。藤原さんよ。食べちゃダメよ」

美紀はにっこり微笑んだ。

「うまく喰らうメイトできたわ。

はい、これチケット。ゴンドラに乗らなくちゃ行けないでしょ？」

「・・・。悪魔界に逃げ込めってことですか・・・。」

「うん、そう。私達追いかけていくわ。」

悪魔界に行けば天界のヴィゴの噂、聞けるかもしれない。」

ロキが大口を開けたので、藤原はすっころんだ。

飢えるカムに飛び込み、一つ目女に「またアンタ？」と笑われる。

「そんなあわてていなくていいわ。って、もう行っちゃった。」

藤原は慣れた手つきでゴンドラを操縦し悪魔界を目指した。

悪魔界はなぜかお祭り騒ぎだった。

太郎と再合体した藤原はあわててカーニバルの群れから身を隠す。

改造人間が自分たちの体の機械を見せながら歩いている。

中にはロバートやサラもうれしそうに歩いていた。

モルボイも空飛ぶ円盤を腰から下につけ、ひゅんひゅんと、飛び回っている。

「ロバート!!」藤原が声をかけ、二人を驚かせた。

「藤原か。久しぶりだな。また喰らうメイトだろう? 新聞はその話題で持ちきりだ。」

あきれた顔のロバートに藤原は説明した。

「ロキが人間も食わず、ベジタリアンとは信じられんな。神帰りも夢じゃないぞ。」

そうだ! ニュースだ! 天界に新しい王が誕生した。驚くぞ!!

なんと・・・ヴィゴだ。」

藤原は知っていたが、ロバートが得意そうなので、「えええ!!」
と言っておいた。

「なんでパレードをしてるんですか?」

藤原はロバートのハワイ風の腰みのを呆れ顔に見つめ、つぶやいた。

「ああ、これか? 今悪魔界で流行ってるんだ。ハワイアンがテーマ

だそうだ。

メルメロン商店の商品。ヴィゴ商店が潰れちまった今、メルメロンが牛耳っている。」

「ヴィゴさんが聞けば悔しがらるだろうな」と藤原はつぶやき、サラと微笑み合った。

「改造人間が認められた。悪魔界の教会が正式に私達の村になる。それに天界では我々の技術が必要としている。なにせ建てなきゃならない建物がたくさんあるんだからな。それ相当の報酬ももらえるし。見ている！今に悪魔界一の街にしてみせる！！」

「ヴィゴさんも喜んでくれるでしょうね。」藤原は言った。

「そうだな……。いつか、来てくれるだろう。彼がメルメロンに勝ち続けさせるわけがない。」腰みのをふりながらロバートは言った。

稲妻もあれだけ、改造人間を馬鹿にしてたくせにちゃっかりパレードには参加していた。

タワシとスリッパがくつついた便利グッズを宣伝しながら。

「ああ、藤原！久しぶりだ。この商品さ。メルメロンは置きたくないそうだ。」

藤原、いらない？」

「多分、スリッパとタワシって履きづらさに問題があると思うよ」

「マジ？頭いいな。じゃあタワシと長靴をくつつけてみよう」

藤原は（タワシは変えないんだな。それにしても稲妻って案外ヴィゴさんというチーム組めるかも。なんだか発想が……。似てる。）と思った。

「だめだよ、藤原、ちゃんと逃げないと。」聞き覚えのある声がする。

可奈子だった。

「喰うぞ！！」ロキが笑いながら言う。

美紀が「ゴメンゴメン、ロキ、ひどいこと言わないでよ。とにかく魔王に会いに行きましょう。」と言った。

ロキと美紀が幸せそうに並んで歩いていく。

楽しげに騒ぐ街をヴィゴはびしょぬれになりながら足早に進んだ。
やはり塔の下の方は海水がたまっており、悪魔界に来る為に少しもぐらなければいけなかったのだ。

（なんだ？この騒ぎは？）ヴィゴはつぶやく。

悪魔達の視線の先を見て、ヴィゴは思わず叫びそうになる。

（親父！！）

だが、ヴィゴの知ってるロキではなかった。

猛々しい表情はなく、どこかイタズラっぽい表情に変わっている。

盛り上がる筋肉も見られず、体格はヴィゴとそっくりだった。

ロキは神の一人だというコトが、ヴィゴには今、納得できた。

そして側を美紀が歩いている。

オレの母親だった女性。

ヴィゴは食い入るように見つめた。

ラファエが心で何か叫んでいたが、ヴィゴはそれどころではなかった。

自分の両親を目に焼き付けたかった。

二人はとても幸せそうだった。

今、ここから飛び出し、二人にいきさつを話せば？

もしかして力を貸してくれるかもしれない。

だってオレの両親なんだから。

ヴィゴは駆け寄りたい気持ちを必死で抑えた。

わかっていたのだ。

・・・あそこにオレの居場所はない。

二人を困らせるだけだ。

ラファエは喚き続けたが、ヴィゴは無視した。

（逃げるのか？親父に復讐してやればいい。お前を捨てた母親を罵ってやればいいんだ。）

ヴィゴは逃げるようにその場を去った。

藤原は視線を感じて振り返ったが、そこには黒いローブの男が隠れるように逃げていくのが見えただけだった。

「あれ？ヴィゴさん？」

可奈子が「藤原！花子抑えててよ。逃げちゃう。悪魔界が怖いだよ。悪魔のクセに！！」

ヴィゴさんだなんてそんな訳ないよ。気のせいかな。

藤原は花子を押さえに行った。

「大丈夫だよ、太郎もついてる。」

ヴィゴさんがこんなところにいるはずない。

天界の王になるんだから

「ロキ、再び喰らうメイト。街にカムバック」と書いた新聞をヴィ

ゴは思わず奪い取った。

「なにすんだ！コイツ！」

ヴィゴにつかみかかろうとする露天商のグールはヴィゴの目を見て恐怖にたじろいだ。

「ナンだ？あの男・・・やばいぞ。殺されるかと思った。」

藤原が再びターゲットになっているのを見てヴィゴは軽く笑った。

（運の悪いというか、いいヤツ、というか。）

飼い主が美紀。

そして対する悪魔は花子。飼い主は可奈子。）

グールはヴィゴに話しかけた。

「・・・あんさん、ロキに恨みを持つてる一人か？無理無理。今度のロキは違う。

ありゃ、人間を一人も喰ってない。

なんでも天界に出向いて神の位に戻してもらいに来たらしいぞ。」

ヴィゴはグールを見つめた。

「どういうことだ？」

「知らん。神に戻りたいんやろ。

悪魔が人間も喰わずによく我慢してこれたよ。魔王も驚いてるらしい。」

（ロキが神に戻る？笑わせるな！）ラファエが叫んだ。

急に顔つきが変わったヴィゴをグールはクワバラクワバラと、その場をさった。

ロキが神に戻る。ということとは？

オレの中の悪魔の血がなくなるってことか？

（なくなるものか。お前は天使の肉を喰っている。）ラファエはのしった。

ヴィゴはローブをより一層かき寄せた。

ロキ達がむかった魔王の浮遊城は今、改造人間たちによって修理中だった。

魔王ははりきっていた。

魔王の長虫が死に、その魂が魔王のところに還ってきて驚くべき報告。

ヴィゴが天界の王になるというのだ。

そして今、魔王は天界を乗っ取る作戦を立てていた真っ最中だった。ベルセルクが窓からロキ達が歩いてくるのを発見し、魔王に報告した。

（ロキ！あやまりにきおったのか？）魔王は、はめていた双眼鏡を丁寧に外しロキを迎え入れた。美紀達は城の外で待っている。

「ああ、ロキ。久しぶりだ。」魔王は大げさに感動してみせた。

「ナンだコレ？」

ロキは丁寧にクーパーで色分けされている地図をベルセルクから奪い取った。

「天界をのつとるつもりか？」ロキはあきれて言った。

魔王は誇らしげに答える。

「・・・そうだ。今はヴィゴが王。チャンスだ。天界は・・・私のモノだ！！」

「ふうん、魔王らしい発言じゃないか！一体どうした？天界に媚びるのをやめたのか？」

「ヴィゴに恨みがある。一緒に天界を治めようと言ったが、イヤだといひよった。」

「そりゃウチの息子が失礼したな。」

「私は議員ドモの秘密を突き止めたのだ。」

あいつら、人間との合体生物だった。

合体センターの帳簿を調べさせた。

ルーとかいう堅物の天使に教えてやったら腰を抜かしよったわ。

ロキ、昔、お前が天界から追い出されたとき、お供についてきた神3人を合体センターに売りつけただろう？議員どもはそれを材料に合体したらしいぞ。

天界はお前を突き出すよう要求してきている。

というコトでお前を天界に渡す。

もしくは私と天界を乗っ取る、どっちがいい？」

「オレは悪魔界の方が性にあってるんだが」

「じゃあ、共に天界を乗っ取ろう。」

「アンタ、結局誰でもいいんだな」ロキは少し呆れ、城を出た。
理由はともあれ正式に天界から呼び出しがかったのだ。
ロキは美紀達を連れ天界を目指した。

第十五話

街を離れ砂漠を歩き出したヴィゴは腐鳥を捕まえ、がつつとそのまま食べるしかなかった。

（やつぱりお前は悪魔だ。）ラファエは笑って言った。

（腐れ神にも何か喰わせる。街に戻れ。悪魔でも構わん。）
そついうラファエをヴィゴは無視した。

砂漠の砂に足をとられ、何度も転んだ。

エサエサとわめくあり地獄たちも、ヴィゴの後ろに控えている大蛇に遠慮して手も出さない。

何日も歩き続け、山を登り、そして下った。

ドラゴンに乗ったときはあつという間だった山が、歩きでは途方もないほど困難を極めた。

遠回りになるとわかっていてなぜか立ち寄ってしまったバイセン村は、とてもにぎやかだった。

ちょうど静香が無事バイセン村に着き、子供ができたお祝いをしていたのだ。

セドリツクの吹く喜びの笛の音は腐鳥を引きちぎりながら食べてるヴィゴの耳に悲しく響いた。

「オレがいなくても、皆、たのしくやってる。誰かに子が出来たんだ。」

（女のおいがする。お前がこの間、抱いた女。いい女だったな。会いに行かなくていいのか？喜ぶぞ？）

「静香が？バイセン村に？」
ヴィゴは我を忘れた。

思わず、村に近寄る。

見慣れた光景が目飛び込んできた。

一人の女が妊娠した印のマントを羽織っていた。
誰なのかは見えなかったが。

（迷わず、会いに行けばいい。

女を抱けばいい。お前の選択次第だ。

自分ひとり、被害者妄想にとりつかれてるだけじゃないか？
本当は死ななくてもいいのだ。誰に命令されたわけでもない。
お前が勝手に思い込んでるだけなんだ）

オレが思い込んでるだけなのか？
でも・・・ライドは止めなかった。

（あの男、天界が欲しかっただけだ。
お前に任され、今頃は好き勝手にやってるだろう）

ヴィゴの足はバイセン村に向かいはじめた。
一步一步、引きずるように。

そして妊娠した女が静香であることを見たのだ。

「静香が？子供ができたのか？オレの・・・オレの子だ。」

（よかったじゃないか。なおのこと、一緒にいてやらねば。）
「ああ、・・・そうだな。」ヴィゴは食い入るように静香を見つめた。

ヴィゴは思わず小屋の近くまで駆け寄った。
静香の楽しい笑い声が耳に響く。
ヴィゴは思わず叫びそうになった。

・・・今すぐ、この手で抱きしめてやらなくちゃ。

ヴィゴは静香のところに行こうと顔をおおっていたフードを上げる。その時手に持っていた腐鳥の食いさしの骨が頬を傷つけた。ヴィゴは驚いたように、その食いさしを眺めた。

「これは・・・。オレが喰ってたヤツだ。」

（それがどうした、はやく会いにいつてやれ）

「・・・行けない。こんなもの喰ってるヤツがこのこ現れても怖がらせるだけだ」

（なぜ？お前には責任があるぞ。彼女に対してな！

そうだ。取引をしよう。私はアンタから身を引く。ただ子が生まれたとき名前をつけさせてくれ。）

「・・・アンタ。オレの子にまで手を出すつもりなのか？

・・・はつきりしたよ。アンタはウソばっかだ。

生まれてくる子のためにもオレはきちんとケリをつけなきゃいけない。」

ヴィゴは突然、顔を上げた。

「オレには大事なものがたくさんあった。

それを全部捨ててオレはアンタに最後までつきあってやる。」

静香は何か聞こえた気がし、振り返った。

しかし、そこには木が風で揺れているだけだった。

「あなたのお父さんの声が聞こえた気がするわ。あなたには聞こえ

た？」

静香はお腹の子に向かって話しかけた。

「会いたいわ。あなたを連れて行ったら、ヴィゴはびっくりするわ、きつと！」

ヴィゴはバイセン村を振り返らなかった。

ラファエがどんなになだめようが、脅そうが、耳をかさなかった。ヴィゴは心を閉ざした。

感情のなくなったヴィゴにラファエは何を言っても無駄だった。

死者の森を歩き続け、壊れてしまった天界への塔を懐かしげに見上げ、なお奥に突き進んでいく。

とうとうヴィゴは裁判所の橋にさしかかった。

轟々と炎がもえさかり、今から裁判を受けようとするものたちが緊張の面持ちでトロールに賄賂を渡している。そういえば、確かココでオオカミに襲われた。

オレの腕の入れ墨を確認しに来たのだ。

・・・ペロ。

アイツ、何者なんだろう。今となればどうでもいいことだった。

ヴィゴが橋の上に立ち、下を見下ろした。

真っ黒の闇が広がっている。

コレで終わる。

ラファエは泣き叫んでおり、腐れ神が最後の手段としてヴィゴを喰おうと大口を開けていた。

しかしヴィゴは気にもせず虚無の狭間を見下ろせる岩に座り込んだ。体がふつと軽くなった気がしたのだ。

・・・なんだろう？

「決心がつかないのか？」

ヴィゴは振り返り、いつのまにか近くに座っているオオカミを見た。
「・・・そうじゃない。何か、オレのなかで変わった気がする。なんだろう？」

「たった今、ロキが神にもどった。醜神が許しを出したのだ。お前から墮神の血が消え去った。」

オオカミが言った。

「プリユキトスでなくなったのか？」

「そうだ。ラファエはお前をもはやあやつれまい。それでも死ぬつもりか？」

「ラファエはオレをあやつれない？」

「そうだ。ラファエはアンタから出て、一人で虚無の狭間に落ちればよい。」

腐れ神は神界に帰るだろう。アンタはラファエをココまで運んできた。

もう役目は済んだのだ。

ラファエは愚かだ。

自分の右腕、左腕となるものがいなくなったのであれば、探すべきだった。

探す気があればすぐに見つかるのに。

あきらめたのだ。議員達が現れ、責任から逃れられるとホッとした

のだろう。

疑いもせず議員の言いなりになりおった。

議員達は頭がいい。

人間に新しい太陽の存在を教えた時、必要のない数式を設計図の中にもぐりこませたのだ。

人間が疑いもせず、設計図通りに太陽を作った。

その数式は太陽が一つ、二つのころは何の意味も持たない。

しかし数が増えるに従い、その数式は意味を持つてくる。

簡単に言えばある程度の数になると起動し始めるウイルスだ。

彼らはある数に達すると共鳴し、意思を持つ。

まちがいなく人間は支配下におかれる。

後は滅びるのを待つだけ。愚かな人間達よ。

何も知らず、せつせと作りつつおって。

ラファエはロクサーヌの時も情けなかった。

ロキを追い出したりせず、男として堂々と勝負すればよかったのだ。思い出した今も悔いることもなく、苦しい記憶としてなお、天界を苦しめる。

そしてヴィゴ、お前まで。

神界からの命令だ。

ラファエよ、ヴィゴから出て自分の罪を背負い虚無に落ちるがよい。

「

ヴィゴの心まで凍ってしまいそんなほどのラファエの孤独感が感じられた。

「ヴィゴ、選ぶまでもないぞ。早く吐き出せ。」

（・・・お前まで、私を見捨てるのか？）ラファエは声を震わせた。

「・・・わかったよ、ラファエ。友達として、オレはアンタに最後までつきあってやる。」

お前の罪もオレがひきつけてやるよ。」

オオカミはヴィゴを見つめた。

「・・・いいのか？」

「ああ、決めたことだ。」

でもな、ペロ。

人間全員がバカじゃない。

人間滅亡を食い止める奴等がきつと出てくるはずだ。

オレはそう信じてる。」

ヴィゴは藤原や可奈子を思った。

「・・・ラファエ、行くぞ。」

ヴィゴは岩から身を躍らせ、真っ黒な虚無に飲み込まれていった。

天界で美紀はライドに抱きついた。

「虚無で見たとき、ひと目でわかったの。」

驚いたわ。ラファエ様の右腕として活躍するハズの醜神様がなんで？って。

左腕となるはずの運命の神様も行方不明でラファエ様は困ってらし

たのよ。

運命の神は何かと合体させられてるはずよ。

見られて恥ずかしいから皆の前から姿を消したの。

彼も探しだして、元に戻してあげないと。

・・・ヴィゴが死んでしまった今、あなたがヴィゴの代わりに天界を治めてくれるなんてうれしいわ。」

ライドはブツブツあやまったが、美紀は聞かなかった。

「あなたのおかげで人間界に行けたの。

お兄ちゃんにも会えたし、ロキにも。

可奈子にも藤原君にも、そしてヴィゴにもね。」

静香がヴィゴの子を妊娠してる事を知りロクサー又は大喜びした。

「私も育てさせてもらってもいい？アビリルと二人で。」

ライドは「それはいい。私のこの顔ではあやしもできないからな・・・」と笑った。

確かに、べろべろバーと言われれば、少々きついな。

ライドの顔をビビりながらも目が離せない藤原は、天界のご馳走を食べながら思った。

可奈子も（誰かに似てるよね。アゲハの幼虫？）

（それ、誰かじゃなくて虫じゃん。）藤原が突っ込む。

ヴィゴさんがラファエを見捨てず一緒に死んであげたこと、いかにも彼らしいと思った。

次は俺の番だ。

議員達が人間界で仕掛けたことを止めなきゃ。

「私、天界から手伝うわ。

藤原さんたちが議員の仕掛けたこと、止められるように。

私は人間界には帰らないわ。

天界にいてヴィゴさん達の子、預かって立派に育てるの。それとね、醜神様の相棒が見つかったの。

どうやらオオカミと合体させられたらしいのよ。」

「オオカミ？天界で俺たちを人間界に戻してくれたアイツ？」

「そうみたい。」

藤原はへえ〜と言った。

「もう一度会えないかなあ」可奈子は真剣な顔でつぶやく。「なんで？」

「私の旦那さんが誰なのか聞きたいの」

「今度聞いておいてあげるわ。多分・・・藤原さんだと思うけど？」

可奈子は真っ赤になり藤原も真っ赤になった。

「とにかくあなた達は人間界に帰って。

花子は私が飼うから。」

「また、時々会いにきていい？」

「そうね、私がいに行くわ。人間界も楽しかったし。」

藤原が意を決して言った。

「・・・あの・・・」

ライドがナンだ？と振り返る。

藤原はライドの顔にビビりながらも続けた。

「・・・喰らうメイトはどうなるんでしょうか・・・。」

ロキは「さあな、オレがまた人間飼われ身分におとされたとき、あと、アンタが議員の仕掛けを外すのを失敗した時に喰いに行くよ」と脅した。

バイセン村で静香は歯を食いしばった。

もうすぐ生まれる。

いい加減、さつさと出てきなさい。

ヴィゴみたいにぼんやりした子ね。

意識が遠のく中、手伝いに来てくれるサラは「ダメよ、眠っちゃ！」と叫んでいた。

最後のひとふんばりで静香が力むと、かわいい産声が遠くで聞こえた。

「男の子よ、静香さんによく似た真つ黒の髪の男の子だわ。」

静香は微笑んだ。

これでヴィゴに会いにいける。

天界からバイセン村に来て以来、天界の噂は聞くことがなかった。でも空は晴れ渡り、魔王はご機嫌で悪魔界を治めている。多分うまくいってるんだろう。

子供が目を開けると、ヴィゴと同じうす紫だった。

「かわいいわ。」

ミルフィが「みいこが猿みたいだって言ってるよ。」と遠慮なく言った。

静香は「そう？ 私には天使にしか見えない。」子にキスをしながら静香は言った。

「でも、多分、ヴィゴの子だもの。エロ王子になるでしょうね。」サラは用意していた産着を着せながら笑った。

「エロ王子だなんて・・・。

天界の王子よ。そうだ、静香。

天界の王ならみいこちゃんの呪い、解けないかしら？

ポルターガイストの顔に食べられるのが、あまりにも痛くて、ミルフィに自分を食べてもらったらいいんだけど。

王子の母親をイロイロ助けたんだから。

天界から一人でバイセン村目指して歩いてたときミルフィが見つめてくれなかったらどうなってたことか。ご褒美としてなんとかならない？」

「そうね。みいこちゃんそうしたい？」

ミルフィは心の中でみいここと話したようだった。

「・・・みいこはおばあちゃんのいるところに行きたいって・・・天国に。」

ミルフィはさみしそうに言った。

「ルーに頼んでみる。でも多分、神様のところに行きたいって願うだけで行けると思う。」

みいこちゃん。毎日、神界の神様にお祈りするの。いつか、必ずいけるわ。」

静香は天使だった頃のように優しく言った。

「私そろそろ行かなくちゃ。天界に。」

天界は活気を取り戻していた。

改造人間達がわいわいと大工仕事をしている。

現場監督の改造人間がルーに設計図のミスを指摘し、ルーはしょぼくれていた。

驚くことに街には悪魔も歩いていて、十字架をしている。
改心したのだろう。

静香は子を抱いてベンチに座り、ミサの時間を待った。
礼拝堂にヴィゴはいるはずよ。

礼拝堂の塔はもう建てられることなく、誰でも気楽に出入りできる
気持ちのいい白い建物に変わっていた。

鐘が鳴り響き、ミサが始まる。

静香は一番後ろに座った。

出てきたのはライドだった。

さすが醜神様。自信を持ったライドは恐ろしい容姿が、かえって彼
に威厳を与えていた。

（ヴィゴは？）

静香は近くの天使に聞いてみた。

（王は？ヴィゴの事よ。今どちらに？）

天使はキョトンとした。

「王？ヴィゴ？」

そして静香の抱いている子を見て息をのんだ。

「ライド様！お告げの通り、子を連れた女性が現れました！」

ライドは祭壇から駆け下りてくる。

「静香、無事に産んでくれたのだな。」

礼拝堂は歓喜に包まれた。

静香はルーに連れられ奥の立派な部屋につれていかれた。
ヴィゴに会える。

静香はせめて化粧してきたらよかったと心底後悔した。

「新しい王の誕生だ、私の役目は終わった。」礼拝を終えたライド
が入ってきて子を抱き上げ頬ずりし、心底ほっとした顔で言った。

「・・・ヴィゴは？」 静香は声を震わせた。

「・・・ヴィゴは？この子のお父さんに会わせてあげないと」
静香はいやな予感に包まれた。

ルーがあわてて説明した。

「・・・王は・・・虚無の狭間に身をおどらせた。ラファエ様に操られる自分を殺したのだ。」

静香はバイセン村でヴィゴの声を聞いた日の事を思い出していた。
アレは気のせいじゃなかった。

・・・ヴィゴ。

また守ってあげなかった。

静香が一人泣いてると、ロクサーヌが入ってきた。

「アビリル、・・・静香さん？どっちで呼べばいいんだか。
ロキが神に戻れたの。私達、天界に住むことにしたわ。」

「ロクサーヌ！思い出したの？」

「うん、久しぶりね。ヴィゴとの子供、見せてもらったわ。

私、ヴィゴの赤ちゃんの頃を知らないから、ヴィゴに見えて仕方ないの。

とてもかわいいわ。」

「ホント？猿って言われたのに！！」

「ありがとう、産んでくれて。ロキがあんなに孫煩惱だとは思わなかったわ。

ヴィゴのコト、ホントになんて言えばいいか。
でもロキは神に戻れたの。」

ヴィゴはプリュキトスではなくなったわ。

なんの慰めにもならないかもしれないけど。名前は決めたの？」

「醜神様が決めてくれるはずなの。」

「無理よ！」ロクサーヌは笑った。

「醜神様は全然思いつかないからロキに相談するのよ。」

ロキは変な名前ばかり提案するの。」

二人は顔を見合わせ笑った。

「ルーに会った？」

「会ったわ。相変わらず、頭が固いのよ、あの兄は。ロキのこと未だに警戒しているの。」

ロキは面白がつて牙を見せて脅かすのよ。」

二人が目を上げると、黒いパグがいた。

「ペロ！！」静香は叫ぶ。

ロクサーヌが不思議そうな顔をし、

「ペロ様？運命の神よ。オオカミに合体させられたらしいの。見る人の心で姿が決まるらしいわ。」

「？ペロはペロよ。」静香は駆け寄ってペロの頭を撫でた。

「予想外だった。ヴィゴの役目はラファエを虚無の狭間につれてくる事だった。」

そこからは、ラファエだけ突き落とせばよかったんだ。」

「ヴィゴはそんな事しないわ。・・・だって、友達だったんだから。見捨てないわ。」

「馬鹿だと思わないのか？」

「ええ、思わないわ。そんなヴィゴだから好きになったのよ。」

「アンタは天界の王を無事産んだ。その褒美は与えねばな。」

「ヴィゴに会いたいの。それが天国でも地獄でもいい。虚無の狭間でもいいわ。」

ヴィゴがいればそこは虚無じゃなくなるもの。

ロクサーヌにあの子を預けるわ。育ててくれる？」

ロクサーヌは頷いた。

「今、アイツを人間界に堕とした。与えられた残りの寿命を生き抜くまでな。」

ただ、ヴィゴのこの数年の記憶は虚無の闇の影響でほとんどなくなっている。

人間界で会ってもあんたのこともアビリルのことも覚えておらん、それでもいいか？」

「また、会えるのね！よかった。」

「エロ王子のコトだ。他の女とうまくやってるかもしれんぞ。」

なにせ、初めての相手が悪魔界のキャバクラ セクシーチョコレイトの猫娘だ。

毎日丁寧に脱毛してたから、猫娘って気づかなかったらしくてな。相当入れ込んでたらしいが、とんだ天界の王だ。」

「……そういえば、犬は好きだけど、猫は蹴飛ばしたくなるって言ってた。」

バカね、やっぱりエロ王子よ。

かまわないわ。一度は惚れさせたんだもの。もう一度、惚れさせて

見せるわ。」

ペロは耳をカリカリかいた。

「思い出させて天界に連れ帰るがいい。

人間界での寿命が尽きるまで人間界にいたいならそれでも構わん。どっちでも良いわ。

とにかくわしは忙しいのだ。

人間の子二人も記憶を消さねばな。あの涼子とか言う女。

アンタが天使だってしゃべりまくったからな。

一体何人の記憶を消さなきゃならんのだ。

じゃまくさいな・・・。

あの日に戻すか。

喰らうメイトが行われる前に。」

第十五話（後書き）

次話で最終話になります。

長々とお付き合いくださり、ありがとうございました。

第十六話

静香はヴィゴと初めて出会った空港へ急いだ。

ヴィゴから、アビリルの記憶すらなくなってる今、静香を見ても気にも留めないだろう。

いつ、記憶戻しの魔法をかけるかだ。

静香はルーから教えてもらった魔法を心のなかでくり返した。

たくさんの人ごみに紛れ、ヴィゴがぼんやり歩いてきた。

・・・ヴィゴ。

静香は駆け寄って抱きしめたいのをこらえた。

「・・・ヴィゴ先生ですよね？」静香がつぶやく。

通り過ぎようとするヴィゴをあわてて引き止めた。

「迎えにきたんです、えっと・・・大学から」

あやしくないように身振り手振りも加え、必死で説明する

「・・・迎えに？オレを？」ヴィゴはキョトンとした顔をした。

「へえ〜。」

ヴィゴは巨大なかばんの一つを笑顔で静香に渡し、静香はよろめいた。

「につほんはすごいな〜！」ヴィゴは大きく伸びをした。

空港で早くも土産物屋を見つけ、静香をせかした。

「だっせえ。ハワイアンじゃん。」とハワイキティを指差した。

「・・・しかもネコじゃん」

静香はふきだした。初Hの相手を思い出したのだ。

「そうね。ネコはカンベンね」といい、ヴィゴは「・・・アンタ、話わかるなあ〜」と感心して言った。

静香達がかつてパソコンを覗き込んだテーブルにヴィゴはカセットウォークマンを残念そうに放り出した。

「コレ壊れてるかもしれない。さっきからキュルキュル言ってるんだ。にっほんなら直せるかな？ なんとたつてにっほんだからな！」

ヴィゴは静香に微笑んで見せた。

「う・・・ん。直せるかもしれないケド。」

「連れて行つて。」

ヴィゴは家電専門店で例のごとくはしゃぎまくり、静香はウォークマンの事で店員にあきれられていた。

「とにかくもう、古いですよ。」

「古いの？ イケテないってこと？ マズいな」ヴィゴは眉をしかめた。

「オレはバイヤーなんだ。イケテなきや勤まらないんだよ。」

店員はIPODをすすめ、ヴィゴは大興奮していた。

「ねえ、君なら何色がいい？」

「・・・私、ピンクのなら持つてる。」

「おおつ。君、イケてるじゃん。」

オレはブルーにしよう。」

車の中でさっそく試したが、ヴィゴに静香はかいつまんで説明してやった。

「ありがとう。ところで君、名前は？」

「・・・静香っていうの。」

「静香か。キレイな名前だな。」

オレ、ヴィゴって言うんだ。って知ってたんだっけ？ なんで？」

あわてた静香が色々モゾモゾ言っているのを気にせずヴィゴはうれしげに音楽を聞き始めた。

静香は記憶を戻すチャンスなのにためらった。

思い出したくないこともあるだろうし。

・・・もう少しあとで。

ただ、自分の事を忘れられてるのはとてもつらかった。

急に元気がなくなった静香を見てヴィゴが心配そうに覗き込んだ。

「大丈夫？オレのセイで今日台無しだね。せつかくの休みなのにさ。デートの約束とかあっただろ？」

「そんなのないよ。今日はとても楽しいよ。

ちよつと悩み事があるだけ。」静香はやさしく微笑んだ。

「マジで？」ヴィゴはご機嫌になった。

「じゃあさじゃあさ。くるりくるり寿司っていうの知ってる？オレさ。につほんに来てさ。一番楽しみにしてたんだ。」

静香は回転寿司にヴィゴを連れて行き、（前と同じルートね）と内心笑った。

（行動パターンが変わらないのよ）

「悩み事があるんだろ？オレでよかつたら聞くて言いたいんだけどさ・・・。」

オレも悩んでるんだよな。」

「ヴィゴも悩み事？」

「ああ、でもさ、思い出せないんだよな。」

そっついながらタコの寿司をとり、「おお、デビルフィッシュ！」と叫んだ。

「静香もさあ。あんまし悩まないでいいんじゃないか？そりやさ。男につきあえて言われてるんだったらさ、相談に乗るけどさ。」

「なんて言ってくれるの？」静香は笑いながら言った。

「断れって言っよ。」

「なんで？」

「・・・おお、デイビィジョーンズ！」少し赤くなりながらヴィゴは叫んだ。

食べ終え、オカ マホリンホテルの前でヴィゴは降りた。

「今日はありがとう。大学でまた会えるよな？」

「そうね。私の友達も紹介するわ。とてもキレイな子で驚くわよ」
静香は涼子の事を思ってた。

「につほんに来てよかったよ。

につほんにはマルクスやセドリックもいるし安心して暮らせるって勧められたんだ。

オレ、なんだかここ数年の記憶がごっさり抜けちゃってさ。」

ヴィゴは荷物を降ろしおえた。

前客の大量の中国人のチェックイン手続きは猛烈に時間がかかるらしくホテルマンはヴィゴたちを思いっきり見て見ぬふりをしていた。

「しかたないね。待とうよ。」静香は缶コーヒーをヴィゴに渡し、荷物の上に座った。

隣に座るとヴィゴの横顔がよく見える。

天界の王に選ばれた時のあの疲れた表情が少し残っていた。

「ん？」ヴィゴはじつと自分を見つめていた静香を振り返る。

「少し疲れてる？」

「そうだな・・・。今はゆっくり寝たいよ。

なんだか、長い間寝てない気がするから。」

やっとホテルマンがヴィゴの方に来てくれた。

「お泊りの方ですか？お二人様で？」

「イヤイヤイヤ、オレ一人だよ。」ヴィゴは赤くなって言った。

ホテルのキーをジーンズのポケットに突っ込みながらヴィゴはお別れを言いに来た。

「ホントありがとう。楽しかったよ。また校内案内してくれよな。」
静香は微笑んだ。

なつかしいマンションに帰ると、生け花野郎から電話が入った。静香は落ち着いて受話器をとると、「もう、会えない。好きな人が出来たから。」と告げた。

なんだか電話口で男が喚いていたが静香は電話を静かに聞いた。なんでこんな簡単な事ができなかっただろう？
ヴィゴ以外の男なんて相手にできるわけ、ないのに。

久々の大学は静香にとって懐かしい場所だった。
学食でコーヒーを飲んでると涼子が入ってきた。
ひと目でわかる。あのお高いワンピース。
静香は懐かしげに見つめた。

「何？静香。どうしたのよ、アンタ、その優しい目つき。気持ち悪い・・・。」

また無駄使いしたの！とか言わないの？」

「涼子、私ね、今期で大学やめるわ。」

「ええ！なんで？」

「生け花野郎と別れたの。働きに行かなきゃ。」

「静香が辞めるなんて、だめよ。私が払う。」

「それはイヤよ。また、お金がたまったら復帰するから。」

涼子がヤイヤイ言いはじめたが、静香の前に突然現れた男に驚き黙り込んだ。

ヴィゴだった。

へたばったように荷物を机に放り出し静香にすがつたのだ。

「静香、すつげえ探したよ。オレどこに行ったらいいのか訳わかんなくて……。」

入ってみたら女子トイレだし……。怒られるし、臭いし……。」

涼子が驚いて静香を見た。

（誰よ。）

「新しい彼氏よ」静香はそう言って微笑み、ヴィゴを優しくなだめ、そしてセドリツクの部屋に向かう事にした。

ヴィゴは周りの生徒から隠れるように静香についていく。

セドリツクはまだ帰ってなく、「ありがと、ココで待つよ」というヴィゴに静香は声をかけた。

「ヴィゴ？」

「ん？」

「……記憶、取り戻したい？」

「……うーん。どうだろう。」

何？いい医者でも紹介してくれるの？

そうだな。正直どうしようもなく淋しくなる時があるんだけど。

抜けた記憶の中に友達とか、もしかして恋人もいたかもしれない。

でも自分に言い聞かせてるんだ。

オレが忘れてても彼女が覚えてくれてる。

絶対探しに来てくれるハズだ。

本当に運命があるならまたいつか会えるよ。

そう信じてるんだ。」

静香は記憶を戻す魔法は忘れる事にした。

もし、思い出せなくてもかまわない。

ヴィゴはヴィゴだもん。

静香はやさしく微笑んだ。

「きつと、そうなるよ。応援するわ。」

「ホントに？なんだか未来が見える気がしてきたよ。ありがとう。」

静香がヴィゴを残し、セドリックの部屋を後にすると、涼子が追いかけてきた。

二人で大学を歩いて回った。

「静香がいなくなったら淋しいな。」

でもね、アイツと別れたのは大賛成よ。また、いつでも言ってよ、仕事紹介するから。」

春の日差しがここちよかった。

静香は緊張の面持ちで壇上にあがるヴィゴを見つめていた。

壇上から静香に合図するヴィゴに少し照れながら。

「いい男じゃない？私、いつも神様をお願いしてあげてたのよ。」

静香にいい男が見つかりますようにって。「涼子が真剣な顔でつぶやく。」

「ありがと。」静香は微笑んだ。

ペロが消したはずの記憶は藤原にだけ残っていた。

今日は山下が可奈子に告白する日。

同じ過ちを繰り返させるものか。山下も死なずに済むんだ。

いても立ってもいられず、可奈子のマンションまでジャージ姿で向かう。

ピンポンと押し、可奈子を呼び出した。

まだ、化粧もしていないジャージ姿の可奈子がモニターに現れる。

「藤原？何の用よ？忙しいのよ」と言われ藤原はしどろもどろになった。

（行くなよ）そう言いたかったけど、相変わらず勇気が出ず藤原はモジモジしている。

「何？」

「あの・・・さ。ふりかけ忘れて・・・。」

可奈子はあきれたように肩をすくめ、オートロックを空けた。可奈子の家の前まで来ると可奈子が腕組みをして待っている。

「何か言いたいんでしょ？男らしく言えばいいのに！」

藤原はアワアワとあせり、真っ赤になる。

その様子を見て肩をすくめ、部屋に戻りかけた可奈子の手を思わずつかんでしまった。

「行くなつて！」思わず言葉に力が入る。

「俺、好きなんだ。可奈子の事が！」

気がつけば叫んでいた。

（ちよつと、何よ。だまつてれば。恥ずかしい・・・。）そういう可奈子も真っ赤になっている。

「・・・何よ。私に命令するの？」可奈子が消え入りそうな声でつぶやく。

「命令するからには責任取ってよね。」

藤原はそのまま可奈子の手を引き、待ち合わせの喫茶店にいった。おしゃれな喫茶店でピアノの生演奏を聞き酔いしれていた山下が猛烈に怒った。

可奈子がよれよれのジャージで現れたからだ。

「ナンだよ、可奈子。そんな格好で。」キメキメの山下は恥ずかしそうにつぶやいた。

「私は私よ。いつもこんな格好だから」可奈子は開き直る。側に立ってたジャージ姿の藤原を見て山下は軽く笑った。

「全く、お似合いだな。可奈子には幻滅したよ」山下は髪をさつかきあげ、店を出て行った。

「・・・お似合いだって」可奈子がつぶやく。

二人はそのまま喫茶店を出、近くのコンビニに行った。

二人のポケットに入っていた有り金全てはたいて豚マンを一つ買い、公園で仲良く二つに分け、だまって食べる。

「・・・いいの？俺でも？」藤原はつぶやいた。
可奈子はうなずく。

二人は見つめあい、そしてキスをした。

「・・・初めてのキスなのに、なんで豚マンの味がするのよ。」可奈子が悲しそうに言った。

藤原はあわてて口をぬぐい、再度挑戦しようと可奈子の肩を抱き寄せた時、

「・・・取り込み中ゴメンね。この辺にさ・・・墓地知らない？」不思議な目の色をした男が話しかけてきたのだ。

・・・ヴィゴさん！藤原は叫びそうになった。

「は？墓地？・・・変なヤツ・・・。」

可奈子はあわてて藤原を連れベンチを離れる。

「知らないんなら、地縛霊でもいいんだ。困ってるんだよ！！」男

が叫ぶ。

「・・・あの雑居ビルなら幽霊出ますよ」藤原はパンテノン神殿風のビルを教えてあげた。

「マジで？ありがと！助かったよ」男は取っておきの笑顔で微笑んだ。

「君達も幸せそうだな。オレもさ、すっげえ幸せなんだ！」男はそう言つと公園の入り口で待っていた女の人の所に戻っていった。

「あれ？お姉ちゃんの友達だ。」可奈子がつぶやく。

「ふうん、あれが彼氏なんだ、今度からかってやろうつと。」

「・・・とにかく幸せでよかった。」

藤原は静香に会釈し、静香は微笑んだ。

ヴィゴは静香の車にのりこみ、幽霊ビルに向かったようだった。

藤原達は歩きはじめた。

空には月が本当にキレイだった。

そして堤防によじ登り、藤原は未来を思った。

天界との約束を果たさなきゃいけない。

唯一、藤原が得意としていた科学が役に立つ。

いつもテストでは山下と競り合っていたのだ。

もし、山下と二人で力を合せれば・・・。

いつか必ず・・・。

静香さんもヴィゴさんも力になってくれるだろう。

藤原は可奈子を抱き寄せ、可奈子はうつと目をつぶっていた。

ペロは魔方阵から降り立ち、堤防の上にとびのった。美紀に頼まれ、人間界を見に来たのだ。

そして藤原達の方に近づく。二人の話し声が聞こえてきた。

「・・・みんなで藤原の夢、実現させようよ。」

パパは世界中の著名人とコネがあるし。力になってくれるよ。

皆、平和に暮らせるほうがいいもん。

そうだ！お姉ちゃんにも手伝えよう。

いつまでも大学卒業しないで遊んでばっかなんだもん。

世の中の役に立ってもらわないと。

ああ見えても、お姉ちゃん、頭いいんだから。

そうだ！今からお姉ちゃんとこに行こう。

初めての彼氏、紹介しなくちゃ。」

小雨が降り始め、二人はあわてて立ち上がる。

可奈子は藤原の手に自分の手を滑り込ませた。幸せそうに歩く二人をペロは見つめていた。

（人類滅亡を食い止める奴等がきつと出てくる。オレはそう信じてる。）

ヴィゴが最後に残した言葉をペロは思い出していた。

「そうだな。ヴィゴの言うとおり。」

人間も捨てたモンじゃないな。

・・・少し信じてみようか。運命が味方するだろう。それに時間はまだある」

そして堤防の近くに止まっている車の中でヴィゴが静香にキスして
るのを呆れたように見つめた。

「なんと、手の早い。天界の王には相応しくない貞操の持ち主だな。
天界は息子に任せる方が良さそうだ。」

ペロは軽く笑い、雨を払いのけるためプルプルツと体をふるわせた。
そして魔方阵を手早く書き、天界に帰っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8371e/>

悪魔買い

2010年10月8日11時49分発行